

メー 本 [き下 ジ \forall ガ L ジ 3 た 架 ン Ū 空 は & 三 つ 0) 読 み 圳 方 0) きり文芸 都 全 体 市 的 Ν な 7 市 テー ガジ を共通 ン 7 を設 NONSTOP の舞台とし 定してい る。 の第三号をここ たシ S エ کے ア 0 は F, に ワ 北 お] 陸 ル 地 届 け 方 F, す 0) る。 ベ 海 ル 沿 ズ い で を

が、 ること Z れ \Rightarrow に 口 は 加 そ Ū 番 え んて、 7 外 編 Ł う 的 毎 号 7 に と 両 0) 統 う 者 エを統 は テーマ 合 青 į 春_ も設定した。 をテーマとすることだ。 夏休 み とし こちらも普段は た。 青 春 時 代 表と裏 な 5 で の 二 は つ 0) が 各 種 あ イ る ベ \mathcal{O}

だ

1

-と密

接

に

絡

む

丰

1

ワー

F

かと思う。

ŧ 比 に なる 追 ح い 0) よう か 本 べくどこ け 7 7 ガ な ジ (J 事 つ から ン 愭 7 に か 読 V 掲 5 ただき 載 h でも して 先行 た 楽 い する弊事 る作 Ĺ () 8 るよう 損 品 は は 務所 さ 続 き物 せ に 発 な は 行 とし な 1) 0) つ 出 電 来 7 7 V 0) 0) 7 5 るが、 性 ガジ ŧ 質 が り ン で 強 で 「signal」 きれ あ 8 る。 に ば な 第 つ 掲 7 載 무 い ょ る。 0) 諸 **n** 順 そ 作 品 れ 6

力を得 別 L な **今** 7 に つ 口 本 収 . 急 創 7 マ ガジ 録 7 病 刊 1 時 す る に る ア ょ ン に 毎 \subseteq 月 に コ り 7 ン い ユ 休 は ~ ・ラス う] 載) を 試 ズ 私 \vdash X 行 4 が もさ コ 参 榎本 つ ン て選 ン 1 加 -秋と関 せ \sim X ば 7 を デ 7 開 せ い 1 い 7 た る。 係 催 ア い 総 だ L あ た 7 合 さら る い 学 作 だ 7 い 院 に た 家 い 1 だき、 た。 る。 大 お 普 ょ 阪 力 校 段 び バ その 丰 作 か 5] t 家 1 上 ラ 榎 0) ラ 位 ク 卵 本 作 た 事 ス タ ち、 品 1 務 1 を表 に デ 所 ザ 計 0 制 紙 い 1 作 八 7 あ 名 0) 学 る は 本 **う** 科 で い 5 ح お は 0) 1 \Box 全 世 絵 名 と 面 話 は لح 協 は に

ると大変う け ń る と幸 1) 0 あ る 感 想 8 榎 سے 本 意 秋

など、

コ

メ を

ン

1 つ

機 7

能

な

などご利

用 そ と

0)

上で

V

た 楽 参

だ

け

る

ح

と

願

8 踏

ま 4

な

1)

ħ

で 7

は に

1

h 作

で 家

い

た

だ

本

誌

を

V

لح

5

0)

切

り

板

各

加

イ

ラ

Ź

1

]

タ

1

が

新

た

な

展

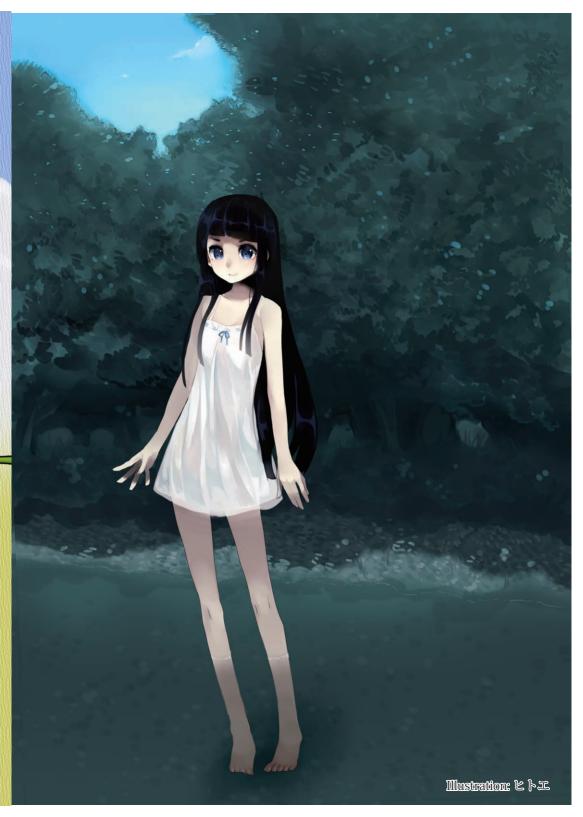
開

を

手

に

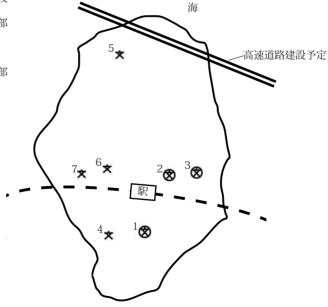
やろうぜ!	Dear My Life イラスト	クローバー	〈タイトルクリックで該当のページに飛びます〉舞 台 設 定	イ ラ ス ト	口	はじめに
七本強············· 75	ヒ 貴 水 玲 ・・・・・・・・・・・ 41	伊藤由希 7	=のページに飛びます〉	(掲載順)	4 3	はじめに2
	解説	ターニング・ポイント	せて頂きます) イラスト イラスト かたりまえのこと。	平行線シンドローム	響け、私たちの歌声	Fr イラスト N
	233	橘ぽん 209	イラストのみ掲載さ 新月竜 207	正午あきら 177	うらら 広野未沙 145	伊藤 由希 111





位加:白鹿

- ☆海に面した盆地上の小都市
 - ○海->山でいきなり切り立っており、海に面していない周りは山で囲まれてる
- ☆高速道路開通の賛成・反対でもめている
- ○大きな都市(県庁所在地)と都市を繋げるための道路で、市の活性化を見込んでいる
- ☆市内に男子校(昇星学院)、女子校(優華女学院)、共学がそれぞれ存在する
- ☆駅前に大きめのショッピングモールができたばかり
- ↓ ☆地主=旧家がある
 - ○「塚本家」という地主が存在する
 - ○本家・分家があり市内に家が散らばっている
 - ○高速道路問題では一族で揉めている
- 1→市立中央高等学校
- 2→昇星学院高等部
- 3→優華女学院高等部
- 4→市立第一中学校
- 5→市立第二中学校
- 6→昇星学院中等部
- 7→優華女学院中等部





あらすじ

高速道路問題のこともあり、楓が千伽にちょっかいをかけるのが気に食わない孝士。楓と孝士は険悪な仲になってしまうが、一緒に千伽の家の万引き問題を解決させ、晴れて友達になった。

佐々口孝士

中学三年生。千伽の幼 馴染。千伽のことをよ く気にかける。

高橋千伽



中学三年生。本屋の娘。 本が好きで大人しい性 格。

塚本楓



中学三年生。地主の分 家の次男。一匹狼で少 しわがまま。

第三話 真夏日の夕立

高橋は中央高校志望で特に問題ないよな?」

先生の開口一番の言葉で三者面談の結論は出た。

合格できると思います」

成績も内申も特に問題ないですし、

このまま普通に受験勉強をしてい

れば難なく中

高

に

先生からの言葉にお母さんは安心したようだった。 私が中高 に進むと思って全く疑って

いない。

でもそれは、私自身も同じ。

「高橋、なにか受験で不安だったり分からないことはあるか?」

ここでもしも中高を受けないと言ったらどうなるだろうか。

以外の高校といったらめぐみが通う優華の高等部くらい。

あんなお

金が

かかる所、お母さん達が許すわけがない。

この近辺で中高

0) 高 別に優 ||校を選びたいとも思えなかった。 華に行きたいとは全く思わない。 だからといって中高 に行きたいとも、 どこ

か

別

高 [橋?]

え、 特にありません」

それ以上でもそれ以下でもない、 受験勉強はしている。やらないと困るのは自分だ。 こういうのを目的が

ない

っていうんだろうな。

確実に 休み入って一 時 間 は 消 週間 えて い つ 7

(J

る。

東京に行くぞ」

がやって来て、そう言 三者懇談を終えて孝士の家 い放った。 で毎 年 恒例となっている宿題会をしていると、 突然塚本くん

「「……とーきょー?」」

私と孝士の声 が自然と重なる。 生まれたころからの付き合 いだからか、 こういうことは

少なくない。

るはずだけど、この二人はすこぶる仲が悪 切とっていないらしい。私と絢乃お姉ちゃ 私の姉と孝士のお姉 さん 0 絢 乃 お 姉 かちゃ いい h ŧ んは結 姉が県外に 同 () 年 構 仲 で、 が 大体 出 1) V 7 のだ 0 しまった今、 時 たけど。 間 を一 緒 に過ご コンタクト 7

まぁあの姉だし、 仕方ないと思う。

場所だっての」 「二人して東京を異 国の地みたいな捉え方すんなよ。 新幹線 で二時 間ちょ () あ れば行ける

私と孝士が不思議そうな顔をしていたらしく、塚本くんは呆れたように溜息を吐い た。

「だって、突然すぎて」

「そんなもん簡単だ。お前らが集まるのは昨日の千伽からのメールで知って、 「まずお前がうちに来たことから突然だけどな。なんで俺らが今日集まってるのと俺 の場所を知ってるんだよ。千伽ん家みたく本屋でもなんでもな いただの一般家庭 お前 な の家は . の家

うちの住所リストに載ってた」

「そんなもんがあるのかよ塚本家は?」

更に孝士のお茶を勝手に飲む。半分以上入っていたお 孝士の雄叫びをよそに、塚本くんは私と孝士が囲んでいる机の前 茶 があっという間 に座った。 になくなった。

「てめぇ……」

「やっぱ夏はチャリに乗るもんじゃねぇな。水分もってかれる。 住所リ スト は 冠 婚 葬 祭で

なんかあった時とか用。家族構成なんかも載ってたぜ」

「あぁそっか。それにしてもプライバシーもくそもねぇな。さすが田舎」 けれど孝士に怒っているわけではなさそう。なにかを言おうとしたようだけど、 今の言葉に塚本くんの方眉がピク、と上がった。なんのワードに 反応したんだろう。 結局

な

る

孝士は分かっていないけど、少しだけ不穏な空気が流れたので断ち切ろうと話題 を

ことにした。

にも言わなかった。

「塚本くん、自転車には慣れた?」

「あ?」

できるだけ明るく言ったつもりが、 しまった地雷だった。 さっきよりもあからさま に

眉

が歪んでいる。一方で孝士は吹き出した。

「てめぇは笑うな!」

「だって普通に考えて中三にも てもよ……」 なっ てチャ IJ に · 乗れ なかっ たとか V くら人生 初 だ

まく な 私 Ŧ. 伝に内 月に 休み か てい なかかっ 明け 緒で孝士と店 起こった万引き騒 るみ 0 た 月曜 たようだ。 いだけど。 Ę 心を監視 ぎこちなく その後、 動 L 0) てい 時、 、自転車 塚本く る時 人でこっそり練習したみたい に h で登校する塚本くんがい もその話 が自 転 題 車 が上が を持 っ り、 てい 孝士に な た。 で今では 1 、ことが 初 か め 5 うすっ 7 か 丰门 乗 わ 明 か る n L た。 り た か らし らう

ヤリの話をしに来たんじゃ ねえよ。 東京だ東京。 来週行くぞ」

あ

のな、

中三の

俺らに東京に

行く

金が

きある

わけねぇだろ。

お前ん

家

Ü

B

ね

え

h

だから」

お れだって家 に は一 銭も金出してもらわね えよ。 お年玉崩 ずし

孝士は意外そうな顔をしたけど、私はそうでもなかった。

自腹で買ったみたい 本く んは お家があ だし、 まり好きじゃ 家 の話を振られ ない。 前は るとすごく機嫌 反抗 期 の 一 が悪くな 種 か なと思 いった。 つ た け ٤

É

転

車

Ł

お前らどうせこの夏休み は 宿 題やっ て受験勉強するだけだろ。 日二日 遊 び に 行 つ 7 ŧ,

問題ねぇよ」

まさか自分名義

0

金が

小

遣い

・程度

しかないとか

言わね

えだろ?」

B そう言われると否定できな 店 番 で消える はず。 部 活 () を 無 事 めぐみと一 引退 L た孝 日遊ぼうと約束し 士も 同 U ようなも てい 0) だと思う。 るけど、 は受

方が大きかった。

「そりゃ俺もお年玉貯めてっけど」

私もし

それにしたってピンとこない。自分が東京に行くなんて。

そもそも東京ってなにがあるんだろう。 東京タワーに皇居? ディズニーランドは千 葉

だし、あ、新しい電波塔が建つんだっけ。

「金あるんなら決定。拒否権なし。詳しいことは千伽にメールしとくから。あと日帰りだし、

なにも言わなきゃバレねぇと思うから親には言うなよ。うるさそうだし」

そう言うと勢いよく立ち上がって部屋を出て行ってしまった。まるで竜巻が通

り巣

「あいつ、あれ言うためだけにここまで来たわけ?」

ていったかのような気分。

「一緒に宿題やれたら良かったのにね」

「それは嫌だ。あいつうるさそうじゃねぇか」

行った。私も付いて行こうかと思ったけど、なんとなくタイミングがずれてしまった気が 孝士は空になったコップを持ち、「ついでにあいつ見送ってくる」と言って部 屋 を 出 7

してそのまま座っていることにする。

持っていたシャーペンを置いて東京のことを考えてみ

には 内緒だというし、 気 もしたけど、 それよりも「いつもと違うことをしてみたい」という気持ちの 初めてのことだらけになる。

じ やあ孝士、 またね

おう。あと一日やれば終わるよな。 東京行く前に終わらしちまうか」

孝士もなんだかんだで楽しみにしてるんじゃ h

夕方、 孝士の家から私の家までは歩い 孝士の家を後にした。 この後帰ったら閉店まで店 ても十分弱。 塚本くんが言ってい 番 をし な た通り () とい 自 け な 転 車 だと暑

ので徒歩で帰る。

高橋さんだ」

クラスの子で、もう一人は中学から優華に通ってい 孝士の家から数十メート ル離れたところで、 角から同 、 る 子。 『級生が! 小学 曲 校のころからカウ がってきた。一人は ン する 別 0)

「高橋さん宿題終わった? と、二人とも何度か同じクラスになったことはあるけどそう親 今年受験だからいつもより少なくてい しくはない。 V けど、 そ れ に L たっ

て面倒だよね」

うん。大体は。ちょうど今孝士の家で」

言いかけて「しまった」と思った。案の定二人が含みをもった笑みを浮 かべてい

相変わらず佐々口くんと仲いいんだね」

学校でもけっこう一緒に居ること多いよ。 付き合ってるんじゃない かなってくらい」

まただ。 頑張って聞き流さないと。

一まれ 学 生 た時 0) 時 から一 は 男子 に 緒 に か 5 居るだけなのに、 か われるくらい だっ 男と女だってだけでこん たけど、 中 -学に入ると女子 な風 に か 言 5 わ 執 れ 拗 る。 に 孝士

との

関

係

を

聞

か

れるようにな

いった。

運動部

に

入ってて、

成長期

で急激

に身

長

が

伸

び

た

14

を気にしている女子はそこそこの数居る。

「付き合ってないよ。幼馴染なだけ」

この台詞を言うのも何回目になるだろうか。

これでもしも「付き合ってる」って言ったらそれはそれで憎悪にも似た反応をぶつけて すると二人はつまらなそうな顔をした。 期待はずれの答えだったんだろう。

くるくせに。

たった数分のことだったのにすごく疲れている。 「ふーん、そっか。まぁ気をつけた方がいいよ。佐々口くん狙ってる子多いし」 これもお決まりの文句。はいともいいえとも取れないような返事をしておいて別 れ

み んなそんなに誰かと誰かを恋愛沙汰にしたいのか。 それとも、 自分がそうなりたいと

私にはよく分からない。いう願望の裏返しなのか。

先月十五歳に こういうことは時 になっ 間 たけど、 を重ね れば まだなにも見えてこな 徐 々に 理 解 していくもの な 0) かと思 つって

* * *

てここまできたけど、 早 本くん 朝七 時 に 三十五分。 は 駅の改札前で七時三十分に集合と言わ 夏休み まだ塚本くんの姿は見えない。 でなけ れば 優 華 Ġ 昇 星 0) いれてい 制 服 姿 を見 た。 孝士と一緒 か け ると思 に わ バ れ スに る 駅 乗っ 前。

「暑い……。発案者が遅刻とかなめてんのか」

孝士はシャツの襟元をはためかせながら低い声で唸った。

「受倹ごっとらたく、受けさせて、このえで「まぁ、まだ五分しか経ってないんだし」

「受験だったらテスト受けさせてくれねぇぞ」

できないといけない時 ビアだけどまっとうな正論になにも言えなかった。 期にきている。 確 か ?に時 間 や体調 をしっ かり管

理

わり、道混んでた」

Ŧi.

月に

それから二、三分待つとようやく塚本くんが現われた。

本屋で万引き犯を捕まえてくれた時

も思ったけど、

私服だと印

象が少し

変

わ

今日は白 いうよ り、 り、 のタンクトッ 高校生 0) 格好に見える。 プ の 上 に 青緑のネルシャツを着ている。 制服よりこっちの方がしっくりすると思う。 下 は 細身のデニム。 中

孝士は

紺色

0

シャ

ッ

に、

薄め

のデニム。

私はというとスカートは

動きにくいと思っ

た

か

下に らチ エ レギンスを履 ックの タンクト 1 7 い ップの上に半そでの白 る。 あと日差し防 止 に カーディガンを着て、 キャ スケッ 1 帽。 \Rightarrow は 黒 0) 鞄 シ 0) \exists 中 だ 1 け 1 パ ツ

やっぱ車じゃなくて新幹線にして正解だな。車じゃ 時 間 読 8 ねえる。 まぁ 風 情 もな に ŧ ね え

ご迷惑を 銭 的 か に 車 á で連れて行ってくれた方が助か はい かない。 つ た、 とは言わない でお 1 た。 運転

から新幹線にしようと思ったんだけど」

孝士がガミガミ文句を言い、塚本ご迷惑をかけるわけにはいかない。

Ż

んがそれを聞

き流す

と切符を買

って電

車

に

乗

つた。

手

さんに

ここから新幹

線

が通

る

駅まで出る。

しくなってきた。 普段 \Box 1 カル線 ですら乗る機会などほとんどない。 しかも今日は大人が居ない。 少 l

東京まで二時間半あるんだろ? 寝てるから着きそうになったら起こして」

昨日夜遅くまで勉強をしていたらしく、 乗務員に新幹線の乗車券を見せた後、孝士はそう宣言して眠りについてしまった。 少し寝不足気味らしい。 朝、 塚本くんを待って

いる間に何回かあくびをしていた。

つまんねぇ奴だな。こういう日の前日くらいさっさと寝ろよ」 塚本くんは面白くなさそうな顔をしながら隣の孝士を眺める。 席は孝士が通路側

で塚

本

「受験生なんだから勉強するのは普通だよ」

くんが窓側。私は塚本くんの向かいに座っている。

もしれないけれど。 しと称して本を読む時 そう言ったけど、私はあまり勉強に集中できていない。宿題が終わってしまうと気晴ら 間が増えてしまっている。 洋書だから英語 0) 勉強だと言い 張 るか

「そんなガツガツ勉強して、昇星にでも入りたいのかっての」

春先からそんな気がしていた。 塚本くんの何気ない一言が私の中のどこかに深く突き刺さった。 孝士の成績ならここまで勉強しなくても中高

に合格でき

る。 それじゃ な んで参 考書 を 何冊 ŧ 買 へったり、 寝不足になるまで勉強をしてい 、るの か。

「お前なにも聞いてねぇの?」幼馴染なのになにも知らない。

「し、らない」

そう答えるしかない自分が情けなくなってきた。

噂されるほど一緒に居るのに。

「いくら名門だからってここがど田舎な ねぇ気がするけどな」 0 は 変わ んねぇか 5 あ んな所行 っ たって意味

まった。県外からも受験してくる人いるのに。 二年ちょっと学年一位をキープし続けている秀才は市 0 名門校をあっさりと否定してし

「そういう塚本くんは中高に行くの?」

うな質問だった。 うなものを見つけたかったんだと思う。そんな潜在意識 自分の進路がきちんと見いだせなくて、人の 進路 に になに が生み出した、 か参考というか、 一見誰でも聞 活路 に な るよ

行かねぇよ。N市で進学はしねぇ。東京の学校に行く」その質問に塚本くんは予想外の答えをくれた。

「へ? 東京?」

なんとコメントをしたらいいのか分からなくなる。

だからさ、東京を外国みたいな所だと思うなって。今まさに向かってるとこだぞ?」

塚本くんは呆れたような声を出した。

東京、今確かに向かってる。けれどそうするには新幹線代をいう中学生にとっては莫大

なお金を出さないといけなくて。

幹線はこんなに早いのに二時間半も必要として。

,場所であることには変わりない。

塚本くんは、 N 市が嫌いなの?」

そういえば小学校も市外の私立に通っていた。

「別に嫌いじゃねぇよ。嫌いなのはお家柄に蔓延ってくる奴ら。あそこに居たらどうしたっ

お前知らないかもしんねぇけど、小学校、一 年の一学期まではN市にいたんだぜ」 て家の名前がついて回るだろ。

全然知らない。 一学期までということは四ヶ月足らずだし。

もいなくなってるかなと思ったら変わんねぇし。だから高校はN市出る」 とかいてうっとおしいから変えた。んで、中学になったらそんなガキみたいなことする奴 親に言われて気持ち悪いくらい金魚のフンしてくるやつとか、 無駄に 喧嘩 売っ てくる奴

「小学校は私立だったんでしょう? なんで中学は昇星じゃなくてうちにしたの?」

う変わらないのかもしれない。 「近いから。やっぱ家遠いとだりぃよ。早く起きねぇとだし」 そこはそんな理由なのか。それに、 塚本くんにとっては同じN市だから公立も私立もそ

塚本くんはそれを止めた。筒に入ったチップスとお茶を二本買う。 通路の向こうからお菓子やお弁当をつめたカートを押しているお姉さんがやってきて、 一本を私にくれた。

「ありがとう」

「まぁ昇星も一応考えたけどな。 出てきて、それを破る。 ん、とだけ返事をした塚本くんはお茶を一 族って昇星か優華行かされる場合多い 口飲 んで筒の 蓋を開けた。 中 か ら銀 色 0) 袋が

うちの一

し。

なん

かそれに逆らってみたくて公立にしたけど、そうして正解だったよ」

一どうして?」

塚本くんはチップスを一枚食べて、 横で眠っている孝士と私を順番に見た。

「おもしろいのに会えたから」

まり見ることのない笑顔が、浮かんだ。

* * *

「すごいね……」

「ここだけでN市の人口分いそうだな」

「や、それはねぇだろ」

十時半過ぎ、新幹線は無事

東京駅に到着した。

改札に出た瞬間、

その人の多さに圧倒さ

れる。

どこを見ても人、人、人。 みんな早足でせわしなくどこかへ向か ってい 、 る。

「花火大会みたいだね」

「なんだよそれ。俺も入れろっての。で、どこ行くよ?」

「そうだな。あ、そういえば来週の花火大会行くだろ?」

ようにしたから定価で買わないといけなかったけど。 を取り出 人の邪魔にならないように、大きな柱に寄った。私は肩掛け鞄 す。 店番をしている時にこっそり買ってお たものだ。 普通 !から小さいガイドブック のお客さんが買った

「そんなもん用意してたのかよ」

「だって東京なんて全然分からないし」

ガイドブックを何枚かめくって目当てのページを探す。 ふせんを貼っていたのですぐに

「ここに行う

「ここに行きたいな」

そう言うと孝士と塚本くんは本を覗き込んだ。

「東京タワーってベタだな」

「でも東京つったらそれしか思いつかなくね?」

「他にもいろいろあるだろ。浅草とか柴又とか」

「五時過ぎの新幹線で帰らないといけねぇからちゃっちゃっと行くぞ。じゃあとりあえず

柴又も確か載っていた。下町って感じの場所。塚本くん、けっこう渋好みなんだな。

東京タワーな」

そう言った塚本くんはさくさく歩き出してしまった。 なんの電車 上に乗る のか分かってい

るんだろうか。

「あいつは本当俺様だな」

孝士は呆れつつも塚本くんの後に続く。私も孝士の横に並んだ。

「でも、塚本くんが言い出してくれなかったら私達こんなところにいないよ」

「俺ら一応受験生……ま、一日くらいいいか」

なんだかおかしくて、二人で笑ってしまった。

夏 (休みということもあって東京タワーは混 んでいた。 入るまでに三十分ほど待つらし

V

「あちぃなぁおい」

塚本くんは 新幹線 の中で買ったお茶の残りを一 気に飲み干した。 空い たペ ッツ \vdash ボ 1 ル

少し離れた場所にあったゴミ箱に投げ入れる。

「確かに……。東京ってなんでこんなに暑いんだ」

余裕もない。キャスケット帽があるだけマシな方だとは思うのだけど。 孝士も額の汗を拭いながらげっそりしている。私はというと暑すぎて二人の会話に入る

分析すんなよ、余計に暑くなる」

「人が多いのと、

アスファルトばっかりだからじゃね?」

心持ち涼しくなった気がする。 入場待ちの列は少しずつ進み、 ようやく屋根がある場 所にまで到達した。

日陰

に

になって

「千伽、大丈夫か?」

「なんとか……」

「中入ったらクーラーきいて涼しいだろ。もうちょっとの辛抱だから」

孝士に励まされて少し元気になった気がした。入場口は見ている。 もう少しだ。

お前らってさ、ずっとそんなんなの?」 列が二歩進んだ時、 塚本くんが私と孝士をやたらと凝視しているのに気がついた。

列がもう一歩進んだ。私と孝士は互いの顔を見合わせた。

生まれた時から付き合いある幼馴染ってのは分かったよ。

自分らじゃ意識ないってか。

0)

t

に ï たっつ てそ 0, 纏 ってる空 気 ? が 特 殊 な 0) 気 付 か ね え 0) ?

本くんがなにを言っ ているの かよく分 から なか つった。 孝士は なぜか表情を堅くし

る。どうしたんだろう。

「千伽、 5 れるの」 自分でおかしいって思わねぇの? 学校に女友達が一 人も 1 ね え 状 況 に 平 気 で V

まう。 列 が一気に 塚本くんに腕 進んだ。 を引っ張られ 人々が ?動くタイミングに て前 に進 むことができた。 間 に 合 わなくて、 後ろの 人とぶつか

つ

てし

言わ れ て気が つい た。 な h で私、 平 気 な h だろう。

友達が 体 育な h 一人も かは女子だけでする。女子同士 いない わ けじゃない。 めぐ み の方が話がし が (V る。 でも学校は違うから やす į, 時 ŧ あ る。 頻 然繁に 会うわ

それは、 孝士と塚本くんがいるから」 じゃ

な

でもお前 俺とダチに なる前 からその点に おい ては飄 々とし てたじ B ね え か

ほ ぼ П からでまかせだった答えは一瞬にして崩された。

元 () から一人で 急に体 温が上昇した気がする。 い ることは 得意だっ た。 姉と仲 なにを考えていたの 良く遊 h だ 記 憶 か な 分 h か 7 らなくなる。 殆どない Ų 小 学

つ

た

か

低

学年 実 害 は 時 な は か っ 意 た 味 Ļ なく 特 に 仲 間 な は h ずれ と ŧ 思 にもされ わ な か た。 つ た。 V じめられたというわけでは なか

て忙し そ れ は V 人だっ 孝士や絢 た。 乃 お 姉 ち B んが () たから? でも 絢 乃 お 姉 ちゃ んも習 1 事を多くし

逆のことをいえば、孝士がいないと平気じゃないの? そうなると、孝士がいたから私は平気だった?

「ただでさえ暑いんだから変なことで千伽の脳みそ使わせんなよ、 ア

孝士の声で思考が遮断された。 浮ついていた意識が上昇する。

「思ったことを言っただけだっての」

「それが変なことだって言ってんだよ。ほら、もう入場券買えるぞ」 列はいつの間に窓口の傍にまで来ていて、あと四、五組後くらいだった。

「ずっと立ってたから腹減ったな。中入ったらなんか食おうぜ」

さっきの話などまるでなかったかのように孝士は全然違う話を始めた。 塚本くんも言及

私はただ意味もなく笑うしかなかった。

しようとしない。

「こんだけ人いると景色もくそもねぇな」 エレベーターで一気に展望台 やっとタワーの中に入れたけれど、 の階に上がったから耳の奥がキー 中も中でたくさんの人で賑わっていた。 ンとしている。

地道に順番待てば最前列いけるだろ」

ぼ見えない。分かるのはものすごくのっぽのビルと、 二人の言うとおり、窓際には人が一寸の隙なく並んでいて背の低 いくつかの雲が浮かんでい () 私 には外の · る 青 景 色はほ

塚本くんがなにかを見つけたようで自分が指差した方向へ駆けて行った。その付近 には

床が変になってるみたいだぞ」

いあれ見ろよ。

特に 人が集まっていて、 ここ からではどん なも 0) な 0) かよく分 か 5 な

ようだった。 孝士と塚本くんの後を追 確かパンフレ ッ V かけ、 \vdash - に書 人と人 いてあ 5 の た 間 _ から様子を窺うと床がガラスになって ル ックダウンウインドウ』 だ。

る

「すげ、真下が見える_

下を覗き込むように見

た。

どうやって人混みをはねのけ たの か、 塚 本くんは ル ックダウンウインドウの上 に 17. つ 7

か。 ら恐ろしくて仕方がな 真下って、地上のことだよね。 私だったら誘 わ れ てもあの上には立ちたくな ここから 何メ 1 () トル なに ŧ 距 か 離 あ が 5 あ á 7 床 0) が抜 に 怖 け < た な らと考 0) だ えた ろう

「千伽と佐々口も来いって。 楽しいぞこれ。 車 が全部チョロ Qみたいに見える」

た。 の地上が見える。 Ξ ルックダウンウインドウの目の前にまでくると、 ロQってなんだろうと思いつつ、 人が離れて行く隙 透明な床からはるか百何 をつい て塚 本くん メ 0) 傍 1 ル に 寄

「……高いね」

正直今の時点で怖くて、気の利いた感想が思いつかない。

鳴りするくらいエレベーターで上まで上がったじゃ ね え か。 そんなとこ居 な

ち乗ってみろって」

てその上に立 本くんは自 たせた。 一分がル ックダウンウインド ウか 5 出 た代 わ り に、 私と孝士 0) 腕 を 引 つ 張

思ってもみない力の強さで、私は簡単に引っ張られてしまう。

0

白 かい合わせの孝士は塚本くんに文句浴びせたいモードだった。

「お前なぁ、言えば自分で乗ったっての」

「いいから下見てみろよ」

孝士とほぼ同じタイミングで下を見た。 脇から見るのとじゃまた、 感覚が違う。

だってこれ、本当に今床抜けちゃったら。

「勇気があるならジャンプしてみてもいいらしいぞ」

「無理、ぜったい無理!」

の ? 「塚本、これはこれでい いる。 俺らまだ下しか見てねぇぞ」 いけどさ、ここって本来高い場 %所から 0) 景色を見るところじゃ ねぇ

た時はうだるくらいの暑さだったのに、今は肝試しでもした後のように背筋がぞっとして

塚本くんの提案を全力でお断りし、すぐさまルックダウンウインドウから出た。

外にい

俺、透明床乗ったら満足しちまった」
孝士は未だ人混みが引きそうにもない窓際を指差した。

塚本くんがしれっと見物拒否をすると、孝士は塚本くんのこめかみあたりを軽くどつい

「俺はしてねぇよ。 た。 俺と千伽は待ってでも見るから、 なんだったらその透明床の上でジャ

ぞ。時間がそんなにあるわけじゃねぇんだから」 「いってえなぁ。 h なの 面 白 くねぇだろうが。 だったら空いてる辺り探してさくさく見る

二人は空い ている箇 所を探すべく歩き出した。私もそれに 着い て行く。 半周 ほど回

ちょうど三人分ほど空いている箇所があって、 素早くそこへ滑り込んだ。

どこを見ても大きなビル、大きくなくてもたくさんの建物で埋め尽くされている。 眼前に今までテレビでしか見たことのない景色が 広が る

N

市

にいては一生縁のない光景だ。

「すげぇなこれ。全部建てたってことだろ?」

孝士も驚いてるらしく、開いた口が塞がっていない

地図で見るとあんなちっせぇ土地にここまで密集させていろい

ろ建てちまうとか、

日

本

人は貧乏性かもな」

「それちょっと違くね?」

「いやだって、いざとなれば神奈川か埼玉と合併したってい į, じゃ ね にえか。 それ をし か つ

たってことは、 東京が欲張りなだけか?」

「それじゃもっと狭い大阪はどうなるんだよ」 孝士と塚本くんは一体なにが楽しいのかよく分からない話で盛り上がり始めた。

邪魔しないようにと隣で黙って景色を眺める。

れだけ のビルや建物があって、 その数以上に 人が

来年から塚 本くんはここで生活するという。

のある県よりずっと小さいのに、ずっとずっと成長している。

(1 て

市

く手段はきっと一種類ではな すごく便利なはずだ。電車 () は 一時 駅 間 もたくさんあるみたい [に何本もくるし、何種類もあるから目的 だし、 車 が必要なさそう。

地までに行

欲 ĺ いも のだって通 販に頼らなくても自分で手に入れられるかも しれな いい 本 ーのサ

本なんかは東京か大阪でしか手に入らないし。

まるで人の理想郷みたい。

そこへ飛び込んでいく塚本くんを想像 したら、 ひどく遠くへ行ってしまうように 思え

た。

きっと、海は近くない。

きっと、通学路に畑はない。

きっと、 気さくに話してくれるおじいちゃ んやおばあちゃ んはい ない。

きっと、私には合わない。

塚本くんを、急に遠く感じてしまった。

* * *

んの希望で浅草に行くことにした。 東京タワー 0 中でお昼ご飯を済ませ、 次にどこへ行こうかと相 談 L 合 つ た結果、 塚

「塚本くんって実は渋好み?」

よ。兄貴はそういうの全然興味ねぇみたいだし、 死んだばあちゃんが寺巡りとかそういうの好きでガキのころによく付き合わされ いい機会なので、地下鉄を待っている時 に聞 いてみ 俺の方が自由 た。 に連れまわ しやすかったみ た h

たいだからな」

たし、自由にのびのびできたともいうだろうけど。 英才教育 くんはそう大事にされ お 家 事 み 情 たい を 垣 なも 間 見 0) た気がした。 なかったということな を受けないといけない 分家ナンバ んだろう 0) ーワンの かも L か。 れ 家ともなると、 ない。 学校も自分の それに引き換え次 跡 好 継 ぎの きなように お 男 兄 さん 0 でき 塚本 は

「まぁタダで色んなとこ行けたわけだし、ちょっとお願いすりゃ大抵 し、互いの利害は一致してたからいいと思うけどな。 ヘラしといたし、孫としては優秀だろ」 興味ねぇとこ連れて 0) ŧ ん買 V かれても 5 てく れ た

小さなころからそんなことを考えていたの か....。 塚 本くんは次男で良か つ たと心 か

5

「お前、 今俺が跡 継ぎじゃなくて良かったとか思ってねぇだろうな

「お、思ってないよ」

思った。

お前、 心を完璧に読まれた。慌てて否定するも隠しきれた気はしな が塚本家の人間だっ 電車降りたら覚えてろよ たらお前みたいな分家ナンバーワンは嫌だな

し必死になって止めておい 浅草に着い て電車を降りた時、塚本くんは本気で孝士に た。 周りの目も あ るし。 肘鉄 を繰 り出そうとし たので少

「やっぱりここも人多いな」

孝士が少しげんなりしたように呟いた。

駅から出ると観光客と、 客引きをしてい るお祭り姿? 0) 男の 人達で辺りは 賑 わ つ 7

た。 わやかそうなお兄さんが「どうですか?」と声 横からちらりと話を聞くと人力車で浅草を巡らない をかけ てく かというも れたが、 のらし 塚本くん いい パが手を 私達 振 に つて か ŧ ž

最大二人乗りみ 蹴してしまった。少し乗りたいような気もしたけ たいだ から分かれ ないとい けな V し。 れど、 ŧ のすごく高 いらし L

えてきた。雷門。ここまで大きいとは思わなかっ 駅 から少し歩くと、 旅番組なんかでよく見る有名な た 雷 ,, と書 かれた大きな提 灯 が

見

「大きい……どうやって作ったんだろうね」

「そしてどんくらいの重さなんだろうな。てかなんで雷門っていうんだ?」

「そんなことも知らね えの か ょ。 左右に銅像があるだ たろ? あ ħ のどっちかが 雷 旧神な h だ

孝士のなにげない疑問に塚本くんが即答する。

もう一体は風神」

「じゃあなんで風神は門の名前に入ってないんだよ」

更なる疑問の答えは分からなかったようだ。 塚本くんは苦々しい 顔をして「とに いかく進

門をくぐるとおみやげ屋さんやおせんべい屋さんが目立つ。むぞ」と先に門の向こう側へ行ってしまった。

と思いながら見ていると、

不意に

お店のお

ば

さんが試

食の

おせんべ

Į)

を差し出してきた。

商店街

の原型みたい

だなあ

「し、8、レット三人でありがたくいただくことにする。

「ん、おいしい」

塚本くんも気に入ったようだった。「やっぱ市販で売ってるのとは違うな」

「一枚から売ってるから良かったら買っていって」

ばさんの笑顔に負けて三枚だけ買うことにする。 帰りの新幹線でお腹が空い たらみん

なで食べよう。

進

ない

れが仙草寺なんだろうけど、 お ばさんにお礼を言って店を出た。道の向こうになにか大きな建物が見える。 道のりはまだけっこうありそうだ。 人が多いからさくさくは きっ とあ

ちょうどお昼が終わった時間だからか、 人手がものすごく多い。 それこそ花火大会の

孝士が気遣って私に歩幅を合わせてくれる。人が多くていつものスピードじゃ 進 8 ない

「これじゃ蒸し風呂だな。駅でお茶買っといて正解だった」

というのもあるけれど。

り道みたいな。

を出して頬に当てた。 塚本くんは一歩だけ前にいる。 見た感じ、 既に温そうだからあまり意味がな 鞄から駅から出る際に買っておいたペットボトル いか 0) お茶

あぁもう全然冷たくねぇし!」

やっぱり。

ヤケを起こしたように塚本くんはお茶を一気飲みした

「二時か。ここら辺見たらもうそんなにうろちょろできねぇな」孝士はそんな塚本くんなどお構いなしに腕時計を見る。

「そうだな、 お茶を半分ほど飲んだところで塚本くんはこちらを振り向いた。 東京駅に近付いておかねぇといけねぇし。 あと流石にバテた」 言葉通り目が

座

つ

てい

て疲れていそう。

「体力ねえなぁお前」

「お前が運動部だっただけだろ!」

「千伽は……」

叫

んで余計に体力減らないだろうか。

元気だなぁ。

孝士が私の名前を言いかけて、止めた。

東京タワーの入場待ちのことを思い出したんだとすぐに察する。

気付かないふりをして先回りした。

「帽子被ってきて正解だったよ」

とだけ言う。 孝士は少し困った笑みを浮かべて 「水分も摂れ

よ

「あれはやべぇな。確実スコール」

西の方の空を見ると、遠くに分厚い雲が立ち込めていた。

「でもあっちの方、雲多くなってる」

スコールってなんだよ、ただの夕立だろうが」

「ここにいる間は降らないでほしいね」

門よりも大きなお堂が見えた。神社やお寺には初詣で行くけれど、 途中寄り道をしながら少しずつ道を進み、大きな門をくぐると、 ここまで大きなお堂は 目の前にさっき通った

見たことがない。

だし

「あれが本堂だな。 お参りしていくだろ? その前に煙被っていこうぜ。 俺ら一応受験生

32

でも。

ガ イド ブ ッツ ク に 載 つ てい た。 煙 を かけ た部 分が よくなるというも のが あ るとか

けた。 おば あさん から 本堂 中 دأر に 向 7 かう h 道の な至るところに煙を 脇 に、 人だかりと煙が か け てい 上 る。 一がっ てい 順 番 、 る 場 が くると、 所 があ 5 私 た。 達も 頭 おじ に 煙 さん をか

「これで頭がよくなったら勉強しなくていいんだけどな」

孝士が煙を被りながらしみじみと呟いた。

「これとお参りとお守り買っていったら効き目ありそうじ「ご利益もんにケチつけんな」

B

ない

「三連コンボってか?」

本堂でお参りする列 後ろに待っている人がいたのでそこそこにして場所を空け に並ぶ。 東京タワー -もだっ たけど、 夏 る。 休 7 だ か 5 か 家 族

プルが多い。

もちろん私達みたい

に

た友達同

士の

ググルー。

プもちらちら見

かけ

る。

連

れ

力

ッソ

る位 しばらく並 それを投げ込む。 置まで前 に h だけど 進むとそこでお 手を二回叩 列 が 雑 多 参りをすることにした。 な (J 0 て顔の前で合わせ ŧ あ つ て 最 前 列 に た。 い 小 、 く の 銭 は の中 難 にちょうど五 L < 御 賽 銭 円 を 玉 入 れ が あ 5 れ

7 今だってそう。 こうやっ たは 参りする直 ずな 7 お 0 に 前 参 『高校受験がうまくいきますように』 までは りする時、 実際 に手を 『テストの 私は 合 わせて目の いつもなにを 点が上がるように 前 が お 真 願 5 () 暗 したら お ってお願いをするつもりだった。 に 願 なると、 い する い 1 ! 0) 思考 か分からなく とか が揺らい はっきりと決め でしまう。

どこの学校に行くかもちゃんと決めていないのに、 うまくいくもなにもない んじゃ ない

だろうか。

こんな状態でお願いなんかしても、意味がないんじゃな ただ神頼みをして、自分でちゃんと考えていないだけなんじゃ か。 ない

「千伽?」

不意に呼ばれて目を開けた。孝士がこちらを心配そうに見ている。

「長い上に随分厳しい顔をしてたけど、どうしたんだよ?」

うし、うよっこりしでお頂、したぎら塚本くんも怪訝そうな顔をしていた。

「ううん、ちょっと力んでお願いしすぎちゃったかも」

手を下した。結局なにもお願いできずに終わる。

お参りの列から離れた。五円、もったいないことしちゃったな。

でもあんな心構えでお願いしたところで神様だって困るだけだ。

「まだ時間あるな。どっか入ってかき氷食おうぜ」

「「さんせぇー……」」

塚本くんの提案に私と孝士はやる気のない 声で即答。至る所で宇治金時 0) かき氷が売っ

ているのは分かっている。三人とも抹茶は平気なので涼むことにした。 「どこがいいかな」

「美味そうかつ空いてるところ」

「それは高望みだよ塚本くん……」

三人で 辺 り を 見 口 ず。 い ざ食べようと思うと店 がな か なか 見 5 か 5 な

Ū

みた。 雰囲気でい 道 か i 0 中 たら いかもしれない。 0 方 細 に 道 か に ?き氷の い V 店 があ 旗 が 下 るかもし がってい れ るお店を見つけ ないと、 すぐ傍 る。 に あ 知 つ る人ぞ知 た通りに る、 顔 を 覗 とい か 、った せ

塚本くん、 孝士、 お店あった」

後ろを振り向いて二人に教えようと思った。 5 二人が (J な

当たらない。

あれ?」

お店を探 l てい 、 た 時 以 上に辺りを見 口 す。 人 は たくさん い るけど、 塚 本くん と孝

は

見

携帯を持っていれば ょ 5かった のに。

塚本くんの 私、二人から

携

帯

に れ

連 た

絡

を取ろうと公衆電

話

を探してみたけど見つからな

こうい

う

離

?

そん

なに

離

れ

てい

な

いはず。

でも

V

な

どうしよう、 探しに 行った方がい V 0) か。 でも下手に 動 1) てこれ 以 上 離 れ た 50

孝士、塚本くん、どこ」

でも、 小さい声で名前を呼んだところで、どうにかなるわ どうしたらいいのか全然分からない。 ここがどこな けがな いとい 0) かもよく分かってい うの は 分 か . つ 7 な V る

に。

こんな、 人 が多くて、 一人くらい突然消 えても誰 ŧ 気 付 か な うくて。

さっ 辺 き西 りが急 0) 方で見た雲を思い出す。 に 薄暗くなった気がした。 空を見るとさっき灰色の雲が空一 面 を 覆 って V

る。

頬 に冷たいものがついた。 手に取ってみるとそれは水滴で、 額や腕 にも次々についてく

る。

少しずつだった水滴があっという間に大量になって、 人々の服を濡らし始めた。

うそ」

夕立、こんなに早く降るなんて。

難させてもらうことにする。キャスケットが濡れて使い物にならなくなったので脱いだ。 こうしている間にも濡れてしまう。すぐ傍に小さな屋根がついたお家を見つけたので避

周囲も突然の雨に慌てているようだった。

さっきまであれほど暑かったはずなのに、 急に寒くなったような気がする。

孝士たちも濡れているんじゃないだろうか。

あれこれ考えちゃだめ。ただはぐれただけなんだ。 小学生じゃあるまいし、

これくらい

どうにかしないといけない。

雨だって夕立だからすぐに止む。

「こうし」

分かってるのに。頭の中ではちゃんと分かっているつもりなのに。

孝士、どこ」

昔から知らない場所で迷うと、 決まって孝士の名前 を呼んだ。

家族と出かけている時でさえ。

孝士は来てくれるような気がしたから。

ったれ。

離れてた」

「いた!」

突然目の前に人影が現れた。びっくりして思わず後ずさってしまう。

「孝士」

「いきなり消えんなよ……」

雨ですっかりずぶ濡れで、息もかなり上がっている。

よかった」

「ご、ごめんなさ」

「とりあえず横入れて。あー、焦った。ふと横見たら千伽いねぇんだもん。 見つけられて

孝士は着ているシャツを脱いで雑巾絞りにした。

鞄からタオルと取り出して孝士に渡す。 といってもミニタオルだからあまり役に立たな

「千伽は変わんねぇなぁ。迷子になったら俺呼ぶの」 なんでか分からないけど、孝士がすごく嬉しそうだった。

湿った手で頭を撫でられる。

「あ、てめぇらそんな所にいやがった!」

塚本くん」

私と孝士を指差した塚本くんは、どこかで買ってきたのかビニール傘を差していた。

「アホ、お前が急にいなくなったから慌てて探したんだよ。そしたら俺らも知らな 塚本くんと孝士もはぐれたの?」

い間 に

やっぱり完全に私のせいだった。本当に申し訳ない。

「佐々口ずぶ濡れじゃねぇか」

「もうかき氷食う気しねぇや。どっかでTシャツくらい売ってねぇかな」

いかにも!
てのならそこらにあると思うぜ」

それは嫌だ」

雨上がったな。とりあえず行くか。せめてタオルが欲しい」少し話している内に雨が止んだ。雲の切れ間から日が差す。

孝士は私にタオルを返して軒先から出た。塚本くんは傘を閉じ下した。方な、といまえてくれ、せきてジスノ大谷しも

先に行く二人に今度こそはぐれまいと小走りで追いついた。

塚本くんごめんね。迷惑かけて」

塚本くんにちゃんと謝っていないと思い、彼の横に並んだ。

お前はああいう時でもやっぱり、佐々口なんだな」

するとこちらを見た塚本くんは、

今までに見たことの

ない顔をしていた。

の奥が深い。

大人、みたい。

もうはぐれんなよ」

そう、はぐれちゃいけない。

いけないのに、足が止まってしまった。

違う、春になったら行ってしまう。塚本くんが遠い。どこかへ行ってしまいそう。

38

思った。

私が抱いている不安みたいなものも、さっきの空はすっかり晴れわたっている。

私達はいつまでこうしていられるんだろう。

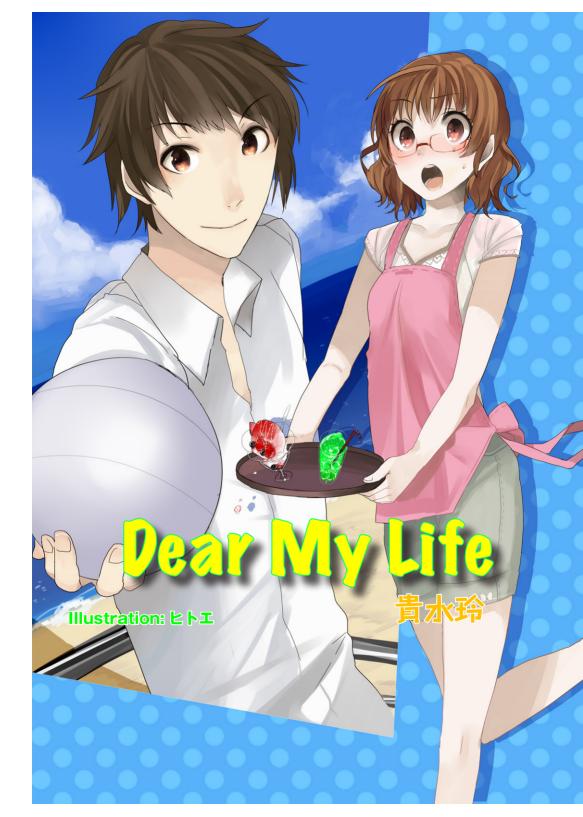
孝士 0

進路も知らな

()

さっきの雲みたい に拭われてしまえばい V 0) にと

Monstop



あらすじ

 母の勧めでN市の優華女学院高等部に入学した花。自分とそっくりな顔をした旧家 の娘・ありさと出会い、実は従姉だと知る。その後妙な噂やありさの嫌がらせで花は 孤立。さらに盗難事件の犯人と疑われ逃げ出してしまう。だが以前花を助けてくれた 星流の「負けるな」という言葉に背中を押され、クラスメイト達の前で「自分が犯人 じゃない」と勇気を出して伝えたのだが……。



十河 星流 (*そご*う すばる)

高二。政治家一族の息 子で女子に人気が高い。



西野 花 (にしの はな)

高一。何事にも一生懸命 な、素直で心優しい少女。



塚本 ありさ (つかもと ありさ)

高一。プライドが高く 利己的な旧家の娘。

+

有川 十夢 (ありかわ とむ)

⟨ 高二。花の住むアパー ⟨ トの大家の息子。 ク

花

第 い つもと違う夏休 4

照り 果てしなく続く雲ひとつな つける日差しは突き刺すような暑さ。 い青空に、 ひとすじの飛 アスフ アル 行 } 機雲が伸 から は ゆ Ü 5 ていく。 ゆらと蜃気楼が

立ち

昇り、 セミの 鳴き声 が降り注 ぐ、 そんな七月も終わりに近づ V た 日

「では

期待に満ちた皆の視線が集まる。 通り説明を終えて、 担任 の美佐 誰もが彼女の一言を待っている。 子が生徒たちを見

渡

した。

また二学期に会いましょう。 みん な、 楽しい夏休みを!」

そ 明 日 の解放宣言に、 いら夏 休み わあっとクラス中 高校に入って初めての夏休み。 から歓声が上がった。

バンにしまい机から立ち上がろうとしていると、そこへ二人の生徒 ラ ンスメイ 成 績どうだったぁ 卜 たちの 楽しそうな笑 ? あたし、 V 声に 理数系サイアクだった~」 花の口元も自然と緩 む。 が駆け寄って来た。 V そい そと成 績 表 を力

大きなため息をついたのは、ポニーテールの似合う背の 高 い 少 女、 紺野 絵

「うん、 そんなに悪くなかったよ。 ……体育以外 は

あはは。 限りなくゼロに近い小さな評価の載った成績表の一部を思い出し、 花ちん、 ほんっと運動苦手だもんね~。 やつぱダメだった んだあ

花は

をすくめた。

ヨートカットの少女、 吉田亜樹が笑う。 花もつられて笑った。

必須だし、 「はあ~。 でもいいよね、 バレー部 の練習もあるし、 花は勉強出来るから。それに比べてあたしは……夏 全然遊べないよ。もうほんっとバカってや 休 だ みも講 習

絵里の場合やる気の問題じゃない? 亜 樹 の指摘に 「だってぇ~」と絵里が半泣きになる。 参考書開いても五分と持たないじゃん」 そんな二人のやりとりを花

かな気持ちで見つめていた。

ちろんすべての誤

解が

7解け

たわけ

では

な

()

まだ疑ってい

る人もい

るし……

中

傷

的

な

は

穏

任

の美佐子から

É

呼

び

出

盗難事件の後、 花の学校生活は少しずつ変わっていった。

噂だってある。 でも少なくとも今は一人じゃない。

絵里と亜樹 が 『信じる』と言ってくれたから。 あ の後花は担

説 を受けたけれど、 明を美佐子は真剣 一生懸命自分の気持ちを伝えた。 に 聞いてくれ、そして「わかった。 順序もめちゃくちゃでしどろもどろな 先生は信じるわ」と言ってくれた。

嫌なこと続きだったけど……あきらめなくてよかったな。

拶 あ É う 事 話も してくれる。 犯人は ラ ス 0) あれから二カ月たった今でも見つかってい 子 た たちの ح んな風 花 に 0) 好 偏 見や警 転するなんて思ってもみなかった。 戒 の目 は 徐 \(\alpha\) に ない。 和らぎ 始 でも美佐子の めた。 絵里と亜 今では Ź 樹 オ 普 とも今 涌 口 に 1 挨

あ

きゃ

あと盛

り上がる二人を眺め

ながら

花はふ

と思う。

で 2 りもうれ は 0) 日 す つ に 遊 か くて、 \bar{h} り仲 だ ŋ 良 何 L よりも幸せだっ 0) 今までずっと憧 友達だ。 緒 た。 に れ お 7 弁当 V たそん を 食 ~ な た 日 り、 常 冗談 0) 中 -に今花 を言 つ は 7 笑 N る。 い 合っ そ n た が り、 何 ょ 休

でも夏期講習って、 あ ĺ もっと早くわかってればわたしも申し 昇星と合同 の特別講 座 しもある 込んだのに んだって な あ ! か ŧ 向 こう . О 学校

「えっ、そうなの!? じゃあ星流様に会えるかな!?」

言っ れ 帯 が あ は 電 星流 あ てく 5 話 ただ 0) を花は た 日 様 時 公園 0) れ 社交辞 に たのを真に受けて、 その名前 はうれしくて飛び上がりそうだった。 で花 そっと見 は 令だったの 星流 に左胸がどきっとした。 た とア その中 か 、ドレスの交換をした。『何かあっ 二人のことも真っ先に も」と青くなっ に は 星 流 がら来 机の上の たが、 た メー X \neg ょ 力 1 か ル バ ル つ で報告し ン が たら た 大事 0) ね ポ () に ケ た。 ッ つでも連 お 保 \vdash めでとう』 存 に 送ってか L 7 入 . 絡 ħ あ てあ して る。 と返 5 る لح 携

――全部、星流……くんのおかげなんだ。

あ 0) 時 星 流と会わ な かったら。 きっと皆とこうして笑い合うことなんて出来なかった。

かけがえのない勇気をくれた。背中を……押してくれた。

そ

か

. ら星

流

とは

何

度

か

X

1

ル

0)

É

りとりをした。

内容は

他

愛

0

ない

ことば

か

ŋ

だがが

話 ことは たら 皆 Ţ に つ は 内 り 緒 する だ。 んだろうな あ

星 流 は 優華 女学院 0 生徒たち に 人気気 が 高 () まさ か 自分がそ h な人物とメー ル をし てい

るなんて知ったら……大騒ぎになるに違いない。自分でも夢かと思うくらいなのだから。

「ねえ、花ちんは夏期講習申し込んだ? ……何笑ってるの?」

突然亜樹に顔をのぞきこまれ、花ははっと我に返った。慌てて首を横に振

「あ、そっか。お母さんと過ごすんだよね。じゃあ次会うのは登校日か であし

う、

ううん、

何でもない!

わ、

私は申し込んでないよ。

東京に帰るつもりだか

5.....

「うん、そうだね。しばらく会えないの寂しいけど……」

-そっか……夏期講習に出れば会えるかもしれないんだ……。

でも連絡取り合おうね、と二人と約束しながら、花は少し残念な気持ちになった。

星流とはあれから会っていない。ここ最近はメールもないけど元気だろうか

そんなことを考えていると横で絵里が大きく伸びをして晴れ晴れとした声で言った。 なんかそれ聞いたらちょっと講習楽しみになってきた。 ね、 帰 ŋ に \forall ッツ ク寄っ 7

かない? おなかすいたー」

「うん、いいよー。花ちんも行くよね?」

まだ残っているクラスメイトにまたね、 亜樹が同意して、花を見る。 気を取り直 と言って三人は教室を出 して花も 「うん!」と大きく頷 た お しゃべりをしな い

――また……メールしてみようかな。がら階段を降り、下駄箱に向かう。

から長い夏休み。 機会はたくさんある。 そう思ったらわくわくが広がってきた。

「花ぁ、行くよーっ」

外から二人が呼ぶ。慌てて靴を履き花は昇降口を出た。

そう。

昔

から体が弱い人でね。

あたしが小六の時に死んじゃった。

歩 外に 出 「ると、 目 0 眩むような夏 0 陽 射 が 出迎え た。 少 し目 [を細 め、 花は 笑 顔 で 駆 け

出した

わーっ、 すごいじゃん、 花 ! 5ばっかりい~。 さっすがママの子ね!」

成績表から目を上げ、咲が満面の笑みを浮かべた。

へしぶりに見る鮮や か な笑顔がうれし () あ あ、 帰 つ てきたんだなという実 が 花

0)

胸

夏休み二日目。花は我が家にさっそく帰省していた。

にじんわりと広がった。

りに 緒に過ごすために数日休みももらったらしい。 夕方の新幹線 たしもね、 親子水入らずで過ごす夜は、ここ数カ月の中 優華に通ってた時は成績よかったのよ。 で到着してマンションに戻ると、 で一番リラックスできる時間だった。 咲は おしゃべりしながら夕飯を食べて久しぶ 特待生だったから」 お寿司をとって待っていてくれた。

「えっ、ママが?」

「そう。話したことあったっけ? クーラーの効いたリビングでソファのクッションにもたれて、 飲んだ。 ガラスの カップの中 ーでオレ あたし施設で育ったからね。 ンジ の大きな花がきれ いく 奨学金で高校通ってたの」 に 咲がジャスミンティ 開 い 7 い る。

それ 「……ママのお母さん……おばあちゃんて、早くに亡くなったんだっけ?」 を育 · を 聞 てられ いて、 なかったと 花は あ りさに言われたことを思い出した。 咲の 母 親 は アル コ 1 ル 依 存 症 で

47

でも施設

0)

先生

た

が いし たから寂しくなかっ たわよ。 あたしだい 3 反抗的 だっ たから苦労し たと思うけどね

「ああ、 へえ.....。 それ でも反抗的だったのに は ねえ」 長 い巻き髪を 勉強は か きあ してたんだ。 げ て、 咲がに 特待生って難しい っと笑う。 んでしょ?」

「優華に入れば王子様と知り合えると思ったから」

|王子様って……|

つもの咲の口癖 に、 花は苦笑し た。

つまりね、玉の輿 狙いだったわけ。お金持ちと知り合って結婚すれば…… あそこから抜

け出せると思っ たのし

ふと咲が目を伏せた。 長い まつげが白い肌 に濃 い陰影を落とす。

「別に自分の境遇が不幸だとは思ってなかったけど、

ずっとあ

の街

に

いたく

は

なかった。

「ちょっと待って、ママ」そこまで聞いて嫌な予感にぶつかり、 だからいい結婚をしてお金持ちになって新し い人生を始めたかったのよ 花は思わず口を挟ん ね

パパとママって高校生の時に 知り合っ たのよね ? まさかパパ と結 婚した のって」

咲は父をだましていたと

花は青くなった。

それではありさや塚本家の見解

は正しいことに

産目当てーー?

一違う、 違う」顔の前で咲が手を振った。 ネイルアー \vdash の蝶がひらひらと舞う。

パパと出会ったのも偶然。 でもちゃ んと恋愛して結婚したわ。 それにパパはお金な

全然持ってなかっ あそうか、 た 勘当されたか わ ょ

? ら?

48

ような気持ちで、

花はそっとため息をつい

た

すぐ行くから!」

咲 駆 け落ちする時に父は家 を出たのだ。 だから塚 本家 0 財 産 を持ちだせたは ず が な

二人はちゃんと想い合って一緒になったのだ。そして花が生まれた。 よかった、と花は 胸を撫で下ろした。 咲がそう言うなら、信じる。 他 0) 事 実実な h 7 な

「ねえ、ママ」

「 ん ?

「パパのこと……聞いていい?」

思い切って花は切り出した。 メガネの奥 からまっ すぐに咲を見つめる。 少しぽかんとし

「何が聞きたい? ていうかどうしたの? 急に」た様子だったが、咲は「いいわよ」と頷いた。

「あ……うん、えっと――」

本家のこと、ありさのこと、駆け落ちのこと、 聞くべきこともたくさんある。 でも

ざとなると喉につかえて出てこない。

命に怖気づく自分を急かしていると、 咲の携帯の着メロ が鳴った。

でも、怖くてもはっきりさせようと新幹線の中で心に決めたのだ。

さあ早く

そう懸

素早く通話ボタンを押し咲は携帯を耳に押し当てた。 あもう、 お店からだわ。ごめ んね、 ちょっと出てい 助かったような出鼻をくじかれた もしもーし!」

サエ? どうしたの? うんうん……ええつ!? \forall ジ ? あ 〜 ……、 わ かっ たわ、

49

電 話を切ると咲は額を押さえ、ため息とともにがっくりを肩を落とした。 それから おず

おずと顔を上げ、上目遣いに花を見た。 ごめん……新人のコがお客とトラブって、お店に来てほしいって……」

「えっ、そうなの? 私は別に平気だよ。 だから行って来て」

⁻ほんっとごめんね! 許して、と拝むように顔の前で両手を合わせ、咲はソファから飛び降りた。 せっかく帰省したのに~! すぐ帰ってくるから!」 慌ただ

かっていく。

自分の部屋に駆け込み、

仕事用の白いスーツを着て出てくると髪をまとめながら玄関

へ向

ってらっしゃ . い!

追いかけて花は呼びかけた。 ドアが閉まる寸前咲が手を振 ったのが見えた。

でも結局、 咲は朝まで戻ってこなかった。

はあ? それでもう戻ってきちゃったわけ?」 われ、

思い切り呆

れ顔

で十夢に言

花は

「はあ」と肩

をすくめた。

当なら花は今頃高層ビル群の やかな夏の夕焼け の下を、花は十夢とマメ柴のロクと一緒に歩 間 から 見てい たはずだった。 で ŧ 結 局東京 しい ていた。この空を本 での 滞 在 期 間

わずか三日で終わってしまっ た。

ついこの間楽しそうに出て行ったくせに。 何してんだよ_

うん、 そうなんだけど……。 お 母 さ h 0) お店忙しくて、 休め なくなっちゃ ったし、

逆に 私がいると気を使わせちゃうかなって思って」

は かか 1 申 緒 ラブルで呼 に し訳なくて、 過ごそうと び 出 花は夏期 頑 っ され 張 た翌 って起きてくれ 一日も咲 講習を口 は 実 仕 に N た 事 0) に つだが、 市に戻ってきてしま 出 かけ る 無理をしてい 羽 目に なっ 5 る てしまった。 たの のは だ 見 ええ見え つ た。 せ め 7

「なんだそりゃ。 ず ばっと言われ花は 自分の家に帰ってどんだけ遠慮してんだよ。 言葉に詰まる。 ロクのリードを持つ十夢の後ろで、 お前アホだな」 赤く染まる アス

「それに何でそんな気ぃ使ってんの? そんな花のヘコみ具 合もつゆ知らず 十夢 自分の親なんだからそんな必要なくね は続ける。 時 クが気まぐれ に道端 \mathcal{O} 草

ルトに伸びる自分

0

影がしゅ

んと委縮した。

に入って行こうとするが、 無理やり引き戻しすたすた進む。 完全に自分ペ 1 ・スだ。

々口

む 5

「そ、そうかもしれないけど……」

な思いをして育ててくれた分、 まあいんじゃねーの。 ごもって花は俯い うん……。でも宿題もあるし、 た。 でも休み たった一人の家 出来るだけ迷惑かけたくないし負担になりたくない の間どうすんだ 図書館通い 族だから。 ? でもしようかと。 講 だから変な遠慮をし 習申 し込まなかった いつも長い休みの てし んだろ?」 うまう。 時 大変 つ

-どんだけマジメなんだよ、 夏休みは家に帰るっ て言っ お 前。 ちゃったから……。 あそば ね 1 0) ? 友達出 皆もう予定あるみたいだし 来 たん だろ?」

てそんな感じだし……」

言っていた。 里と亜樹 帰ってきたことはまだ連絡 0) 顔 が浮 こかぶ。 絵里 は バ レー してい 部と補習 ない。 が あ べるし、 亜樹 は家族で旅行に 行 くと

慮しすぎだって。 それ趣味?…… ていうか横くれ ば ? 話 に < い んだけど」

えつ。 あ、 は [V

らさなければならない。正直後ろにいた方が楽なんだけど…… ぶっきらぼうに言わ れ て花は慌 てた。 長身の十夢と話 す 時、 と思い 小 柄 な ながら隣 花 は 思 7 に並 切り首を逸 んだ。

「十夢くんは夏休みはどうするの? 4 っぱり毎 日部活 ?

「ああ、 土日はな いけど。 今年は予選落ちでインターハイ逃したけど、 昇 星 バ ス ケ部

昇星は星流の学校だ。 急に興 味 が わいてきて花は質問 [を続 け た

試合もある

Ľ

昇星のバスケ部って強いの?」

「ふん、うちのが強えーよ。 かこだわって練習テキトーだし、すげーむかつく。 んだ。金持ちだからって偉そうだし、すぐ時間遅れるし。ユニフォー 去年は インハイ行ったし。 だから絶対負けたくな ていうか あ ムとか 1) つら 基 設 ! 備 本 Ġ る か 形 気 ば ね

そうなんだ……」

だと言 にも増 突然声を張り上げた十夢を花は っていた。 して仏 頂面 これ だ。 以上聞 そうい かな え ば 1 驚 方がいい 前 い に て見上げ 絵 里 が のかもしれ た。 公立 校と私 何 だかも な い、 立 校 のすごく不機 と花 0 間 は に は を つぐん 嫌そう。 壁 が あ つも る

たところだった。 散歩コースを一巡りして有 花と十夢の姿を見て大きく手を振り駆け寄って来 川家に 戻ると、 ちょうど百合子が洗 濯 た。 物を取 り込み

ちょうどよかった。 海 の家や ってるナミおばさん 0 娘だろ?

さっきね、

マリナちゃんから電話

があったの。

親

戚

<u>の</u>

に

出

てき

ーそうそう。 海水浴シーズンで人手が足りない から十夢 に手伝いに来てもらえな V かって」

お

昼

近

くに

なるとお

客が

押

L

寄

せ

店

は

気に忙しくなっ

た。

焼きそば

B

か

き氷を売

る

「はあ!? なんでオレ!? やだよ面倒くさい」

んだそれ!と十夢が食ってかか ダメよ。もう大丈夫って返事 る。 しちゃったもん。 Į) いじゃ ない と呑気に笑いながら百合子 土日なら行け るでし は横 に

「二人欲しいっていうから花ちゃんも行くって言っちゃった。 緒 に よろしくね

る花に「そうそう」と手招きするように手を振った。

なイ ちのグル そこ 翌. ベン H は 0) \vdash 1 土 N ŧ プ 曜 市 催さ で 日 0) 賑 市 ħ わう。 花 街 てい は 地 か 近く - 夢と 7 5 に 番 日 は 緒 沂 $\langle \cdot \rangle$ 港 に V 7 Ł 人 バ ŧ あ 気 ス 楽 つ 0) に i 7 乗っ ビ 遊覧船 め 1 いるとい 7 チ で 海 が 0) うの 出 家 夏 7 場 0 が売りだ。 あ 1) は 各地 た る り、 海 水 か 浴場 海 5 水 0) 浴 家 は 族 向 連 ŧ か 5 れ つ 3 8 た。 若 者 様 た

. 時 半 頃 到着 す ると、 夏休 4 0) せ い か 海 岸 は す で に 海 水 浴 客で (J つ ぱ N だ つ た。

「わあ……」

は

Ŀ

上がっ

た。

吸い 夏 込む。 0) 陽 射 ĩ 東 を照 京でも海 り 返 す は 見ら 広 大 な れ 海 るけど、 に、 花 Z は h 感 な 嘆 に 0) 開 声 放 を 的 ŧ Ü 5 Ĺ B た。 な () 熱 い 気 潮 に 風 花 を 0) 胸 テ しい つ ぱ \exists 1) に

ラグー 店 は、 員 広 用 Z 々とし 0) h 口 が は りと た ゴ入りT 海 海 71 日 岸 浴 に 沿 場 シ 焼 い 0) ヤ け に 入 ツと た活 は り たくさ \Box 11 発そうな女性 に 1 ・フパ 番 h 0) 近いところにあった。 ンツ 海 0) だっ に 家 着 が た。 替えた。 並 んで 挨拶 V 0 た。 後 + 夢 通 ンシ 0) り 親 説 Э 戚 明を受け、 で経営者 を か ね た 0) 花 海 た \forall 0) 5 IJ 家

カウンターの前には列ができ、 店内やテラ ス席 Ł い つ ぱ い に な 5 た。

「すいませーん、注文お願いしまーす」

「は、はい! 今いきます!」

二つにしばった髪もいつの間にかぼさぼさだし、メガネも曇って最悪だ。 ツの下は汗ばんでいる。下に水着を着ているから透けても平気だけど、ムレて仕方ない。 いた。十夢はカウンターでの接客に追われている。クーラーが効い めまぐるしい忙しさの中、 花は 伝票を手に覚えたての接客用語を駆使して駆け てい るはずなのにT ま わ シャ つ 7

____初めてのバイトがこれってハードすぎるよ~。——初めてのバイトがこれってハードすぎるよ~。

人と接するのが苦手な花にとって接客業は最も避 うまく運べなくてこぼすし――失敗の連続で花は泣きたくなっ けた () 仕事だ。 た。 注 文は 聞 き 取 れ な

なんでOKしちゃったんだろうと、花の気持ちは滅入る一方だった。 図書館通いの方がよっぽど楽だよ……。 それにこれさえなかったら

ような出 [来事。 そう、 奇跡だ。どきどきしながら開いてみるとそこ には

、は昨夜、久しぶりに星流からメールがあったのだ。どうしようか迷ってい

た最

した

か

明日よかったらうちの別荘に来ない? 友達呼んで集まるから』

でも |流からの初めての誘いに花の心臓は飛び出しそうだった。 ―このバイトのせいで断るしかなかったのだ。 もちろん行くと返

――もうあんなこと二度とないかも……。

花は人生 わ たか ŧ |最大のミスを犯したような気分だった。 ま h な V t ッソ 5 て思 わ れ た かも。 過ぎたことは取り返 しが · か な け

お ぼ ーっとすんな」 ため息とともに肩を落とした時、 後ろ から 低 声 が L

ヤ ッツ Ó 袖を肩までまくり頭にタオルを巻いた十夢を見て、 慌てて花は持ってい た伝

票を差し出 た。

うん! あのね、 さっき注文受けて

空になった花の手に、 いよ、 用意しとくから。 フルーツやクリームのトッピ それよりこれ持ってって、 ングしてあ 三番な」 る かき氷

「なに? 忙しいんだから早くしろ。こぼすなよ 花は

思わず感心してしまう。

が載せられた。

昔から時々手伝っているらしく十夢は手際

まるで大人みたい

で、

ちょ

つ

か

つこ い。

(J てきぱ

がが بح

()

きとし 0)

た動 た

作に

載

つ

ーでも、 お待たしました。えっと……ト、トリプルベリーミルク? 怖い。 ギロリと睨まれて「はいっ」と慌てて客席 向 になります」 かう。

集中しようと気持ちを切り替えた時、 伝票を確認しながらぎこちない手つきでグラスを置き、次のテーブルへ。 カウンターの 方から明る () 声 がした。 とに かく今は

「おー、またやってんな、 トム! 見に来たぜー」

高校生くらいの男の子が二人カウンターの前にいる。 れー? トムだぁ ! 何してんの、こんなとこで」 その 後ろに は 女の 子 が二人い

「うそ、スパイがバイトしてる。 ハリウッドに里帰りじゃ ない の 〜 --

うか帰れ、おめーらはつ」と、 どうやら十夢 0) 知り合いのようだ。 お母さんがトム・クルーズが好きでつけたんでしょー」 追い払おうとしている十夢に女の子たちが爆笑する。 高校の友達だろうか。 「スパイっ 7 何 だ ょ

だってあんたの名前、

7 い

---そうだったんだ、十夢くんの名前って……。

ちは結局何も買わずに行ってしまった。本当にからかいに来ただけだったらし 百合子ならやりそうな気がする、と花は納得する。 怒った十夢に追い立てられて仲 間 た

「ちょっとオレ、浜に配達に行ってくるわ」

うんざりした様子で頭のタオルを取り、十夢は焼きそばのパックの入った袋を二つ取っ その時近くにいたマリナが十夢の襟首を掴んだ。

「あ、十夢! ちょうどいいわ、これもお願い!」

タコスやフランクフルトの入った袋とトレーを押し つけられ十夢が眉を寄せた。

「ちょっと、こんなにオレー人じゃムリだって――」 文句言わない。終わったら友達と遊びに行っていいから。 あ、 かき氷は急 V で! 赤

フラッグ持ったお客さんよ。すぐ近くにいると思うから。 リナが戻って行く。むすっとしたまま出て行こうとする十夢に じゃ!」 花は声 をか

け

た。

あ……あの、よかったら私も手伝うよ」

そうか? じゃ あかき氷頼むわ。 すぐ近くにいるらしいから」

を見回して赤いフラッグを探すと、近くのパラソルの下のテーブル 、き氷の入ったトレーを手に花は砂浜に出た。 ビーチサンダル が の上に 熱い 砂 見 に つけ 埋 iまる。 た

「あ、すみません……注文の品をお届けに——」

数人の男女がいるそのテーブルに行き、 花はおずおずと声 をかけた。 長 () 髪をおだんご

にまとめた少女が振り返った。

目が合っ た途 端端 同 時 に 声 が上 がっつ た。 よく似たその 目とその 唇 が 同 じ速さで開 か れ

---つ、塚本さん。

全身からさっと血 0) 気が 引 V た。 それ は 相 手 も同 じようで呆然としてい る

ありさは化粧をしていて髪型も違 7 別人のようだった。 ぼさぼさ頭で汗だくの花とは

, 違 い -今日はいつものように鏡を見ているような気分にはならなかった。

その声にはっと我に返り、 彼女はくるりと花に背を向けた。

「ううん、知らない」

なに?

知り合い

?

左隣に

座

つてい

るサングラスをかけ

た男の子がありさに

訊

意外な反応だったが花はほ いっとし た。笑われたり傷 つくことを言われるより無視 され た

方がましだ。そう思い 少し俯きながら手早くかき氷をテーブルに並べ 花もただ の店 員に戻 る。 、終え、 花はぺこり

を頭

を下

げ

テ

1

ブ

ルを

離れた。 だがほっとしたのもつかの 間、 すぐに呼び止められ

ちょっとー。これ注文したやつと違うけど」

「えっ?」足を止めて花は振り返った。

慌ててテーブルに

戻り伝票を確認する。

「えっと……ご注文はイチゴミルクとパイナップルですよね?」

「違う、私はピーチミルクにしたんだけど。取り替えてきてよ」

ざとだとわかっ ありさの左隣に座る少女 ていたが、「すみません」と謝って花はかき氷のグラスを取ろうとし -取り巻きの一人だ--が少しきつい調子で言った。

「きゃっ!

グラスが倒 n 中身が 少女に か かっ た。 反射 的 に立ち上がっ たお か げ で羽 織 つ 7 い たパ

カー は 無事のようだったが、 むき出しの足がシロップと氷でびっしょりと濡れてしまっ

た。

「ちょっと、なにすんのよぉ!」

ごめんなさい!!」勢いよく花は頭を下げた。 ありさたちが 「大丈夫?」とタオル

を差し出している。どうしていいかわからず呆然とした。

「よる?」らうハハンやし。あいつが根とらずぐ豆くしてして、ごめんなさい。あの、すぐに注文通りのものを――」

「はあ?」もういいじゃん。あいつが来たらすぐ行くんだし」

ありさの隣の少年が、少しうんざりしたように横の友人になあ、

と同意を求めた。

「そうだよ、そんなのに金払うのもったいねーし。もっといい店いこうぜ」 少年たちが立ち上がる。目を泳がせ花がおろおろしていると、少女がずいと迫って来た。

「そうするわ。もういいからお金返して。迷惑料込みで三倍」

「め、迷惑料?」

「当然でしょ。不快な思いをさせられたんだから。さっさと払いなさいよ」

店に迷惑をかけてしまう―― きっと花を睨みつけ、少女が手のひらを突き付けてくる。どうしよう、このままじ 思考が弾け頭の中が真っ白に染まった。だがその時配達を終

えた十夢が駆けつけてきた。

「おい、どうしたんだよ。……あれ 少年たちを見た瞬間、星流 の声色が明らかに変わった。 ? お 前ら昇星バ スケ部 0)

「あ、こいつ見たことある」

「中央高のバスケ部じゃねえ? 確か有川って言ったっけ。 何でここにいるんだ?」 ちょっと待てよ、

何だよそれ」

「…バ イトだよ」と面 倒くさそうに答えて、 十夢は 両手を握 りし Ď 7 N る花を見た。

こいつらと何 か あっ たのか?」

「こぼされたのよ ! 花 が答えるよ り先 に に少女が 吉 を上げ た。

足に かき氷こぼされた の 。 だから早くお金返し ってよ、 謝 罪料 込み で ね

「謝罪料金?」少し顔をしかめた十夢を見上げ、 消え入りそうな声で花は 言 っ た。

ごめんなさい。 私が倒しちゃって……」

テーブルの上の惨状を見て、 十夢が「ああ」 と呆れたように呟いた。

こぼしたことはすいません。 謝ります」

代金も返しますんで。おい、 潔く頭を下げた十夢に花も習った。 西野。マリナさんに話してもらってきてくれ」

そう促され、 花は頷いた。 だがその場を離れようとした時、 ありさが振り返っ

「そういえば、 思い出したんだけど。うちの学校ってバイトするのに許可がいるのよね

え……?」

知ってた?と企むような笑みを浮かべたありさに、 花はどきりとした。

「事前に先生に話しておかないといけないの。 無許可 なのが バレると校長室に 呼 J. 出

て処罰があるんですって。知らないと大変よねー」 そんな 知らな

に許 生 そ、そうなの? 可なんて得て 一徒手帳に 書い 、てあっ いない。 ただろうか。 処罰 0) と 聞 V () **今** 口 て一気に暑さが引い のこ とは 突然決 まったことなのでもちろん学校 た。

十夢が前に進み出た。

別にこいつはここでバ イトしてるわけじゃ ねーよ。 ここオレ の親 戚 の 店で、 頼まれ 7

ちょっと手伝ってもらってるだけで」

ははっ、大変だな庶民って。夏休みも遊べないなんて」

「……あ?」

ぷっと吹き出した少年たちを十夢が睨んだ。「何がおかしい んだよ、お いい

「いいんだよ、 る長身の十夢を前に少年たちは圧された様子だったが、すぐに傲慢な態度を取り戻した。 「……なんだと? ふざけんな。てめーらだって負けただろ。オレたちよりずっと前 「別に。――あ、そうか。中央って一点差で予選敗退したんだよな。だからヒマ あからさまな嫌味に十夢が動いた。はらはらと花は様子を見守る。 負けたって。 初めからムキになってやってないから。 百八十センチを超え 部活なんて遊びみた なの か

「はあ? ふざけんな!」

激昂した十夢がサングラスの少年の肩を掴んだ。

いなもんだし。本気出せば勝つのなんて簡単だけど、オレたち忙しいからさ」

と、十夢くん!」

止めようと花は叫んだ。 その時、「どうしたの?」と背後で声がした。

--- うそ····· °

思わ

ず見とれていると、

ハーフパ り返った先にいたのは星流だった。 陽 射しを受けるこげ 茶の髪 胸 が 元の開 サ ラリと揺 た白 れ 7 · 薄 手 整った顔立ちを引き立てる。 の半袖 シャツに カーキ

星流はあれ?という顔をした。

もしかしてお店の手伝いってここで?」

ぎこちなく花は頷いた。それを見て、ありさが何か言いたそうに顔を歪めた。

十夢の腕を鬱陶しそうに振り払い、少年が星流に助けを求めた。

何とかしてくれ、副会長。

こいつ急にキレだしてさ」

やっと来たのかよ星流。

「はあ? 先にふっかけてきたのはそっちだろ!」

て入った。そこへ先ほど店に来た十夢の友人たちが通りかかった。 十夢が食い下がる。掴みかからんばかりの勢いの 両 者に「ちょっ と待てよ」と星 流 割 つ

あれ? トム何してんだよ。もしかしてケンカ?」

ただならぬ様子に、パラソルの近くに集まって来る。 十夢 が聞えよがしに言った。

はあ!? あれ、 あんたら昇星のバスケ部員じゃん」 「こいつらがバカにしてきたんだ。うちのバスケ部のこと」

-ケンカ売られたわけ? 何なんだよ、 てめーら」

んでいる。 部活仲間二人が十夢に加勢する。 サングラスの少年の横 には 星 |流ともう二人の友人が並

負けて残念だね、 一礎も出 来てねえ弱 って言っ 小 チー ムに言 ただろ。 わ れたく 熱くなんなよ。 ね 1 よ 黙 また冬頑 れ 張 れば 1 (J じゃ

誰 が 弱小だよ!」 止め る 星流を押 i 0) け 少 年 が息巻いた。

オレたちとここで勝負しろ」 こうっ 7 い ・うな 5 証 明 しろよ」 フ ンと十夢が鼻 で嗤った。

なんでこうなるの……?

ぎらぎら輝く太陽の下、 熱い砂 浜 の上に 花は所在なく佇んでい た。

来るぞ!」

十夢がレシー クによって放たれたボ 十夢 の声にはっとした時、 ブで打ち上げる。 ールが花 目 1 0 0) 顔 前 スをするため慌てて花はその下に すれすれを通って後ろへ の白 いネットの向 こう側 飛 で人が飛び上がった。 h だ。 回 つ すかさず後ろに たが ス 18 いた 1

ボスン。

上に上げるつもりがうまくい かずネット に引っ掛かってしまった。

よーし、また一点

たありさたちが声を上げて笑っている。 相手チームの少年二人が頭の上で互いの手を弾き合わせた。コートの横では観客となっ 恥ずかしさのあまり花は小さくなった。

海 十夢たち中央高校と昇星学院、バスケ部同士の" 勝負 " はビーチバレー対決となった。 星流 !岸ではイベントの一つとしてフリーのビーチバレーのコートがいくつか用意されてい の提案でそれ を一つ借り、 切って落とされたのだが……。

うう、 なんで私が参加しなきゃならないの……。

戦い

の火ぶたは

る。

どういうわけか花は十夢とペアを組むはめになり、 ゲー ムに参加していた。

「……おい、てめえ」

背後から聞こえた地を這うような低い 吉 に花はびくっと体 :を震わせ、「ごごごごごめん

なさい!」 と頭を抱えた。

「どこ向かって打ってんだよ、ヘタクソ! お前 オレ に 恥 か か んせたい わけ?」

「ち、違います! でも私運動はほんとにほんとにダメで---」

に球技は大の苦手。 トスもレシーブもまともに出来な い 0) に 花は半泣きに なった。

「そ、そんなぁ~」

い訳すんな。

負けたらお前のせいだかんな」

しょうがねえだろ。 向こう Ú 兀 人 こっちは三人で一人足りねー んだから。 女ども は 用

事があるって帰っちまうし」

たため、 ず 果十夢と組 つつ行 ビーチバ (J 星 先に 流 む レ こととに ĺ は 三勝し 審 は基本二人一 判 を な つ たチー 買って出 た。 ムの 組 昇 た。 ,星チ で行う。 勝ちとなる三セッ 彼が提 1 1 花 0 案 方 は は 穴 L たル 後 埋 生め要 か \vdash 1 5 来た一 ルで、 先取制となった。 員 とし 人を入 て抜 試合は各ペア交互に一セット 派権され ħ て男子 た。 くじ は Ŧ. 引 人となっ き 0) 結

は四四 [セッ ト目 セッ 1 目は引き分け、 二セッ ト目は 負け、 三セッ F 目 は 勝 つ た が

今回負けると昇星チームにリーチがかかる。

ルに 食らいつけよっ!」 か? 今 回 ŧ 負 け たら 後が ね えんだ。 とに か < お 前 は 駆 け ず ŋ П れ。 死 め 気 で ボ

「は、はいっ!」

ブが 放たれラリ コーチのごとき十 が 始 なまる。 · 夢 0) 剣 だがその後も点差はどんどん離されていった。 幕 に 気 圧さ れ 、花は 転がる様 に コ 1 O後 方へ 移 動 た。

「あっ!」

「うわ、 惜しいところでレシー だっせー。 \vdash 口すぎじゃ - ブが間 に合 ねえ?」 1わず、 花は 砂 0) 上 に 派手に 転 んだ。

少年たちの声に慌てて体を起こし、花は汗をぬぐった。 なんだかくらくらする。 喉も力

ラカラだ。ズレたメガネを直し立ち上がろうとすると、

「大丈夫?」

審判台から降りてきた星流がかがんで花を覗きこんできた。

---は、恥ずかしい-

心配そうなその顔に、暑さでほてった顔がさらに熱くなった。

られ、全身から力が抜けた。だがその時、ふわりと体が浮いた。 前回も、そして今回も、星流と会う時はどうしてこうなんだろう。 汗まみれで砂まみれでの自分は最悪に違いない。ありさや他の女の子たちと全然違う。 再び泣きたい衝動

「大丈夫、落ち着いてやれば出来るよ。……頑張れ」

耳たぶに囁き声が触れた。 星流の手に支えられ、 花はい つの間 にか立ち上がっていた。

,

一ちょっと、

星流先輩!

早く続き始めましょうよ」

爽やかな微笑に花の鼓動がトクンと鳴った。

そこへすかさずありさの声が飛んできて、星流は手を放し審判台へと戻っていった。

大丈夫、出来るより

きゅっと引き締まる。 不思議。 星流に言われると本当にそんな気がしてくる。 花はぐっと唇を結んだ。 逃げ出しかけていた気持ちが

「ううん、大丈夫!」 「おい、大丈夫か? のぼせたんなら少し休憩

64

気 遣ってきた十夢 罗を花は. 振 り返 り、 そしてまっすぐに見上げ to

まだ出来る から。 あ、 あ の、私下手だけど…… ちゃんとボール拾うから。 死 ぬ 気で

追いかけるから。まだ間に合うよね?」

んな風に逃げ腰じゃい 決 が意を 両手 に 握りし けな 8 花はは い。 言 せめて出来ることをしよう。 () 放った。こうなったのはもとは自分の ダメでも、 せいでも 全力で。 あ る。

花のポジティブな発言に面食らった様子で十夢が目を見張っ

ゃあ本気でいけよ。 拾いさえすればオレがなんとかするから」

お、

おう」

突然の

大きく頷いて花は十夢の後ろについた。

そ話すありさたちが気に とにかくボールを拾 おう。 なっ たが、 十夢はうまい + 夢 0 頭を飛び越えたボ 落とさなければ 1 何と ル に 意識 かしてくれ を 移 L 替 る。 「えた。 ひそひ

---絶対拾う……-

んとか · 夢 ラ イン際に 足が砂浜を蹴り 跳 ね 返 す。 落ちてい 空中 でゆ くボール ――そして、 るやかな半円 の下 相手コートにきれいなスパイクを決めた。 -に花は を描 腕を伸ば くビー して飛び込んだ。 チ ボ i ル がきらめく太陽 グーに 握っ に 重なった た手でな

できんじゃ その気になれば。 こ の 調子 で逆 転するぞ」

「う、うん……!」

っしゃ!」

十夢がガッツポーズを作り、

座りこんでいた花を振

り向

た。

うれしさに の後 も花は必死 花は満 に 面 ボ 0) 笑顔 1 ルを拾っ に な つ てプレー た。 さっ きまでの を繋ぎ、 劣等 なんとか 感や 同 不 点 安 に が 追 全 1 部 つい 吹 き 飛 た。 h

--あと一点……。

より出なくなっているような気がする。相手 F, クドクと鳴る心音と同じ速さで花は荒い息を繰り返した。 チ ームが返してきたボ 体が熱い、 ールを十夢が拾った。 でも汗はさっき

トスで打ち上げるため、だるさを堪えて花は走り出した。

---あ、れ?

その瞬間、がくっと膝が折れた。

視界がぐるりと回 る。 そのまま花の意識 はぷっつりと途切れた。

次 に目を覚ました時、花はどこかの部屋 のベッドの上に寝てい た。

あ、起きたね。大丈夫?」

こは店の二階でやってるペンションの部 F, ・アから入って来たマリナが 日に .焼けた笑顔を向けてきた。 「砂浜 屋。 は \) 飲みな。 起きられる?」 で倒れたんだよ。 ح

たキャップをはずし、 ペットボトルのスポーツドリンクを差し出され、花はゆっくり起き上がった。緩め 花は冷えた液体を喉に流し込んだ。

てあ

「あの、私倒れたって……」

「そう、 汚れてたから、 夢たちが運んできたのよ。あたし看護師免許持ってるから。よかったわよ、症状軽くて。 日射病だね。真夏の炎天下で激しい運動をしたせいで、めまいを起こしたの。 朝着てきた服に勝手に着替えさせちゃったわよ」

あ、ありがとうございます」

に冷却シー トを貼ったまま、 花はペコリと頭を下げた。 まだ頭がずきずきす ź 体 ŧ

少しだるい。

まったく、 十夢もサ イテー よね。 もう少し気遣えっての。 振り回

謝るマリナに花は「い、 いえ!」と頭を振った。そういえばゲー ムはどうなったんだろ

迷惑かけちゃったな……そう思った時、 ノックが聞こえた。

はいはい」とマリナがドアを開ける。 その向こうにいたのは

Ó, 西野さんの具合どうですか?」

星流 の声だと気付き花は反射的にぴんと背筋 を伸ば

の準 備があるから行くわね。 お見舞い? さっき目が覚めたところよ、 もう少し休んでた方が どうぞ。じゃ いいい · わよ。 ああたしはお客さん 何 か あ つ た 5 呼

で

0)

夕

飯

を襲った。 星流と入れ替わりにマリナは出て行った。 部屋に二人きりになる。 言い 知 ħ め 緊張 が 花

目が覚めたんだね。 よかっ た。 もう大丈夫?」

どう声をかけようか迷っていると星流が訊い て来た。 花は慌てて冷却シ 1 1 をは がし

「う、うん大丈夫……! ごめんなさい、 なんか迷惑かけて……」

·そんなのいいよ。こっちこそ、 気付いてあげられなくてごめん」

訳なさそうに星流が自分の髪をくしゃっと握った。

そっか、 それで様子見に来てくれたんだ……。

その気遣いがなんだかうれしい。 だが浮かれてい る場 合じ B な (J ことを花は 思 (J 出

あ

の、

そういえばゲー

ムはどうなったの

?

Ł

Ū

かして……負け

ちゃ

つ

た?

「ああ、花ちゃんが倒れてそのまま引き分け。その後ちょっとゴタゴタしたけど、 練習試合でカタをつけようって話になって、今はバーベキューの用意してるよ」 来 月 0

「……バーベキュー? ……何で?」

んなに険悪な雰囲気だったのに?いったいどこから友情が芽生えたのだろうか。

「今日この近くのうちの別荘でバーベキューする予定だったんだ。でもせっかくだから皆 でどうかなと思って、オレの提案。有川くんの親戚が店の前使っていいって言ってたから、

別荘の管理人に頼んで一式運んでもらったんだ」

「あ……もしかして、それに誘ってくれたの……?」

「まさか会うとは思ってなかったけど。さらにこんなことになって」 メールのことを思い出す。そう、と星流が頷いた。

「ご、ごめんなさい。実は私が悪いの。あのね……」

「いいよ、話は聞いてるけどただの事故だし。それよりさ」 星流が海岸に面した窓の方を見た。 外は空も海も、 いつのまにか夕暮れ色にほ

んのり染

まっていた。 花の方に向き直 り、 星流はかすかに口角を上げた。

「バーベキューの 前に見せたいものがあるんだけど。 ……起きられる?」

たくさんのヨットや小型の船が並 そして停泊している白いプレジャーボー いからこっそりペンションを抜け んでいるその間をすり抜け、 出し星流に連れて行かれたのは、 ŀ の前で花を振り返った。 星流は桟 近くの港だった。 橋 へ向かって行

乗って」

乗ってって……。

!はぽかんと目の前の小型のクルーザー を見上げた。

これってもしかして自家用!?」

昇星学院の生徒はお金持ちだと聞いたが、 持ち物のレベルが違いすぎる。

ると先に乗船した星流が手を差し出してきた。

オレの兄貴のだよ。 星流に手を引っ張られて花はボートに乗り込んだ。するとすぐにエンジンがかかった。 今はカナダに行ってるから、 ちょっと借りたんだ。 ほ ら、 乗って」

「えつ!? なんで動いたの!?」

あはは、ちゃんと操縦士がいるよ。頼んでおいたんだ。ちょっと沖まで出よう」

船が動き出した。大きな揺れに花は慌てて近くの手すりを掴んだ。

向こうへいこう。ここだと酔っちゃうから」

促され、花は星流とデッキへ出た。

船は桟橋を離れ、 夕焼けの滲むオレ ンジ 色 この波 を弾 い . て 沖 と突き進 む。 船 縁

に

掴

ま

目

をつ

ながら、 わあ……すごい……!」 花はそのスピードに思わず声を上げた。

む って思い切り空気を 突風 のような熱 () 潮風が正 吸 い 込んだ。 一面から 吹きつけてくる。 それを全身で受け止め、 花は

L いっそう鮮や ばらく水平 海 と交わる彼 かに輝 線 に向 方 の空 か 1 てい が燃えるよう って突き進み、 る。 な赤をゆ やが てクルー っくりと広げ始める。 ザ は速度を落とし、 近付くごとに 緩やか な波波 そのの 色が 0)

Ì

上

で止まった。

「どうだった?」

船首部の手すりにもたれながら星流が訊いてきた。

「すごい……! 速くて空を飛んでるみたいだった……! 前に連れて行ってくれた公園

もよかったけど、すごくきれい!」

「よかった。……やっぱり花ちゃんを連れてきて正解だったな」 興奮気味に花は答えた。思わず両手を握りしめてしまう。 星流がくすりと笑った。

「実は、今日皆を乗せるはずだったんだ。——予定外のハプニングがなければね。 -え ? _ でもきっ

「え……どうして?」

と君みたいに素直に感動してくれる人はいないだろうな」

こんなに素敵な景色なのに――。花が首を傾げると、 星流は小さく笑った。

「……皆、目先の利益ばかりにとらわれてるから」

-え ? _

「ううん。そうそう、今日直接花ちゃんに言いたいことがあったんだ」

ーえ? _

そう言うと星流はキャビンに入って行き、何か持って戻って来た。

「はい" おめでとう,」差し出されたのは冷えたコーラのビンだった。

張ったお祝い。 逃げないで皆と向き合ったんだろ」

-あ.....。

っと思っ

7

V

たことを花

は

に

した。

何 !を言 わ れ 7 N る 0 か、 すぐにわ か へった。 ちゃ んとわ か つ てい てくれた h だ....。

てじわ り、 と熱いもの が込み上げた。

だから ―これはちょっとしたごほうび。 ……花ちゃ h 0) 勇 気 に

花の持つビンの口に自分のをカチンと重ね合わせた。 その音が、 花の 胸 に 深く響

()

た

違うよ……」ビンを持つ手に自然と力がこもった。

星流……くんが、 何 度も何度も、 心の奥で響いていた星流 励ましてくれたから。 背中 の声。 を押してくれたから、 頑張れ、 負けるな。 頑 あ 張 0) れ 言葉があったか たんだと思う」

5 今の自分がここに いる。 花は星 主流を見 上 げ、 微笑ん だ。

ありがとう、一 歩踏み出す勇気をくれて。もしあの時 星流 くんに会わなかったら、

と逃げ出してたと思う」

そしてまた同じことを繰り返し、 その連 足続だっ たろう。 その 毎 日 が、 あ 0) 日 変 わ

歩進もうと決めたのも結果を出 にオレは何もしてないよ」赤い夕風に星流が髪を掻き上げた。 したのも、 部花ちゃ 力だよ。

全

んの

君

が

頑

張

つ

た

h

だし

つ

た。

そうだろうか。そうだとしてもきっかけをくれたのは 星流だ。

あの……星流くんはどうして私によくしてくれる ても何に ŧ い いことな いしい 0) に の ? 私 みた

(J

な

弱

虫

で

暗

い

コ

を

か

5 に紳 花 \pm ŧ に とっ 的 で に 同 7 接 年 は L 代 てく 手 0) 0 男 届 れ 0) ζ た 子 は 人な たち ず 0) h に てい は、 な なかっ か 存在だ。 5 か た。 わ れ たり か ŧ い 星 U 8 流 5 は 顔 れ ŧ た 経 頭 も家 験 L 柄 か ŧ な V 1) 本 h な

風

見える。 れといって取り柄もなく、 だから星流 のやさしさがうれしい 冴えない自分。 反面、 同じ顔 不思議で仕 なのにありさの 方な 方 がず 5 と 魅 力的

ょ。 ……オレ、花ちゃんはすごいと思うよ」

気持ちとともに俯い た顔を花は跳ね上げた。 その先で、 星流 が笑った。

B

ごいと思う。 道を探そうとするでしょ。でも花ちゃ 今日だって、 確かに弱いところも それってなかなか出来ることじゃ 倒れるくらい必死 あるかもしれないけど、それでも自分の に 頑張ってただろ。 んは立ち向かった。 ない。 そういう一生懸命なところ、 人って困難に だからかな…… 足で立ち上がったじ 直 面すると、 オレもあきらめ 普通

一……あきらめないでって?」

海士になりたい

んだ。

昔から海

が

好きで、写真集とかばっかり見てて。

今 の

高

校

に

ないで頑張ろうかなって思えたんだ」

……オレさ」 両腕を手すりに載せ、 星流は穏や かに揺らぐ海を見つめた。

部 たのは親父に勧められてだけど、 あ る大学 に ・進みたいと思ってる。 海が近かったからでもあるんだ。 それでいつか世界中 0) 海 出て航 高校を出 海 が Iたら、 た 海 h

いそうもない希望だけどね」

「どうして……」と言いかけて花は思い出 した。 星流 の家は 確か政治家一 族だと聞 1) た。

前に無断で船舶免許とろうとしたらこっぴどく怒られた 猛反対。 だからせめて近くにいたくて、 よくここに来る。 んだ。 時 うちは 間 にがな 親 · 時 は 父が あ 厳し いから

本当に好きなんだね、 海 が

たりし

に

うん、 と星流が頷く。 穏やかに瞬きを繰り返す瞳がきらきらと輝 い てい

「……でも、 涙を拭いて前を向いた花ちゃんを見て思ったんだ。 反対されたくらいで、

きらめちゃいけないって。もう一度追いかけてみようかなって」

「うん、それ……いいと思う!」力いっぱい花は頷いた。

本当に好きなら、追いかけるべきだよ! すごくステキな夢だと思う」

世界中の海を巡って旅をする。ちっぽけな自分には想像出来ないけど、 星流 なら叶

「ありがとう」星流がはにかんだ。

れそうな気がする。

「だから今の夢は小型船 舶 免許、 かな。 自分で自由に操縦できるようになりたい んだ」

「うん、絶対頑張ってね! きっと取れるよ」

そうしたらまた――と口に出しそうになって花は慌てて喉の奥に押し戻した。

――な、何言おうとしたんだろう……。

と胸を撫で下ろしていると星流が言った。 また乗せてね" なんて、きっと迷惑に なるに決まっ てる。 気 付 N 、てよ か っ た。 ほ つ

「そろそろ戻ろうか。暗くなってきたし」

コックピットに伝えに行った星流が戻って来ると、 エンジンがかかった。 クル ザ が

Uターンをして港の方へ走り出す。

贅沢だけど、ちょっと残念。夕陽――短い時間だったな……。

ふいに星流が

? 口を

開

いた。

V

る

が沈んでいく水平線を名残惜しそうに振り返って

「あのさ、今度」

エンジン音と波の音が邪魔をする。でも思いがけないその言葉はしっかり花に届いた。

「また、ここに来ない? よかったら、夏休み中に」 図書館の窓際の閲覧席。そこがいつも夏休み中の花の指定席だった。

本と参考書を積み上げて夏空を見上げ、ため息を落としていた。

それはまだまだこの先も、続いていきそうな気がした。――でも今年は、ちょっと違う……特別な夏休み。



あらすじ

田尻すなおと中村ひかるは高校一年生。ふとしたきっかけからゲームを作ることになった。次々と巻き起こる難問、社会からの軋轢、そして恋。二人は努力、友情の果てに勝利をつかむことが出来るのか……! (内容には若干の誇張があります。申し訳ありません)







横井ひろこ

今年の春大学を卒業した ばかりのぴちぴち女教師。 22歳独身。

田尻すなお

自称「どこにでもいる平 凡な高校生」。昔ゲームを やっていたことはあった が最近はご無沙汰。

中村ひかる

孤高の眼鏡。古いコンピュータを未だに愛用する不思議なコンピュータ マニア。ただし勉強はいまいち。

第三話 Air

午前 ため使え こまでの気力はなかった。 今日は 七 中 月 -だけで 半 ない。 ば。 ゲーム製作同 終 期 かわ、 作業をするのであれば少し離 末 j, 試 験 も終 一好会で使っている視聴覚教室は業者の 田 尻 わ すなお つてあ と中 とは 村 夏 休 配れた中で ひかる み へと気分を高 村宅まで行く必要があるが、二人はそ の二人は めるだ メ 例 に インテナン ょ いって屋 け 0) 月 上 曜 スが入っている に 来 7 終 い 業 た。 式 は

「やっぱ、ダメだったなぁ」

田尻は屋上の手すりに手をかけながらそうため息を付いた。

「そうだな」

中 -村は 両手をズボ 0) ポ **ジケット** に 入れたまま答える。 二人とも 何とは なし に 駅 0) あ

を見ている。

とも 売れ 控 たの えんめ かく(直前に渡そうとすると、なぜか横 は数本。 に言っても前 初 回 の反省もあって画 口 0) 即 売 会の 売 Ŀ 面 は 写 并 芳しくは は 真を多用したポップを用意し、 完 成 版を即売会で買うことにこだわ な かっ た。 毎 口 見 に 来 不てくれ ジ ヤ ン る横 ル 5 た 効果 井 は

知らな を狙った「弾幕 か ったが中村もかたくなにこだわった)」などの売り文句をたくさん散りばめたが、 |系シューティングゲーム||「美しい透過光 (田尻はトカコウという言葉を

ひと目は引いた割に手にとってもらえない。

今日の屋上にはあまり生徒は多くない。 昼休み後の授業もないため、 昼 食をとって

者も少なく、 遠くを見つめて写生をしている女子生徒。 お菓子とお茶を用意してシートの上に座っている女子生徒が何 むしろ校庭や中庭からの声の方が大き 人か。 あとは

感じ」

田尻は身を起こした。自嘲気味に続ける。

「こうまでダメだと、いっそすがすがしいよね。

なんかもう、

売れなくても全然いいって

「まぁ、俺としては売れても売れなくてもいいんだが」

中村は真面目な顔で答えた。

一まあねー。 お小遣い使っちゃってるけど、これは別にいいの。 それより、 せっかく作っ

ても誰も遊んでくれないのが悲しいなー」

「そうか」中島は眉に皺を寄せた。「そうだな。うん、そうだ」

「よく、作者はタネがわかってるから楽しめないとかいうじゃん? 僕たち自分でやって

てこんだけ楽しいのに」

「やればそんなのすぐわかるのになぁ」「そうだな。毎回作ったゲームには自信がある。それは確かだ」

田尻は再び体を折って手すりに寄りかかった。

風が二人の間を流れた。もうすっかり夏なので、風は生暖かい

そし

して青。

中 帰っててくれ」 は 眼 鏡 越し に 中 中 村は足元に落としてい 庭に立 つてい 、る時計 : を 見 、たカバ た。 ンを持ち上げた。 最 近、近 視の度が 進んでい 中 には何が入ってい る気がする。

るわ けでもない。 「ちょっ と用事 があるんだ」

「そう?」田尻は 顔だけ中村に 向けた。「じゃあね、 また 明日」

「ああ。 朝から開 けてもらえるんだよな?」

「うん、 横井先生はそう言ってた」

そのうち、

尻 は 中 -村とわ か れ たあとも L ば らく屋 上 か ?ら風 景 を見てい た。

夏休 周 りから 生徒 の姿がだい 、 ぶ 減

ったことに気づく。まだ何人か残っては

るが

いみ前 にわざわざ学校に残っている理由もない。

田 尻 は そのま ま 屋 Ŀ を降 り、 昇 降 . . . で 上 一履きを靴に 履き替えた。 昇 降 か 5 外 に

空を見上げる。 雲 ひとつない 快晴。 きっと明日も晴 れだろう。

不思議 な軌道を描 1 ているそれはよくよく見ると本のような形をしている。 思ったより大

きい。

その

とき、

田

尻

は

視界

0)

隅

に

な

に

か

違

和

感を感じ

た。

青い

· 空

に白

1,

何

か

が

舞

って

出

そ ħ は ス ケ ッソ チ ブッ ク だっ た。 田尻は 軌 道 0) 読 め な い それ を避 けるよう É 校 舎 O壁 際

と寄 nった。

すような何 そ 0 直後に か。 感じた か し、実 衝 撃 0) 際 理 に 由 痛 を いり 田 わ 尻 けで は はなな 瞬 理 い。 解 できな 頭 から滴 か つ る何かが た。 痛 地 い 面 ような気が 品を染め る。 す 赤、黒

79

?

クは見ていたが、 ラスチックで出 その時 に なって初 来 た、 水は 8 見 中 7 に 7 \blacksquare 仕 1) 尻 切 な は りの () É 分 が水水 入ってい 呆然とし 浸 L るバ てい に な ケッ。 ると足 いってい 元に 中 ることに は 濡 何 か れ . が 当 気づ 7 い Tたる い るが た。 概 0) に気づく。 ね ス 空だ。 ケ クッチ ブ w

屋上から声がした。女子の声だった。

いるの?」

「……そりゃ、いるよ」

ない 田尻はどう答えてい かどうかまでは 気 が V か 口 5 わ な からず、 () 屋上 に 向 かって一 応答えた。 大声を出さな か

わかった」

屋上から冷静な女子の 声 が 帰 ってきた。一応 届 V 7 は い た 5 Ū

たら が 8 7 幸 田 辺り Ū 尻 1) に き は を見 ŧ 途 画 割 方 用 に 渡 n 紙 した。 暮 7 が れた。 数 い 枚。 る ゎ 生徒は けで プラ い ることを判られ は ス ほとんどいな チ なさそうだ。 ッ クの バ い。 ケ たところで 'n 足元 は 筆 に を洗うも は 何 はスケッ が 変 0) わ る だろう。 チブックと、 わけ でも 土で汚 な それ れ 7 か 田 5 尻 は 外 は る n 改

() い 鉛 7 手 \mathbb{H} 持 尻. () る 5 で は 書 そ か 無 V 沙 0) う よう た 汰 ち、 静 に なバ な 物 妙 つ 画 ラ 7 な 人の 田 ŧ 工 テ 0) 尻 が イ 顔 は た に 0) スケッチブックと散 ま 富 デ ッツサ h に だ絵 混 じ シ、 が つ ス 7 色 ケッ 1 0) る 0 チ Z 5 V とに ブッ た ば 風 つ ク 気 景 た づ を 画 画 埋 V 用 た。 紙を拾 め 1) 7 か ス に ケ t 1 普 始 ッソ チ 段 8 Ť か た。 ッソ 5 ク 絵 色 に を 0) 書 濃

か

1

7

あ

ることもあ

り、

バ

ラに

なっ

7

V

る

画

用

紙

に

書

か

れ

てあることも

あ

る

漫

画

タ

ッツ

チ

0)

に見える。 イラスト。 これを書 体の各部 が いたのはアクションが好きな人だということがわかる。 強調され てい たり、 動きをブレ で表現したりとだいぶダイナミック

「ありがとう」

昇降口から出てくるはずなのに、 背後からかけられた声に田 尻は慌てて背筋を伸ばした。屋上から降りてくるのであ なぜか全く反対から声がする。 れば

いや、なにが?」

言いながら振り返った田尻 の前に は背の低い女生徒が立っていた。 肩までつかないくら

いの髪の長さ。 やけに 太い 眉 毛が 印象的だっ た。

夏は暑いの」

女生徒は胸を張ってそう宣言した。 田尻はなんと答えてい V 0) か 判らなかった。

「ええと、そうだね

「これはお詫び」

「え? なに?」

女生徒は手に持っていたペットボトルのお茶を田尻に掲げた。 田尻はあっけに取られた

ままそれを受け取る。

「 え ? 」

熱がないように」

「え?」田尻は女生徒の言葉に慌てて手元のペットボ トルを見た。 別に 熱くはな

時 期に熱いお茶なの?」

女生徒の顔とペットボトルを見比べてい 、 る 田 尻に向 か っ て 何 事 きないように続ける。

明 日 ŧ 晴 れ

え ? ええ?」

持ってきた。自分の中でストーリー ていたものだろう)が降ってきて、 田尻には話のつながりが全く読めなかった。スケッチブックと一緒に水 (多分筆 それを被 を組み立ててその意味不明さに ったら女生 徒 が 意 味 不 、悩む。 明の言葉と共 に 平を洗 お 茶 を つ

「どうした、 田尻」

を通る道から来た。 そこに中村がやってきた。 中村は女生 徒と同 じ方向、 つ まり 昇 降 \Box とは 反対側、 校舎

しょ濡 れだな。 風邪引くぞ」

中 -村は 田 民の絵 の具まみれのワイシャツを見てそう言った。

尻は女生徒が何を言っているのかがわかった。

そこで初めて

田

から が出 自 る」ことがある。 大丈夫だとは思うが念のため風 分のスケッ チブックを拾 多分明日も ってくれて「ありがとう」でも、濡れ _ 晴れてい 邪 の予防 にいい「お茶」を遠回 る」だろうし、 今日も てしまって りして買って持ってき 暑 のですぐ乾く は 風 邪 で

そこまで理解 L た 田 尻 は女生徒 0 顔をまじまじと見 た。 何 かギ ヤグでやってい る わ け で

はないらし

た。

あもう、 色々と省略しすぎ」

ま ってい 田 尻 はスケ た画 用紙の数枚が落ちた。 " チブックを持った左手 , で 頭 を か (J た。 その は ず み でスケッ チ ブ ッツ ク に 挟

 \mathbb{H} 尻 は 慌 ててしゃ が んで近り < に あ るも 0) か 5 拾 い 始 8 た。 数枚落ちたうちの < か

は

風 に 乗 っ て女生徒を超 **旭えて中** 村 0) 足元まで届 (J た。

ポーズを決めている。 を言ってい らくかかった。 田 尻 は 自分 るのかは判らない 0 中村 拾 うた は その 分を女生 服の動きや筋 画 が、 用 紙をまじまじと見つめ 徒 何か叫 に 渡した 肉の膨らみまでが見える非常に んでい が 、るらし 中村 が てい () 画 用 た。 紙 を拾 元気そうな V 肉感的 上 げ 動 な 少 < ジイラ 年 ま が で ス 大 に <u>١</u> 振 は りな L ば 何

田尻」 中 -村は画用紙を裏返して田尻に見せた。「俺たちに 足りな (J 0) は、 ح れ

ない のか?」

「足りない、って、 何 ? _

「ほら、即売会で俺たち浮いてたじゃないか」

「まあ、 周りはみんな絵がうまそうだったもんなー す げ よなー。 中 学生とか るんだぜ

あれ

「そうじゃなくて、 これ

-村は 画用紙を掲げながら自分でのぞき込んだ。

こういう判りやすいキービジュアルがないとダメなんだよ」

ビジュアルって、 何 ? _

ゲームを説

明するため

の絵。

俺

たちのゲーム、

4

'n

ば

おもしろいってのは

明らか

だろ?」

ね。 でも、 それがどうし

たの ?

ば判るなんて言ったって、 「そこがまずいんだよ。 俺たちがポップ書 ゲームはその場 いても、ゲー で判ってもらえるも Ĺ の内 容判 のじ 43 ってもらえない な 4 1

「うーん」田尻は考え込んだ。叫んでいるらしき少年を見つめる。「でも、 ゲームと無関 係

な絵を描いても仕方なくない?」

「そうだ。だから、だよ」

中村は一歩踏み込んだ。思わず画 用紙の端を握り締める。 どことなく絵 の中 . 0) 少年 0) 眉

毛や目に女生徒の面影があるような気がする。

ような」 「ゲームにきちんと寄り添った絵が必要なんだよ。見ているだけでゲームの 魅 力 が伝 わ る

チブックを体の前に抱えながら自分のかいた絵を睨みつけているように見える。 を握り締めて勝手なことを言うオタク二人。 そこまで言って中村と田尻は女子生徒の異様な雰囲気にやっと気づいた。 引かれて当然の構図だった。女生徒 人の か は スケッ た絵

田尻は慌てて女生徒に声をかけた。

「ごめん、君の絵だったね。変なこと言い出しちゃって」

田尻は中村の元へと歩き、絵を受け取って女生徒に渡そうとした。

「まって」

しかし、女生徒はその行動を途中で止めた。その目は真剣そのものだった。

-え ? _

田尻は中途半 -端な姿勢のまま首だけ女生徒に向き直った。 女生徒は続け る。

「ライバル?」

「ええ?」

「努力、友情、勝利?」

V) *₹*> 田 尻は絵を受け 取 る 0 を諦 め て女性との 方へ 、 と 向 き直 つ た。 横 井 先生 4 た V

だ

なあ」

「バトル?」

言われてみるとなんとなく戦闘的な絵にも見える。

「ゲームだよ。ゲームを作ってるんだよ、僕たち」

したり

女生徒は 田 尻 0) 顔と中 一村の手の中の絵を何度か見比べた。 中村はどうしてい į, のか 判ら

ず画用紙をもう一度掲げ直した。

明してもらえなさそうなので、 かんでいた。いろいろ逡巡があった末、 女生徒 んの顔に は驚愕と尊敬と怒りとあとなに 田尻はおどおどと答えた。 結果的に田尻を見つめる。 か、 様々なものが混ざった複雑な表情 相変わ らず言葉では説 が 浮

「何か気に障っちゃったかな……? だったら、ごめん」

「ゲーム」

それは女生徒の期待していた答えじゃなかったらしい。 女生徒は 再び 画 用紙 を見 つめ

た。太い眉の間に深い皺が寄る。

いやほら、 もう何度も即売会に出してるんだけど、 全然遊んでもらえなくてさ」

「ゲーム」

ようなことを言ってしまったのかもしれない。 同 じ言葉を繰り返す。 徐々にニュアンスが変わってい 田 尻は頭をかいた。 る気気 がする。 な に か 逆 鱗 に 触 れ る

「ほら、 こんな素敵な絵があったら手にとってもらえるかなって」

女生徒は田尻を見た。相変わらず顔は険しい。ような気がする。

あ、 いやいや、いいの。 気にしないで、 勝手に思っちゃっただけだから。 使わせてもら

えないかなー、とか」

ーダメ」

女生徒の拒絶は一瞬だった。田尻は落胆を隠しつつ軽く笑いながら答える。

「あはは、そうだよね、やっぱり」

「この絵はダメ。この絵はゲームじゃない

⁻できれば、ゲームに合わせた絵の方がいいんだけど、さすがにそこを頼むのは……」

「ゲームの絵はゲームなの」

女生徒は二人に向かって再び高らかに宣言した。二人は顔を見合わせた。どこから説

したらいいのか判らない。

二人の視線が絡んだ末、結局中村が答えた。

俺たちの作ってるゲームにはほとんどグラフィックないんだ。だから、ゲームの絵を使っ

てもこんな凄いものにはならない」

女生徒は中村の言葉に 眉の間 の皺を深めた。険しい顔がますます険しくなって何に 対し

て険しいのかすらも判らない。

「いや、だからさ、今までに描いた絵でいいんだよ。 田尻は慌てて空気を読 中村に任せておくとこじれる一方な気がす 無理に急いで書かなくても」

-村に悪意はないにしても。

んでフォ

ローした。

「バトル?」

や……まだ次回作は決まってない。でも、 こういうキービジュアルを使える な

らそれでもいい気がする」

中 村は田 尻 の思惑とは無関係にそう答えてい た。 田 民が口 [を挟む 前 に 女生徒は きっ ぱ

と答えた。

「だめ」女生徒の拒絶は激しかった。「そんなの、ゲームじゃ な <u>ر</u>

いやまぁ、そうなんだけどさ……」

田尻は頭を抱えた。下手に説明するべきではなかったの かも Ū ħ な

一枚の少年のイラストを中心に小柄な女生徒と男子生徒

が

言

V

合

いをし

ている

図はいか

にも奇妙だった。言い合いにすらなっていない。一方的に 沈黙を破ったのは中村だった。相変わらず空気は読めてな 強 い が語 調 なのは女生徒だけだ。

「できればゲーム内の絵も描いてもらえると嬉しい」

「うん、そうそう。ちょっとでいいからさ」

田尻は中村の言葉を引き継いだ。返ってきたのはさらに強 V 拒絶だった。

「だめ」

しかし、その後の言葉は田尻の予想とは全く正反対だった。

「私が書いたゲームじゃないと、私の絵をポスターにできない」

-え ? _

田 尻が呆けている間 に女生徒は中村の手 元の画用紙を指さした。

「バトル?」

「それでも、いい気がしてきた」

中村は女生徒の顔に浮かんだ笑みを見のがさなかった。

「なら書ける」

「え?」

田尻は女生徒の豹変ぶりが理解できなかった。 ついさっきまで嫌がっ てい た 0) は なん

だったのか?

「私もゲーム作る。ポスターも書く」

「え? ほんとに? 美術部なんでしょ? 部活動は?」

田尻は慌てて説得にかかった。 何をどう説得して、どういう状態に持って行きたい のか

自分でもよく判らない。

「辞める」

「待って待って、そんな軽々しく。こんなにうまいのに」

「いいの」女生徒は眉を釣り上げた。どうやら喜んでいるらしい。「書く」

田尻と中村は顔を見合わせた。どうやら「ゲームをつくりたい」と言っているらし

とはわかる。

おずおずと田尻から声をかけた。

「ええと、ゲーム製作同好会の田尻すなおです。一応代表やってます」 一俺は中村。 中村ひかる。 田尻と同じクラスの1年だ」

「田尻と中村

村の考え込む姿と似た何かな 女生徒 は二人の 顔 を交互に のか 見 比 ŧ べてはしばらく眉をひそめた。 しれない。 怒っているのではなく中

「まじままこ」

女生徒は簡潔にそう言った。

「ままま?」

それが自分の名前だと分かるまで田尻には少しかかった。

真島、でいいのか?」

ん。まこはひらがな」

鼻島 まこは二人に頷いた。

「そっか。よろしく」田尻は一応代表らしく活動を説明することにした。 聴覚教室で作業してるんだ。今日はもう鍵を締めちゃったんだけど、 明日か 「僕たち ?ら夏 休 は普 4 段 間 視

「ん。わかった」

は朝から活動する予定なんだ」

真島はそう頷いた。 結局画用紙に書かれた少年は受け取っていな

()

Ž

で田尻が鍵を受け取って先に視聴覚教室に 翌日、夏休みにもかかわらず横井 は朝 か ら職 向 か べうと、 員室に 来ていた。 視聴覚教室 0 用事があるという話 前 には 中 ・村と真島 なの が

でに集まっていた。

三人はパソコンの前の椅子を引き出すと車座に座った。

やっぱさ」田 尻 が身を乗り出した。 格闘 ゲ ノームが V いと思うん だし

対は頷いた。「俺もそう思ってた。真島のキービジュアルで行くならそれ

しかない」

「やっぱりか」

中

闘ゲーム」

真 島 は しみじ みとつぶ B (J た。 眉 を寄 せ る Ō は 単な る癖ら L い。 \Rightarrow □ 0) 言 は 喜 び لح 感

慨と期待 待 が込め られ 7 V ると 田 尻 は 勝手に 解 釈 L た。

田 尻 は鞄から レポ 用 紙 を 取 ŋ 出 L た。 レ ポー 用 紙 に は 出 来上 が り 0) 想 像 义 8

 \vdash

操

作

方法、 ルールなどが書き込まれてい る。

j

 \vdash

一こう、 画面に二人キャラがいて、 十字キーとボタンで操作するんだ」

「見たことある」 真島はレポート用紙のウソ画面 に見入っていた。「小さい 頃 に 0)

お

- 最近はすっかり 3D ば

兄ちゃんがやってた」

いかりみ たい だけ ど、 今 回 は 2D が い いと思う」

⁻ライバル?」

真島は顔を上げて田尻を見た。

よね 「そうだね」田尻は 女性キャラと、 普通なら使わないような、 頷 いた。「できれば主人公とライバ だけどうま ζì ル は欲 人が使うと凄く強 L 1 ょ ね。 あと、 1 色 重 ŧ 量 欲 級 0) بح

具 体 真 化 島 L は てい 目 を 、く錯覚 輝 かせ 7 を覚えて 田 尻 0 話 い を聞 た。 き入る。 \mathbb{H} 尻は 説 明 ĺ な がら頭 の中 0 ゲー ムが 徐 々

に

なに . 村 は説 ブツブツ言ってい 明 を聴きながらレポート たのを切り上げると顔を上げて田尻 · 用紙 を 睨 h でいた。 ほとんご に 話 ど 聞 L こえない かけた。 、ぐら い 0) 声 で

ちょっと待て」 中 . 村 0) 顔 は険しい。「言ってることはよく わ かる んだが、 俺 が 昨 日

計

してきたのを見てくれ

全く入ってい 村も手元 ない。あちこちに数式が書かれ 0) 鞄 からレポ 1 1 用 紙 を取 り出した。こちら 数式 のイコールの右 には それとわ には数字が書 か るゲ ĺ |き込 \mathcal{L} 0) 図 は

昨日、 た上で下線が引いてある。 色々調べてみたんだが、 どうも俺たちはとんでもないことに手を出し てい る 気が

する」

「この丸は?」

ポート用紙の半分以上を占めるのが丸 の中に単語が書かれた図。 それぞれ の丸は

で結ばれており、 矢印 · の 脇 にもなに か 一 言単 語 が 書 V てある。

「マルコフ線図。丸の部分が状態、その間を繋ぐ矢印がトリガー。

操作やルールで遷移

らする」

 \mathcal{L}

お

「そうだな」 「いや、やっぱり宇宙語喋ってるよ中村」 中村は田尻の書いてきたレポ 1 ト 用 紙 の画 面を指さした。 「格闘ゲー

-パンチとか、キックとか」

ては状態はアクションそのものだと思っていい」

クターが取りそうな行動の名前が書き込まれている。 言われてみると丸の中には攻撃、 待機、 移動、 ジャンプ、 ダメージなどい かにもキ ヤ

「そうだ。ざっと調べたところ、 うえ、それぞれの状態に五枚ぐらいはアニメーションを使っているらし 格 闘ゲ ームに必要な状態 は 最 低 でも十 は 下 5 な そ

「えらい具体的だなぁ」

がキャラ数分かかる」 家で格闘ゲームをコマ送りして調べた。で、一人のキャラを書くのに 最低五十枚。 ح

動 で 真 使 島 は つ 促 7 さ N る れることなく頷 ŧ 0) では なく、 い 持 7 ち Í 分 歩くときに 0 鞄 か 5 小 は 柄な 小 さ スケッ 1 ŧ 0) チ を グブッ 使うら クを取 ī り出 サ L イズは た。 5 部

うど 昨 \exists 降 . う 7 きた イラストと 同 10 程 度

丰 _ ح る。 ヤラクター ス 全体 ケ ッ 的 チ 体 に ブ 書くのにどれくらいかかっ 動きと性 が ッ 書き込 クに は 格が見 (まれ 丰 ヤ 7 ラ える。 クタ V る。 ĺ 熱血なキャラクター。 それぞれ が書き込ま た? のキャラクタ れ 7 い た。 クー 1 は 枚 ル 思 0) なキ い 画 思 用 ヤラクター。 い 紙 0) 0) 中 行 動 に をとって たくさ 女の子。 h

くらい?」

シ ョ だ えば \mathbb{H} 実際 かか 尻 中 視 聴 5 0 一枚三〇分として考えて ンさせるのならタイミングと中 村 に 案 0 覚 はこれをコ 教 時 だと五キャラで二五 レ ポ 室 間 でら 1 に \vdash 静 用 寂 ンピ 紙 が 訪 休 0) あ みを入 ユ n ちこち た。 1 $\overline{\bigcirc}$ タ グラフ 人作 息 れ 時 に を な 間 るのに二五時 書 す い 割も必要だ。 る音 か で三〇目 1 俺たちが れ ッ です 7 ク あ に る数字 以上 5 ここを使える 直 ŧ 間 響 か 枚にどれだけ て塗ら く気が か Z からはなんとか試算 る。 れ がキャラ なくち ?する。 とうて 0) は 朝 か 43 数分だ か か い な る ら下 間 5 か に な 判ら 合 校 か L 5 た う 時 1 b な 刻 ア で H ま さ い 間 な で つ が だけ き に X 例

わ せようとし 尻 は 応 中 7 村 あ の顔 が い た を伺うように 跡 が 見 7 取 聞 1 る。 1 た。

中 村 そ h なに このゲ 1 ムい ф ?

 σ h にこん な わ け な あ 簡 る 単 か -な 計 中 算 村 で既 は 田 に 尻 つま 0) ず 危 ĺ 惧 を てい 切 って る。 捨 俺 てた。 たちに はまだまだいろんな事 佈 は 作 り たくて仕 方 な が足りな

いんだよ」

再び沈黙が訪れた。 田尻は予想通りの答えに、 真島はレポー ト用紙に書きなぐられた数

式の重さに言葉を続けられなかった。

その時、大きな音を立てて視聴覚教室の引き戸が開い

た。

お話は聞かせてもらったわ」

入ってきたのは顧問の横井だった。 横井 は鼻息荒く 、真島の 隣まで来る。

「先生、聞いてたんなら入ってきてくださいよ」

あなたね、噂の新入会員は。スケブ見せてもらえる?」

田 . 尻の無粋な突っ込みはさくさく受け流して横井は真島からスケッチブックを受け取っ

数枚めくってその筆さばきを指先でなぞってから聞く。

「ジャンプ系なのね。ノーマル?」

た。

「のーまる?」

「……ああ、そうね。いいの。気にしないで」

横井は人差し指と親指であちこちを測りながらスケッチブックをさらにめくる。

「漫画や動画の経験は?」

ーない

真 (島は教師である横井に対してもいつもどおりの口調で答えた。 田尻は いつ横井が怒る

のかと気が気ではなかった。

「なんで分かるんですか!」 「書き込みすぎよ。もっと線を減らせば枚数行けるわ。 これだとひとり10分ってところね

田 . 尻は横井を見上げた。横井は立ったまま口の端で笑って答えなかった。

コンピュータグラフィックの経験は?」

取り込みとトレスからかし 5

田尻は慌てて視聴覚教室を見渡した。取り込みと言われても何をしてい いのか判らな

「どうするんですか?」

「あら、ここでできるわよ。ほら」

うために各パソコンにカメラとマイクが準備されている。 横井はディスプレイの上のカメラを指さした。 視聴覚教室はもともと遠隔授業などを行

「ここに映して」横井は相変わらず鮮やかな手つきでフォトレタッ スケッチブックを画面に映した。「ほら、出来上がり」

チソフトを立ちあげて

画面にはスケッチブックの一部が映っていた。

「ただ、このままじゃ使えないからこれを下絵にしてアタリをつけないとね

真島は横井のことをじっと見つめていた。今の田尻になら分かる。 あの表情は尊敬だ。

「さあ 熱い夏になるわよ!」

「なんでガクガクする?」

長合わせな いで書いてるでしょ。 何に書いてるの?」

用紙.

もっ を薄 0) が (J 1) わよ。 100 円シ \exists ッツ で 番 安 N 紙買 つ てきたほ う が い い わ ね

動

紙があ ħ ばもっとい いんだけど」

効 果 音、 今回 はどうする?」

誰 が ? -\$

つ

ぱり

山

Ţ

たい

よね

· 僕 ? あと、 中 村と真島と横 井 先生で四 人か あ ひとり足りない なー」

「あら、楽しいわ ちょっと待て、 よ。 俺もな ちょっとやってみな 0) か ?

い ? _

「わたし主人公がい <u>`</u>

一えー!?」

 $\stackrel{\wedge}{\sim}$

来々拳!」

ディスプレ イの中 0) 丰 ヤラクター が叫 5, 丰 ヤラクター には 色が塗られ 7 V な V が なん

となく動きは分かる。 その手からすっかりおなじみ に たなっ た光のグラデー

ζ.

八月の

第

週までには三人の作品はある程度ゲー

1

の形

になってきてい

た。

田

尻

は

V

た

シ

Э

が

飛

h

す を黙々とこなしてい って 5 ル いった。 コ フ 線 書かなければならない量は膨大だということは判っ 図 [とアニメー た。 書き 慣れ シ 3 るにつれ ン表を書き続け、 て、 作業を始めた当時 中 村 は それ に たが、 合わせ 絵を直 真島 てプ が は \Box グ る気分は ーつーつ ラ \mathcal{L}

0)

L

た

中 村も田尻もよくわかっ たが、 とに かく「 時 間 が な [] という理 由 をつけて先へとすすめ

るよう頼んだ。

「なかなかいいじゃない」

ボスの声を担当することになったので、 中村自慢の人工知能で田尻が声を担当したキャ いつの間にか視聴覚教室に 来 てい た横井 結 果 が 的 画 ラクタ に 面 丰 をのぞき込んで言 ヤ 1 ラクター がボ コボ も女性にな コにされ 1った。 てい った。 結 局 た。 横 画 井 面 は では 最

「正直、出来あがるとは思わなかったわ」

「 え ? 」 じゃ、 なんで止めなかったんですか?」 田尻が画 面から目を話した。 最終ボ スは 田 尻 0) 丰 ヤ ラクター にとどめを指した。

一止めたらやめる?」

の意見を聞き入れたかどうかは怪 田尻は答えられなかった。 中村が試算 \ \ \ \ L た時点で大変なことは 判っ 7 V たはずだ。

横井

あとは色を塗れば大体グラフィック周りは完成かしらね」

ーそう」

すっかり横井になついていた。クラスは違ううえ、 真島はフォトレタッチソフトで修正していた線 画 横井 から目を離して横井 0 数学は受けてい を見 な V た。 ので今 真 島 口 は

一件まで存在を知らなかったらしい。

それより、 今日はなんでこんな時間に来たんですか?」 引き上げを

指

示

するにはちょっと早い。 村はパ ソコンのディスプレイの 隅にある時計を見た。 まだ午後三 時。

"そうそう。忘れるところだった。 明日からこの教室使えなくなるの」

尻は嫌な予感がした。

まさか、 また活動停止が

「そうじゃなくて」横井は苦笑した。「夏休み前からメインテナンス入ってたじゃ 格的に入れ替えるそうよ。お盆前に一気にやっちゃうって」 ない。

「では」中村はプログラムのソースをちらりと見た。「これは消され 「データはね」横井はあっさり肯定した。「ただ、入れ替えたあとも今まで通り使っていい てしまうの で す ?

期待してていいわよ」

横井はウインクした。三人は何を期待すればいいのか判らな

「ちょっと早いお盆休みだと思って、 ね

データは一旦一台のパソコンに集められて、田尻の持ってきた USB キーにすべて保

された。 すでに DVD-R のディスクには収まりきらない。

た。 前年をさらに超える猛暑が報道される八月は、学校から一歩出ると三人に襲い か か つ

三人は 駅前 方面に向けて狭い通学路を歩く。ガードレールのない道は交通量も少な お 盆 休 7 前 に 度ファミレスで食事をしてから別れようということに なっ 7

「なんか、 今年 0 夏休みは短い気がするよ

「そうだな」田尻の一言に中村は歩みを止めて考え込んだ。「もっと時間が取 色々出来たと、 今なら言えるな れ るんなら

真 島は 大きく頷 い た。 その 目 0) 端 に 何 か が 引っ か か っ た気がす る気がするが、 そ 0) 正 体

は 判 5 な か つ た。

尻 からだ。 0) 田 いたは 尻 締切りが決まってるんだからそれに合わせて作らない は 中 その言葉を最後まで言うことができなかった。 -村と田 ずのところ 尻 は もみ を通り過ぎて小型乗 合 いながらアスファル 用 車 一が生 ルトの地 垣 を突き破 中 面 を 村 とね。 転 が 5 が 田 7 る。 尻 頑 民家 のことを突き飛 張るの そしてその 0 庭 べと飛 直 後 J. ば 込ん L

田 た

え……?」

でい

、つた。

真

島

は

足

がすくんで動くこともできな

生 垣 \blacksquare 0) 尻 尻 奥 は が起き上 0) 呆 家 然とし か ら火の手が上がってい が つ なが たときに 7ら自 分を押し 目に 飛び込ん 倒 る。 L た中 小 できた光景 刻み 村を見下ろした。 に 爆 発のような音も聞こえ は はまさに 地 息は 獄だ つ てい た。 るが る。 突き 反 破 応 5 が れ 薄 た

故 0) 理 曲 は ょ < 判 5 な か つ た

事

村 膝 ŧ 0) B すぐ 方が けど 察 は よっ に 等 怨 意 0 恨 ぽど大変だと中 識 け 0) を が 件 入は 取 を探 ŋ 戻 数 ると三人に L 人でたが、 た。 . 村 意識 は 笑っ 伝 を失っ 幸い えたが、 た。 に たことより L 7 理 命 由 に に 至 関 ŧ るほど L ては アスファ 0) この際どうでも良 傷 を負 ルトで つ た 擦 ŧ 0 れ たズ は か なく、 つ ボ た 中 0)

5 な かった。 突 そして、 き飛ば さ その れ たときに 鞄 0) 中 どとこ に は か ケ に 行 月 っ あ た ŧ 田 り 尻 か 0) け 鞄 7 は 作 5 事 故 た全デ 0) 騒 動 1 0) タが入っていた。 中 6 結 局 見

事 故 0) あ とで 事 情 徴 収 をされ たり ĺ てい るうち に 視聴 覚 教 室 0) パ ソ コ ン は 入れ 替 えら れ

L ま 残ってい たデ ĺ タは すべ 7 破棄され てい た。

か、全く覚えて 尻 は呆然としなが () 5 お 盆 0) 間 両 親 0) 里 帰 りに 連 れ П 「 され てい た。 そ 0) 間 何 が あ つ

た

7

自分の夏は終 わ つ た のだと思った。

V

な

0)

· 切 れ お 盆 てい が開 な け、 か つ 活 た。 動 0 ため 誰 が 悪 に学校に出てこられるようになってからも、 かっ た わけでもな () 言うな れ ば ただ の天災 田 だ。 一
戻
は 喪失 避 け ょ 感 う が 拭

なかった。それ は判っていても、 自分の中 で納得できるものでは な ()

重くなる足を引きずって校門をくぐろうとしたとき、 田尻は、 自 分 が で呼び か け 5 れ 7 1 る

ことに気づかなかった。

田尻!」

ーえ? _

度目かの

呼びかけでやっと気づいたその先には中

村と真島が立っていた。

田

尻が

来る

のを待っていたらしい。

なんでいるの?」

一言ってるんだよ。作るんだろ?」

村はこともなげにそう答えた。 田尻 に はその V つも通 りの 表情 が 痛 か つ た。

「だって、データは全部飛んじゃったし」 別にそんなもの作り直 しせば V いだろ」

ひと月かかってやっとあそこまでたどり着いたんだよ」

田尻は思い出したくない記憶をたぐりながら反論した。 その 間 0) 真 島 0) 鬼気迫 つる作 業

ペースを見る限り同じことをやり直してどうにかなるとは思えない。

あと二週間でどうするってのさ」

どうにかするんだよ」中村は口の端を上げた。「とりあえず、 行こうぜ」

田 . 尻にはその表情ですらも懐かしかった。

通り新しくなっており、 横井もついて来た視聴覚教室には新品 ディスプレ の電化製品 緒に取り替えられてい の臭いが充満し てい た。 パ ソコンは

イも一

. る。

先生、 あれ、持ってきてくれました?」

秘蔵だったんだけど、他ならぬ中村君の 頼みじゃ断 れないじゃ な い

横井は職員室から持ってきた数枚重ね B4 サイズのガラスの填った板。 左右にボタンがついている。 の家 電 量 並販 店 の紙袋から巨大な機 械 を取 り出

「なんですか? それ」

「液タブよ」

「えきたぶ」

全く聞き覚えがない言葉。 漢字すらも見当がつかな

説明するよりも実物見た方が早いわね」

後ろのケーブルを引っ張り出 井はミニスカート のスーツのままパ しては機械 に ソ 接続 コ ン した。 0) 置 か れ た机 によじ 登 ってパ ソ コ ン 本 · 体 の

100

中

村は立っ

たまま横井の姿を見ていた田尻を席に座るよう促

ľ

た。

田

尻

は

使

わ

れ

7

N

だ機械の側が光ってい ばらくしてパソコンが立ち上が る。 よく見るとそれ つ た。 しか は見慣 Ļ デ れ 1 スプレ たロ グ 1 1 は 画 7 か 面 だった。 な \ \ \ \ そ 0) 代 わ

り

「テレビなんですか?」

「んー、半分当たり」

横井は手慣れた操作で数枚のディスクを入れ替えなが 5 設定 L 7 V) · つ た。 じ き見慣 れ た

フォトレタッチソフトの画面が手元で立ち上がる。

「見ててね」

横井は お ŧ ts 1ろ, に 袋 か たら太 目 ンを 取 り É して機 械 に 白 か つ 7 何 か を 書 1

先からインクが出ているかのようにさらさらと絵ができあがってい

く。

0

- 37

田尻には機 械 0) 凄さが __ 瞬 判 5 な か つ た。 紙 に 書 < 0) と何 が 違 う Ó か。

かし、 例 に によっ 7 切 ħ 長 の目 Iを し た細 い 丰 ヤ ラクタ ĺ · が 書 き上 がったとき、 その 正 体

と凄さに気づいた。

「これ! 紙と同じ!」

「紙と一緒にされちゃうと痛い わ ね 10 でも、 紙を目 指 して作ら れ たっ ての は 正 解 液 晶

タブレットよ。略して液タブ」

併は 出来上がりに 満足したの か一 息つくと筆を置 いて席を立った。 隣 のパ ソコン を立

「残り時間で何が出来るかというのを先生と相談したんだ」ち上げて例によって開発用のソフトをインストールし始める。

な 101

パ ソコンの前にある椅子に座 り、 中 村 ŧ 別 0 椅子 に 座 る。 真 島 は 視聴覚 教 室 0) 隅 に 何 か

を取りに行っているらしく辺りに は 見 あ たら な

学校も

談って、 どうやって?」

そもそもお盆

の間

は

閉

ぎまっ

7

い

る。

生

徒や

教

師

0)

名

簿

は

もう十

乍

以

Ŀ

ŧ

前

に

作

中 村は鞄から何かを取り出 した。 ガラス張りの文庫本サ イ ズ 0) 機 械

ことが出来なくなってい る。

中 村、 携帯 買ったんだ。 いいなー」

「もちろん、 真 つ暗だっ 先生の携帯番号なんか知らないから、ちょっとな」 た画 面が光る。 中村は 慎重な操作でいくつかの \Box ッツ クを解除

慣れないキー入力に戸惑いながら何とか目的

0)

画

面

を出す。

てブラウザを

「これは?」

立ち上げた。

「先生のサークル。 東京のコミケのカタログで見つけ た

たわよー。 いきなり見たことない人からメッセージ来るんだもん。 SPAM だと思って

ッソ クしちゃったわよ。 あまりにしつこい から」

飛び交う。よくわからないが、 ソコンにソフトをインストールしながら横井が苦笑した。 電話以外の方法で連絡を取ったらし 田 尻 い。 の知らな V 単 語 が 乱 れ

「先生のつてを頼って、いろんな人の話を 聞い た。 無理だという人もたくさん ζ) たが、 だ

たいは快く聞いてくれたよ」 . 村 は 笑っ 7 V た顔 を引き締 8 た。

(J

0

0)

間

に . か 来

てい

た真島

ŧ

椅子を引き出して二人

に

並.

んで

座ってい

る。

「問題は二点ある」

中村は指を一本上げた。

「ひとつ目は作業時間だ。 即売会まであと2 週間。 こ の 間 に今まで一ヶ月分やってきた作

業をやり直さなければならない」

順当に考えて〆切りまでの二倍以上の作業時間が無駄になっている。 中村はそこで息をついた。おもわず田尻も息を呑 む。

これを何とか

しな

くてはならない」

|僕は大丈夫。一度やった作業ならすぐに取り戻せる|

田尻は答えていた。すでに何度も経験がある。

⁻プログラムも大丈夫だ。今から作り直しても十分間に合う」

中村もうなずいた。

「だが、グラフィックに関しては同じ作業量では足りな

「がんばる」

真島にしては大きな声で答えた。しかし、中村は首を振る。

んばり続けるのは物理的に無理がある」 「がんばってどうにかなるのなら最初から解決している。 だい たい これから二週 間毎

日が

「大丈夫! がんばる!」

中村はその声を聞きながらも答えずに二本目の指を上げた。

「もうひとつは作業速度だ」

中村はまだ何かを言いたがってい る真島を横目で見ながら田 尻に 言った。

「真島が凄い勢いで書いているのは田尻も知っている通りだろう」

「うん。一枚一○分なんてもんじゃないよね、今」

「そうだ。今以上の速度で書くのは現実的ではない。がんばってどうにかなるものではな

い、というのはそこからも判る」

真島は口を結んだまま何も答えずにいた。

「なので、作業の工程自体を簡略化するしかない。今、一端紙に書いたものをマウスでト レスしているが、これを直接データとして作れるようになれば時間は半分以下ですむ」

「半分ってのは?」

慌てて田尻が聞いた。真島も目を瞬かせている。

「計った。真島の作業時間を」

いつの間に?」

「今までずっとプログラム作ってるだけだと思ってたのか?」

中村は口の端を上げた。

悔しかったからな。 単純計算で作れないなんてことが立証されちゃうのが。 どうすれば

出来るのかを模索したかった」

「大丈夫? 出来る?」

田尻は今度は真島に聞いた。真島は強くうなずいた。

ーやる」

「駅弁があったって、慣れた紙とは違うんだよ?」

「液タブ」

「いいぞ。真島になら負ける気しない」

横井の突っ込みは誰からも流された。

「大丈夫。紙でも、パソコンでも、絵を書くのは一

真島はうなずいた。

田尻は二人の顔を見た。弱気なことを考えていた自分が恥ずかし

「早速始めようよ。時間、無いんだよね」

中村は鞄からレポート用紙を取り出した。

「よし。どこからいく?」

まずね……」 すっかり無視されている横井がほほえみながらため息をついた。

☆

「グラフィック無くても格闘ゲームって成立するんだなー」

「そういうこと言われると哀しい」

「あ、うそ。全然ダメ。真島の絵がないとゲームにならない」

「……冗談」

「いい加減慣れろよ」

ζ٨.

「もうちょっと攻撃判定長い方がいいな」

が条件を呑む」 「ダメ、この人はこのポーズじゃないとかっこよくない。 だったらこれで対戦。 勝った方

「ちょっと! いいの? そんな決め方で」

「みるみ」

7

「うーん、少し足りない……」

もほぼ誤差無く出せるようになってきた。 ならない作業はおおむね判っているのでリストアップは楽だった。 即売会まであと一週間を切った。 毎日朝から夕方まで作業を続けている。 だが、そのペースを見ている限りでは微 それぞれに やらなけ にかかる 妙)時間 な線 れ

「プログラムは何とかなる。いざとなれば持ち帰っても出来る」

で足りない。

「ここまで来たら僕が出来るのは手伝いぐらいだよ」

「判ってる」

た。 三人は夕方の視聴覚教室で 残り作 業 の書 かれたレポー ト用紙を中心に車 座 に たなっ てい

「わたしがたりない」

「わたしがあと一人ぐらい欲しい」「いや、真島を責めてる訳じゃ……」

「そっちか」

真島の不思議発言にもだいぶ慣れてきた田尻がためいき混じりに突っ込んだ。 真島 は 真

顔で冗談を言う傾 かといって今更真島クラスの人をスカウトするわけにもいかないしなぁ」 白 が ?あるの でいちいちフ オ \Box 1 L ているときりが な

「時間さえあればなぁ……」

|休み中とはいえ校舎の中に機械警備が入るタイミングは変っていない。 夕方遅くなる

と帰らざるを得ない。

「鍵しまっちゃうわよー」

のでわざわざ職員室まで呼びに行くことも無くなってい 顔をつきあわせているところに横井がやってきた。 最近は帰 、 る。 る時間がほ ぼ 固定 L してい る

「はい、片付けます」

仕方なくパソコンをシャットダウンする。 お 盆 前 0) ___ 件 が あっ て以来各自 バ ッツ クア

を分散して持つようにしたのでシャットダウンするまでに時間がか

かる。

「もうちょっと長くいられませんかね」

めら、修罹揚つてるの?」田尻は一縷の望みを込めて横井を見た。

「あら、修羅場ってるの?」

相変わらず田尻には理解しづらい 言葉を使う。 修 羅場 が動 詞 化し 7 「修羅場る」。

考えても普段使う言葉ではない。

「かなりいい線まで来てるとは思うんですが」

「じゃ、朝練でもする?」

「あさ……れん?」

文化部系には聞き覚えのない言葉が出て驚く。

けられるけど、どうする?」 - 学校って、夕方閉まるのは早いくせに朝は結構早くに開いてるのよ。 朝六時 からなら開

三人は顔を見合わせた。 今は九時 集合だから順当に 考えても五〇パ 1 セント 増 Ū 0) 作 : 業

時間がとれる。

「いいけど、一つ気ーやります!」

「いいけど、一つ気をつけて欲しいの」

横井は顔を引き締めた。

ずっと働き続けちゃうと、

い

ず

h

嫌

気になっ

ちゃうの」

「この間の、ジャンル効果の話ですか?」

横井はため息をついた。「ううん、もっと簡単な話。疲れちゃうのよ」

続けるコツは死なないこと。 割と死んじゃうからね。 好きでやってると」

「さあ?」横井はは「死ぬんですか?」

ない」 「さあ?」横井ははぐらかした。「でも、せっかく好きでやってるもの から離 れるの、 嫌

横井は続けた。

5間を延ばすのはあと一週間だけ。終わったらいつも通りよ」

_٨.

てい ことがた 田 一日に一二時 るのだから、 尻は夕方家 び た び あ に 間 真島 5 帰ってきてから食事中に寝てしまっ 作業をする た。 の疲労を考えると何も出来な 直接 入れ のがここまできついとは三人とも思っていな 込 んだ作業を L 7 V い たり、 ない自 自分に腹が立 分がこ 入浴中に寝てしまったりする 一つた。 れだけ かった。 ダメージを受け

クラフ イ ック ĺ 順当に上がってい 、 る。 直 前 0) 効率 から見ると五 割 り 増 L 以 上 0) つ 1 ス

八島は だが、 毎 日 あと数日で予定していたところまでたどり着くかどうか 朝から夕方までひたすら絵を描 1 ては塗ってい る。 今となっ は かな 7 り は 賭 紙 だ に た。 書 い 7

取り込むよりもタブレット上で原画を描い て直接着色までやった方がよっぽど速

「あと二日。仕様を落とすべきかなぁ」

夕方の帰 り道、 昇降口で田 尻はぼそりとつぶ B ŗ) た。 中 村 は 何 ŧ 言わ な () 落とす だけ

なら作業は クラス が 別 簡単だ。 な ので靴 落としてもゲームには 箱 も別 の棚 に ある真 問 島 『題な は 先に いことも 外に出ていた。 判 つ てい る。 つぶやきが 聞 Z え

た

か

真島は言った。

どうかは判らない。

夏は続いていくのよ」

「どこに?」

まじめに答えては い け な い 0) か ŧ L れ な い · と 思 い つつ 田 尻は 突っ込まざるを得 な か 0

7

「あっちに」

真 島 は夕焼 け 0) 沈 む 西 の空を見 め た。 慌てて飛び 出 た 田 尻 中 村もそ 0 を見

当然何もない。

۲,

て入れたり、 即 売会当日朝まで CD-ROM を焼 イ ンナー - の印刷 が間 いてい に . 合 わず た ため に 開 ケー 催 中 スに に 会場 詰 8 近 る余裕も 所 0 コ ンビニでカラー なく現 地 で 紙 コ を 切

け

ていたり、

実はそのせいでこっそり有名になっていたりしたのは、

また別の話。

7 ナー た する羽 り、 11 た真 0) 当 目 コピー 1日会場. 島 に が なったり、 - すらも! 「もうゴ に 並. 間 h 1 で に あろう事か昼前に ルし 合わ いる ない 7 最 ŧ 中 V 最 に ポッ () 後 ょ の一つにおまけでつい ね プをその場で描いて彩色までしたレアものが 売り切れてしまって慌てて CD-ROM を焼きに とかつぶやきながら会場の椅子で豪快に寝こ たり、 終了ぎりぎりまで起き 1 帰

つ



あらすじ

幼なじみの来夢から、N市の名物作成を持ちかけられる隆也。彼女は地元のN市をこよなく愛しており、町興しをしたいと思っているのだ。N市が嫌いな隆也は、しかし彼女の嘆願に仕方なく協力することに。小さな神社を名物にしようとした二人だったが、友人のたっての願いでそれは諦めたのだった。

谷川来夢



地元をこよなく愛する 少女。隆也の幼なじみ。 元気はいいが、思慮は 浅い。 新井隆也

地元に嫌気がさしている少年。進学校に通っている。意外と流され やすい。 ようと、

常

 \exists

頃

勉

強

に

勤

L

h

で

15

る。

が、

基

本

的

に

勉

強

が

好

きで

たまら

な

と

· う

わ

3 話 禁 Ũ た 遊

第

シ ヤ] プペ ン シ ル を 机 0) F. に 置 い て、 シ ヤ ッソ に チ ノパ ンとカ ジ ユ ア ル な 姿 0) 新 井 隆 批

5 ئے ĺ F 0) 隣 に 置 1) てあ る 携 帯 に 手 を 伸 ば す。 X 1 ・ンウ イ ン F, ウ に 表 示 ż ħ 7 い る \exists

ち 11 は わ ゆ 八 る 月 夏 0) 休 _ 2 日 を示 O期 間 L だ。 てい る。 か i

に

は、

軽

<

0)

び

を

した。

彼に 理 由 は が 自主的 あ る。 に 夏 勉強をしなけ 休 2 0) 宿 題、 L ればならない理由があっ で は な \ 0 彼がこうや そ れ ŧ って朝 V ず れ た。 やら つぱ な け か 5 れ 机 ば な に 5 白 な か い が い そ OOに 前 に は

5

つ

7

る

こういう時 百 じ N 市 0 中 進学校じゃない公立はうらやましく感じるよな」 でも、 比 較的 ゆったりとし た校 風 O高校を思 い

少し

切

な

いそう

É

息

を

叶

テス 彼 は 1 自 分が 小 が 待 ż V 5 涌 頃 7 つ ている か V る。 5 田 舎で その 私 立 あ 0) た る め、 学校では、 Ν 市 隆 に 也 嫌 0) 気が 神 もうすぐ夏 経 さして は やや ささく お 期 り、 0) 特 れ V 別 つか 講 1 つ 習 と、 Z 7 0) V 地 た そ れ 元 を出 に 付 て上京 随 す る で 実 カ

そ で れ は に越し な () 普 たことは 通 0) 高 校生 な () ょ と り り 思 は つ てい 勉 強 することに抵 る 0) で あ る。 抗 は な い だろうが やらなくて V い な 5

易とし だから、 てい た。 せっ 夏期 かく 講 0) 長 習 期 が 終 休 わ 暇 つ 中 た に 5 Ł 勉強 気 分 をしなけ 転 換 に な れ るようなことが ば なら な そ h L た な 状 15 بح 況 思 に は つ てさえ 少 辟

そんな時だった。お隣の少女の谷川来夢が訪ねてきたのは。

1

る。

夏らしく、どこ

か遊び

に

行くとか

が わ スカートと二つに 彼女はチャ かったー イムを鳴らすこともな 階段を駆け上って彼の 重 ねたシ ヤツ のすそが、 ζ, 部 屋 玄関 0) 屝 5 0) を勢 わ F, ァ つ とひるがえる。 Į) を開 よく開けた。 け á 身 音 だ に け 0 け で 7 隆 批 る に

は

そ

n

IJ

一またかよ」

くん、名物を作るの手伝ってよ!」

来 あ ŋ 夢と向 隆 がたいとも思っ 一也はうんざりとつぶやいたが、 か (1 · 合う。 た。 仕方ない よな、 正 直 勉 と自分に言 強ば か り で い 頭 訳して、 が 煮えてい 勉強を中 た ので、 断 することにし、 彼女の 乱 入は

ようと ず 彼 れ 女 人 0 が集 7 言 い 5 る まるほどの大きな てい 0) だ。 、る名物 つ まり ٢ は、 は 町 町 Ν 興 に 市 ĺ した 0 であ 名物 いと考え、 る。 のことであ その客寄 る。 N市を愛して止 せの ための名物を色々と考え ま な V 来 は

に 名 物 か 考 案 隆 0) 也 相 談 は さほ に 乗 ど N る は 市 ず が が 好 な きでは い 0) な だが () とい 何 う だかんだとペ か、 大嫌 い 1 な方だ。 スに 乗 せら そ h な れ 彼が 7 毎 素 口 直

彼

女に

協

力

7

V

る

気

が

す

そ

の来夢は笑顔でこちらを見ると、

そして、 今回 は。 彼は 最 初 から、 その 相 談 に 乗ってもい V と思ってい た。 何 度 も言う

うだが、勉強に疲れているためである。

どんな名物を考えるつもりなんだ。 アイデアくらいあ る 0 か ?

「気分転換にはなりそうだからな」「あれ、今日は素直にお話聞いてくれるの?」

事 情を知らない 来夢は「?」と首を傾げてい たが、 4 が て隆 也 0) 質 問 を 思 1) 出 たか、

嬉しそうに両手を合わせると、

のね、 あの ね。 ニュースでやっていたんだけど、 今は怪談 ブー \mathcal{L} な h だ ょ

「まぁ、そりゃ夏だからな」

「で、 ターネットの中で話題になって、宣伝に成功し ホームページで地元のミステリースポットを紹介している たらしいんだよ」 町 が あ 5 て。 それが

イン

来夢は目を輝かせると、ぐっと拳を握った。

「それならN市だって、同じようなことをすれば有名になると思わ

な

(J

?

一かもな」

それをインタ 「だから、 **今** 口 ĺ 「のテー ネットで宣伝するんだよ! マは 『ミステリースポット』 そうしたら、 ! 怪 いっ 談 0) ぱ 話 1 題 人が観 に なる場 光に来てくれる 所を探して、

かもしれない!」

を考えているようだ。 彼 女の言葉に、 隆 也 来夢も成長しているらしい。 は 「る む」とうなず (V た。 前 口 前 々 口 より も具 体 的 に 名 物 0)

115

内

容

- そういうわけで、隆くん。 ミステリー スポ ット · を 見 つけ る 0 に 協力……」

「さてと、 勉 強に戻るか」

れえつ?」

に向き直った隆也を見て、 慌てたように 両手を振 つた。

「ちょ、ちょっと隆くん、どうして急にノリが悪くなるの?」 いやだって。 気分転換に話聞 いてただけだし。 大体、 協力してやるとは

言

ŧ

言

つ 7

な

「そ、そんなぁ、協力してよぉ いだろ」 ! 私、 どうやってミステリー スポ ッ \vdash ・を見 つけ たら

かわからないんだよ!」

「そんなもん、 俺だって知らないわい

「だから、二人で力を合わせようよ。きっといいアイデアが浮かぶからさぁ」

霊が出るというトンネル、 ミステリースポットとは、ようするに怪 夜中に死体が動 き回 談の舞台になる場所のことである。 るとい , う 噂 0 廃病院、 首のない バ イク 0 ラ

血

染

8

0)

幽

イダーが目撃されるという高 速 道 路 е t C

談に らミステリー 現実 だけなら 味 を帯びさせ、 ただだ ・スポ ッ 0) ۴ 眉 唾 0) その手 存在 な 都 で 市 あっ 0 伝 話 説となる現 た。 が大好きな人間 噂 0) 中 代 に 0) 登 怪 に 場 談 ″する、 、 に、 満足感を与え 信憑性 実 在 0) をもたらせるの る。 場所と ŧ こいうも つ と 野 次馬 が、 0) は ح 根 れ 性 怪

念な そ が 0) 7ら隆 ス ポ 也 'n に 1 にはその を N 市 手 0) 0 中 知 で 識 見 は 0 な け かった。 ようとい また、 うのが、 () くら考えたところで思い 0 まり 来 夢 0) 考 えら L い つくとは 0) だ が 思 残

旺

盛

な

人

間

になら、

わざわざそこに

足を運ぶだろう。

えない。来夢は頼る相手を間違えている。

「お前の友達とかにいないのか、そういうのに詳しい

「う、うーん」

に詳しい友達がいたかどうか、 話を取り出した。 ふと、その携帯からぶら下がっているストラップを見て、 来夢は首をひねりながら、 タッチパネルに指で触れ、 羽織っているフード 名前を検索しながら思い出そうとしているらし なぞるように動かす。 付 き 0 長袖 シャ 隆也は顔をしかめた。 ツのポケット どうやら、 その から携 手 帯 0) 話 電

なんだよ、来夢。それまだつけてるのか?」

-え ?」

言われて来夢は、 携 帯電話を持ち上げた。 V もの先に ついてい る小さな人形を目 Ć 確 認

し、にっこりと笑う。

「うん、小学校の頃からつけてるね」

「恥ずかしくないよ。 「それ、昔のアニメのキャラクターだろ。 るんだよ」 私のお気に入りだもん。この子だけずっと毎 外せよ、 恥ずかしくな い 0) Ħ か 綺麗 に手入れ

屈託のない彼女の笑顔と言葉に、隆也は少し顔をしかめた。

「そこまでするのは異常だな、オタクじゃあるまいし。どうしてそこまで入れ込んでい

んだよ」

やだなぁ、 しかしその言葉を聞いて、 もう忘れちゃっ たの?」 来夢 は目を細 める。 若干責め る眼差しで、 隆也を見ると、

「これくれる」「なにがだよ」

「これくれたの、隆くんだったじゃない」

「あ、そうだっけ?」

そういえば誕生日か何かの時に、 プレゼントで何をあげれば 1 いかわからなくて、

紛れに買ったような気がする。

と、そんな隆也に、来夢は少し口をとがらせてつぶやいた。

私はずっと覚えていたのに。だから今まで大事にしていたんだよ」

「へ? どうして」

「もう、

だが、その隆也の問いに来夢は答えることはなかった。

「あ、そうだ!」みうらちゃんならわかるかも!」画面を見て、大声を上げたからである。

「みうらちゃん?」

彼女の言葉に、つい先ほどの疑問も忘れて、

隆也は目を瞬かせた。

三十分後。みうらちゃんなる人物は、隆也の家にやってきた。

ども、初めましてぇ。日向みうらと申します」

である。栗色の髪をおさげにし、度のきつそうな眼鏡をかけている。

そう言って軽く会釈したのは、妙な笑みと、若干舌っ足らずな言葉遣いが特徴的な少女

「みうらちゃんとは、中学校からずっと同じクラスなんだよ」そんな彼女を、来夢が手で示しながら笑顔で補足した。

la d

たのである。 曖 ただ、 味な返事 目の ちなみに後で聞 を返した隆也だったが、 前の少女が、「にゅふ」 いた話だと、 と奇妙な含み笑い 別に来夢の言葉が理解できなかったわけでは 癖で特に意味はないらし を、 絶えずしてい () る 0 が 気 な か な

ともあれ、 初対面の人間にはきちんと挨拶するべきだろう。 隆 也も会釈 すると

「えっと、来夢の幼なじみの新井です。とりあえずよろしく」

オーケー、 オーケー。 隆くんのことはよく来夢ちゃんから聞いてるよ」

面白そうなこと考えているんだってね。ミステリースポットを、 れ馴れしく言ってうなずくと、ふと日向みうらは眼鏡の奥の目を細くし 町興しに使う?」

⁻あ、う、うん」

「それならまかせて。 その他諸 から。ミステリースポットだけじゃ 々の 超常現象を小さい頃から研究しつくしている私に隙は こ の 町 0 いく いや ない わ、 世界中のミステリー 超能力、宗教、 陰陽道からエクソシストまで。 スポ ットを知り尽くしている ないから」

の企画が終わったら、 なるべく会わないようにしよう。

あ

あ、

厄介なタイプの

人種だ、

と隆也

は

思っ

た

しはあし

得意そうに胸を張るみうらを見て、

一それでさ、 でから、不意ににんまり笑ってみせた。 夢が本題を切り出 みうらちゃん。この町の名物になりそうなミステリースポットってあ ず。 みうらは 口元に指を当てると、うーん、 とうなって宙をにらん

「色々あるよ。二十は数えられる」

げつ、そんなに?」

隆也は一つも知らない。 少しだけ、この オカルト少女のことを尊敬 してしまっ

そのみうらは来夢の方に振り返ると、真 面目な表情 で口を開い た。

まぁ、 でも。 信憑性が高い場所っていうと五つか六つかな。 来夢ちゃ h どうい · う場

所

がいいかリクエストある?」

来るような場所がいいかな」 「うんとね。インターネットで話題になるような場所、 それで人が興味をそそられて見

囲気のある場所といえば、一つだけ」 そして、親指を立てて自分に向けた。

野次馬は実際に中を見てみたいと思うから。 「それなら、オーソドックスに人が見られて、

それでいて、

わかりやすいほど心霊

現象の雰

なおかつ立ち入りが簡単な場所がい

「私が通ってた小学校」

-え ? _

旧校舎があるの。 木造 0) ボロ いやつ。 そこなら、 この条件にぴったし」

自 信満々なみうらの言葉に、 来夢と隆也は思わず顔を見合わせるのであった。

そ 八 こ の 日 八月十 0) 日 夜八時。 は、 5 ょ 隆也と来夢は うど隆 也 0) 通う学 共 ハにあ 校 る 0) 小学校の前 夏 期 講 習、 その に来てい 最 終 た。 日 7 あっ

さらに言えば、 そこにい る のは彼らだけではなく、 他にも 同 じ歳 0 男子数名、 女子数名

が立っていた。 彼らは隆也と来夢が呼んだ、 友人達である。

みんな揃ったか? とは言っても、 人数とか確認してない んだけど」

「うん、私が呼んだ人は全員来てるよ」

隆也の言葉に、隣の来夢がこくりとうなずいた。

「こっちもだ」

来夢の方は五人だ。

女子生徒

の数を数えただけだが、

間違

いないだろう。

隆也もうなずき返した。 自分が呼んだ男子生徒、 つまりクラスメートが 四 人来てい

と、そのうち一人がこちらへとしずしずと歩み寄 ってきた。

着込んでいて、 黒髪をおかっぱにした、やや古式ゆかし 外見はやや幼 い。 来夢とい V い雰囲気を持つ少女である。 勝負ができそうだ。

白のワ

ンピー

スを

彼女は丁寧に頭を下げると、

「こんばんは」

「あ、こんばんは」

「今日はよろしくお願いいたします、来夢さん、隆也さん」

「うん、よろしくね」

友達がい 来夢の微笑に、同じく微笑を浮かべて応えると、再びひっそりと離れてその ない のか な、 と思ってから、 失礼なことだと隆 也は自分を戒めた 場に佇んだ。

夢とは それに 仲 が L ても い 1 綺麗 ようだが。 な少女である。 自分の名前を知っているところを見ると、 どうやら来

と、その来夢がシャツの袖を引っ張ってきた。

「隆くん、そろそろ始めようか」

「そうだな」

に行動できない さらに言えば せる。 N市 うなずき、隆也は手を打った。 . О 四方はほ 中でも、 ・のだ。 若干町より外れた場所にあるこの学校は、 ぼ田畑で埋め尽くされている。夜ともなると灯りがなければ 柏手の音 が、 大型の懐中 -電灯を持つ少年少女を振 山のふもとに建っていて り返ら

なお、 近くに かろうじて文明 0 匂 () を漂 わせるものとして、 バブル経済 時 期 に 作ら れ た

ゴルフ場があるのだが、現在は使われていない。

とまれ、ランタンの形をした広範

囲型のライトを拾

1

上げながら、

隆也

は

こう言

「つた。

みんな、 待たせたな。そろそろ肝試しを始めるぞ」

その言葉に、一同は軽く息を飲み込んだ。

隆 |也と来夢が友 人を集めての肝 試 しを企 画 L た理 由 は、 至 って 簡 単 中だっ た。

確かにみうらちゃんに教えてもらっ みうらに教えてもらった小学校の 旧 た話なら、 位校舎。 これ 怖 の宣 1 伝 しスリルもあるし、 0 ため であ る。

きっ

と怪

談

とし

てインターネットで噂を広めることができるよね

顔で考え込むば すべての情報を伝え、友人が帰った後。 か りであ る。 来夢は嬉しそうに 隆也を見た。 が、 隆 也 は 渋

「しかし、そう簡単に広まるか? 怖 いことは怖 いけど、 それだけだと噂とし て広まるに

は、 若干パンチ力が小さい 気がするんだが」

「そうかなぁ」

「そうだろ。だってこんな田 舎の町 なんだぜ。 わざわざ来てもらうようにする に は、 そ れ

なりの工夫ってものが必要だろ」

「うん。つまり、その工夫を隆くんが思いついたんだね」

ていやがる。これじゃ、自分が進んで町興しを手伝っているみたいじゃないか。 にこにこしてこちらを見る来夢を、やりにくそうに隆也 は見

返した。くそ、見透

別に、 俺は協力するつもりは……」

「お願い、教えて」

計算しているんじゃない ならなかった。毎回思うのだが、彼女は自分の言動がどれほどこちらに影響を与えるの もごもご言う自分と、 両手を胸の前で組み合わせ哀願の表情で訴える来夢では、

かとさえ思う。

也は嘆息すると、

「肝試しをするんだよ」

肝試し?」

「そうだ。そして、 ンターネットに精通していて、そういうのを広めるのがうまそうな奴にな。クラスに一人 現実に幽 霊が出たという話を、ブロ グか何か に書き込んでもらう。イ

「うん。心当たりあるよ」

か二人くらい、その手の人間っているだろ」

「じゃぁ、そいつらを集めるんだ。そして実際に中 - に入って、怪奇現象に驚 V てもらおうぜ。

そうすれば、後は勝手に広めてくれるだろう」

「でも、本当に幽霊が出なかったら?」

もっともな来夢の疑問に、隆也はこう答えた。

一出すんだよ

そういうわけで、二人は参 、ざ肝試 しと宣言した途端 に、 加者を集め、 ざわざわ、と小さなざわめきが立つ。 肝試しを決行することに したのであ 彼 5 0 る。 顏 に 好

奇

隆也は、こほん、と咳払いをすると、

てから出てくる。

ただそれだけ」

肝試しと言っても、やることは簡単だ。 この旧校舎の中に全員で入って、ぐるっと回

何 怖すぎると思ったのだろう。 か出てきそうなオーラを発してい 幾分か、安堵の息が流れた。主に女子生徒 木造の る。 校舎は、 の方から。 それほどまでに雰囲気たっぷりで、 一人、ないし二人組 の肝 試 い かにも では

れた時、 いと思っ 逆に、 女に は ていたのである。 あわよくば他校の 男子生徒からはがっかりしたようなうめき声 飢 えてい 、 る。 何しろ、 女子生徒と二人きりのシチュエ 彼らは私立の進学校の生徒、 が、 1 ちらほら、と出た。 ショ つまり男子校の生徒 ンを味わえる か 隆 也 ŧ に なの れ 誘 な わ

あ、新 0) 井。 友達 夏 のうち、 休みに思い 二人が 出 作 彼 り 0) ĺ 側 たいなら、みんなで海とか行った方がよくなかったか」 に寄 り、 そっと耳 打ちしてきた。

そうそう、 せっか くお前 0) 彼女が友達連れてきてくれたんだからさ。 もっとこう、 あ り

がたみのある遊びがいいぜ」

未練たっぷりの言葉に 隆也は嘆息すると、 とりあえずこっそり来夢を指さし

あれは俺の彼女でも何でもない。もう何度も言っただろ」

またまた、ご謙遜を」

「まず最初に言っておく。

「先生、どうやったら彼女出来るんですか まったく取り合わず、にやにやする友達を、 ! グーで殴りたくなる衝動 ボク にも教えてください に <u>!</u> 駆られ る。

半分以上揶揄だろうが。

「それから、大勢でやる肝試しも悪くないぞ。 もう一度嘆息してから、仕方なく隆也は本題 そもそも、最初から二人組を作ったところで に入ることにした。

話が合ってつき合ったりできるかもしれないな。 まぁ、 合コンみたいなものだ」

大勢で行動して、

何かと盛り上がって話しているうち

おお、なるほど」

そんなにうち解けられないだろう。

「合コンか、それはいいな」

田舎の男子学生に「合コン」という言葉は、 てきめ んであった。 二人はすっ か b 納 得

て、引き下がる。

娘が 若干表情をこわば れやれ、 と肩をすくめて らせな がら、 いると、 旧校 今度 舎 0) は先ほどの少女、 方を見ていた。 二人に挨拶してきた純 和 風 0)

「雰囲気あるでしょ?」

来夢 が得意そうに笑った。 隆也も、 みうらに教わった怪談を思い出し、 少し背筋 を凍 5

せる。

「じゃぁ、そろそろ中に入るけど。その前に、 そして声のトーンをできるだけ落とすと、 雰囲気たっぷりに目の前の全員に、 この校舎について説明しておくぞ」 その話を

あれは、第二次世界大戦中……」

聞かせてみせるのであった。

有していないので、 木造の校舎に入るには、 普 通なら隆也達は中に入れないことになる。 玄関前の 鍵を開けなければならなかった。 もちろんその鍵を所

だが、 みうらがなぜか この鍵の合い 鍵を「偶然持っていた」ので、 それはパスできた。

ちなみに彼女がこの肝試しに参加していない理由だが、

恐山へ行かないといけないんよ。

旧校舎はさんざ調

~

たから、

その

「その日は夏恒例で、

鍵もあげるわ」 とのことであった。 釈然としないというか、 いい 0) かなという気持ちで、 隆也 は 鍵 を受

け取った。 入っても、 玄関を開けるとすぐに、かび臭い空気が隆也達の鼻をくすぐる。 暗闇 はなお も続 いていて、 電灯が照らす場所だけが、舞 い散る埃を映している。 すぐに、 慣れた。 中

「け、結構、来るね」

だの木造 せない圧迫感がの 女子の一人が、 建築物と侮っていたのだろうが、いざ中を歩いてみると、材質や しかかってくるのが、彼女のみならず全員にわか 震える声でつぶやいた。「来る」とはもちろん恐怖 つ た。 心のことで 構 造では言 ある。 た

一暗くて、よく見えないしな。あ、そこ気をつけて」

も、もう少し灯り集めようぜ。できるだけくっついて動かないと」

彼女達と親しくなりたいと、何かと注意をうながしてみたり、 男子の声も緊張感に満ちていたが、それは八割女の子が近くにいるからだ。 距離を近づけようとしたり、 あ わよくば

涙ぐましい努力をしている。

う一人は、 そんな中、 ぴたりと寄り添うようにして動く二人の少女がいた。一人は来夢、

「……大丈夫?」

にして、来夢か 来夢が困惑したように尋ねた。彼女の腕を、 2ら絶対 に 離 れ まい لح 強張 つ た表情 あの和 で物語っていた。 風の少女が掴んでいる。 口をへの

「大丈夫です」

中でもっとも怖がっているのは 彼女が、ぽつり、と漏らした。し 2 0 かし表情 少女であるらしかった。 は固 い 泣きそうに ŧ 見える。 どうやら一 寸

「来夢さんは、私が守りますから」

「あ、うん……?」

からであろう。 首を傾げつつ、うなずく来夢。 それにもう一つ、 どちらかというとこれでは、 彼女が戸惑ってい る 0) には理由 守っているの が あっ た。 は 来夢 0)

方だ

どうしよう、 隆くん。 動きづらいんだけど」

ひそひそと隆也に話 しかける。 隆 也は一つうなずくと、 前 を 向 い たまま ح れ Ł /[\ 吉 で 囁

あ 例のポ るかもしれ イントは んが、 まだだ。 まぁ 大丈夫だろ」 もう少し 待 つ てみ ろ。 無 理 な 5 最 悪、 俺 が 8 る 少 無 玾 が

に けば、 怖 そして二人に すぎても あれ だけ 0 しか 緊張し をしゃ 意 ~" 味 ていた る気力もなくなってきたよう が通 じない会話を終え、 同も [数を 減ら L 隆也 7 V) だ。] と 来 る。 楽は 状 況 に 再 慣 び れた 黙 然って歩 わ け では しい た。 なく 気 が 逆 0

えていることもあるだろう。 それだけ 0 空気がここに は あ る。 隆也は 思っ た。 自 一分が 話 L た 怪 談 が、 同 に 影 を

校が い う。 怪 あ 談 5 0) そこで た場 内容 避 所 は次のようなも 難 その O訓 練 すぐ裏手に をし のだっ 7 い あ る 時に、 た。 る小さ 第二次 な山 悲劇が起きた。 世界 0) 麓 大 に 戦中 は、 に、 洞 窟 Z のような防 0) 小 学校 空 0) 壕 前 身 が あ 6 つ あ たと る学

くに 子 き 洞 供 埋 窟 か がて、 達 な 移 X に さ は 状 生. り れ 中 徒 前 態とな で 数 戦 か た 後 窒息 名 5 そ に っ が 数 えっ · 小 学 死 た。 V L 日 が、 Ū 7 に 校は新 た際、 ていた。 必死 渡 時 生徒 は過 り 大 に 土 が ぎ、 しく 土砂 雨 岩壁 砂 が 作ら 降 昭 崩 0 に 和 撤 れ つ れ、 残っ が 夜半にその校舎に 0) 7 廃 五 起 (J 作 その た爪 + きたのだ。 て、 業が進め 车 地 の跡 代。 校舎は 面がぬかるんでい が、 第 5 その子供達が亡くなった防 洞窟の入り口は封じられ、 <u>ニ</u>の れたが、 彼らの苦しみを如実に表してい 忍び込んだ。 悲 劇 が 結 起きたの 局間 た。 そして次の そのためだろうか に合うことはなく、 で あ 空壕 遺 体

 \forall

は

わ

か

5

な

一人、

 \exists

7

周

n

を

見

渡 怖

す 々

余

が 裕す 步

5 准

あ 8

るようだ。

少

女

んは

来 5

夢

か

5 1

目 た

を

離

L

7

い 歩

な

相 つ

当

彼

他

女

0)

子

بح

を

7

は

1

る

が、

だ

い

と慣

0)

か

そ

0)

調

は

1,

か

な つ 7 発 見 さ れ た 0) で あ る。 奇 妙 な 0) は 彼 0) 死 大 が 窒 息 死 で あることだ。 水 に 濡 n

形 Z 跡 れ を そ 面 ŧ $\dot{\boxminus}$ そ 1) ŧ と 思 近 < つ た に 当 溺 時 れ る \mathcal{O} よう 牛 徒 な が 場 \Rightarrow 所 度 ŧ は な 数 か つ 人 で た 校 0) 舎 に に 忍び だ。 込 h だ。 ح n ŧ 夜 0)

であ れ か 5 る。 旧 彼ら 校 舎 は は 封 43 鎖 は さ り 翌. れ 7 朝 に 新 死 体 L のい に 校舎 な つ 7 が 建 見 そ 5 5 か れ つ た。 た 0) だと 死 因 (J · う。 死 体 \mathcal{O} 有 り 様 ŧ

同

だ

Z

た

実と が 声 導 を 話 昔 聞 か に れ ょ 0) 1) 防 たら れ その 空 ば 壕 噂 0) () 建 が 事 築 まことし そ 故 Т. 0) 事 か 言 5, 中 葉 に B 旧 が 夜 か 校 前 間 に 舎 日 その 警 に 0) 悲 備 は 小学 酸 劇 を 素 と L 校 を 関 7 求 に 係 15 流 8 あ る れ 7 る 人 さまよ 始 間 0) 8 かどう が た。 う 何 字 か 度 供 は か 不 0) 明 霊 酸 だ。 が 素 い ただ、 と叫 ると 5 う ح 供 0) 事 0)

と偽 V (それに という 物ら É しく、 てもこの 0 だ が 白 い 怪談、 ŧ B が、 妙 にディ とか、 ティ 男の 1 子 ル 0 が 幽 ぼ 霊 かし が てあ とか る あ 0) つ が た IJ 方 アル が な Z h つ 5 だ ょ ŧ な。 4

いう言葉が聞 大体、 隆 栅 が Z 胸 んな場所に 中 こえてき でつぶやくと、 気 た。 軽に 入 5 る神 と隣 経がどう か 5 正 か 確 L に 7 は 1) 隣 ま に す。 N る 危 来 険 夢 で \mathcal{O} す。 側 面 ŧ か う少 5 3 つぶ 危 機 つ 感

を持っ たらどうな h で す か。 本 当 に もう.....」

7 V あ 7 0 少 女だっ 怒っ 7 V た。 ると 来 夢 V う を離 Ĺ り、 す ま B V ٤ は り怖 ひしつ、と が っ 7 腕 い る を よう 掴 h に で 見 11 え る。 た そ O顔 は 激

然としな

(J

気持

ちでい

た。

女と 仲が い 1 のだろう。 自分 が 知ら な V か 5 中 学 以 降 0) 友人だろうか。

つもは 方、 自 来夢 分に は 頼ってばかり 「大丈夫だ によ 0) 彼 \neg 怖 女 が、 \langle な お () 姉 から」と苦 さんぶってい 三笑し る ながら少女に のを見て、 隆 語 也 り は か 何となく け てい

板でふさがれ そ Ū て 一 同 7 は いる 校舎 0) の中 が 外界 を進 との h で 接触を くく。 断ち、 相 変 わ らず、 罶 の深さに貢 周 井 0) 献 闇 l は てい 濃 い た。 窓 が す ~ て木 0)

いた。 L つ、 男子も何 みし つ。 木の 人 か、 板 及び が嫌 腰になってい 悪 感 心を催 す 音を立 る。 てる。 女の 子 ³が一人、「ひ い

と声

を上

なんか」

本当に出そう……だな。 あ は は

な気がし けただけであっ 強気の人間はそれをアピー て、 気が気でな た。 **今** 回 0 肝 ルする 試 l に ある仕 ため に 掛 П け を を施 開 い た L た隆 が、 也ですら、 かえって全員 本当 に 恐怖 に 何 か 心 起 を 植 え付

な 0 L である。 か Ų ح n だけ 0) 緊張感 が あ る なら 好 都 合 だ。 そろそろ 仕 掛 け を 作 動 さ せ る ポ イ

なが 問 今が 5 題 は。 チ 何 ちら ヤ か ン を スに 確 り、 認 違 す لح á 来 い 夢 あ か 0 る 0) ま ょ 方 うっに を 見 る 降 前 也 方 Ł は を 来 凝 例 夢 視 0) 少 をつつい L 女 7 は い る。 彼 女 た。 0 何 を 袖 見 か 5 7 い 腕 る を 放 0) か L は 7 わ 1 からない た。 歩 き

数 分 後

た。

お どうした?」

隆也が立ち止まって、言葉を発した。 先 に進 む)仲間 が ?振り 返る気配がしたが、 自分の 背

が邪魔で彼女の姿が見えな いはずだ。

「どうした、新井」

「来夢ちゃんがどうかしたの」

いや、足をひねったらし い。 ドジだな、 お 前、 気をつけろよ」

そう隆也が苦笑し、 それが一瞬緊張が解けた 一同に伝播した時である。

.....そ

かすかな声が聞 こえた。 皆の表情が強張 る。

- え …… _

「……そ……んそ」

かん、かん、と廊 白いもやが足下に 流 れ始 めた。ばたばたっ、 と何 かが羽ばたくような音がする。

下に 音 「が響 い た。 のだ。 誰も動 1) てい な V は ず Ó 廊下に 今度は

り上がってきたのだ。 過度の スト i スが動きを制 止 L 目をそらすこともできない。

向こうに何 やがて聞 こえてきた言葉が か が見 元えた。 ぼ んや 同 りとし に は はっきりとわかった。 た、 白 い 影。 それは 現れては消え、 消 えて

こう繰 り返し ていたのだ。 は

現

廊

下の

そう誰も動

いていな

いい

動

がけない

先ほど解

けた緊張感が、

恐怖となってせ

……さんそ」

なわち―― 酸素」。

それを理解した瞬 間 誰 か が悲鳴を上げた。

「うわあああっ?」

「あああ あっ!」」

その場にいる全員が、 見栄も外聞もなく走り出した。 転びそうになりながら、 気に 出

口目指して走る。

それを見送り、最初に悲鳴を上げてみせた人物、 隆 也 は 満 足そうにうなずい た。

「ま、 こんなものだろう。 いいぞ、来夢」

にこにこと笑いながら、来夢

が

廊 下の 曲

がり

角

から出てきた。

先ほどの

怨

・髪の

声

ŧ

とで、アリバイを作ったのは言うまでもない。 やはドライアイスを水に溶かしたものだ。 「これで、怪談にちょっとは信憑性が出るだろうし、 い布をばさばさと出したり引っ込めたりし 付け てみせたのも、 加えて、 トリックとバレてもネタとしてブロ 隆也 もちろん)が架空の彼女に 没彼女の: 仕 話し 業で ある。 かけるこ

悪どいことをした気がするが、こいつも太い奴だなと隆也は苦笑する。 「そうだね」 前と同じ説明をすると、来夢は 「わーい、 楽しみ」と手 を叩 いて喜んだ。 ま あ 自分も 子 供 友 0) 達 戯 に

グには書くだろう。こんな肝試しをしたってな。

後はネットで広まるのを待つだけだ」

「さて、それ 気をつけた方がいいですよ」 じゃ 俺達もすぐに 帰ろうぜ。 そうでないと怪しまれ……」

レベルだし問題ない

間 い に きなり声 か自分達 をかけられたので、 の背後に立っていた。 隆也は 隆也は気まずさから、 「うわっ?」と驚い 愛想笑 た。 見 () れ を浮 ば、 かべると、 あ 0 少女が

「あ、やべ。今の聞かれた? 悪いけど、このことは内密に」

「幽霊のでっち上げですか? それはどうでもいいです」

少女はつぶやき、すっ、と前を指さした。 隆也も来夢もその先を目で追 い そして絶

旬

そこには小さな子供が立ってい た。 青白い 顔をして、半ズボンを着けてい 、 る。 男の子だ。

「本物が、出ましたから」

それを指さしながら、

淡々と少女は言

つ

た。

| え……?」

顔を見合わせる隆也と来夢の前で、少年はぽつりとうめいた。

『……酸素』

「はい?」

也が呆然と言葉を漏 らすと同 時 に、 彼は いきなりこちらに向かって飛びかか ってき

た。

「うわああああああっ!」

乱に、泣きそうになりながら、 あ Щ れはダメだあれはダメだあれはダメだあれはダメだぁっ!」 75 ながら、 隆 也は 走り出 L 何度も呪文のようにわめき声を上げる。 7 い た。 来夢と、 少女の手を引くことを忘れな 心不

「息を、 「ど、どうしたの、 吸 われそうになった!」 隆くん !

- え?_

いうことだ。 ているわけで 付き、その唇 首を傾げ る来夢 は を吸おうとし な に \ \ \ は 問 題 先 は た ほ どの Oその を。 光 後隆 景 別 が に 也 男 見 えて 0) 百 肺 士 から、 0) V な キスだから、ここまで拒 1 ようだった。 猛烈な勢いで空気が 少 年 が 吸 否 隆 (V 反 也 応 出 0 さ を 顔 れ 起 に たと こし 張 り

たっ 無我夢中で振り払 た つし か な い。 そこから逃避 何とか逃げ ることには成功したが、この現象から得られる結 したくて、彼は意味もなく「ダメだ」と叫 んでい

少年が追ってくる。 それは予想内 であっ たが、 予想外のことも起きていた。 8

が

7て後

るを振り返ってさらに悲鳴を上げ

た。

数が増 元えてい るのだ。 数人ほど。

部 ſЩ だ。 分は 全員 () 影 が や、 着物 0) ように Ш. に 草 0) 涙だ。 - 履と、 なってい やや古い格好をし てよく見えな V てい が、 た。 頬 に 戦 は 時 赤 中 い の衣装である。 Ł のがべったりとついている。 その目に あ たる

結論を今度は正 その、 血管さえ凍りそうな光景 直 に叫 んでいた。 に 隆 也 は 自分を騙 l きることができず、 先ほど出 L

た

あいつら、 本物だ! 本物

えええええつ!」 さすがの来夢も、 れ に は顔 色 をなくしたようだった。

0)

幽

霊

だ!」

Z

引っ

張られてい

た手を外すと、

134

自力で走り始める。

の子達が幽霊って、どういうこと、どういうことなの、隆くんっ?」

いつらに殺されたんだよ! 「どういうもこういうも、 怪談は本当だったんだ! 体中から酸素を奪われてなっ!」 夜に学校に忍び込んだ生徒 達 は、

あ

·そんなっ!」

来夢も頭のどこかで、 怪 談 は 所 が、 詮創作物と割 り切ってい たのであろう。 衝 撃を受けて、

それでは追いつかれてしまう。

隆也は無理矢理彼女

の手を取ると、 再度引っ張った。

その場にへたり込みそうになる。

「とにかく脱出するぞ。 校舎から出れば何とかなるはずだ」

本当に?」

「……たぶん」 あうううう

しかし他に手段がな 1 のも確か なので、二人は大急ぎで玄関まで走り抜けた。 そし て扉

を開こうとする……が、 開かない。

「あ、あれ、どうしてだっ?」

あの子達が、逃がさないようにしているんですよ」

ゃがみ込んだ。 うつろに目を開かせたまま、 呆然とつぶやく。

どこか冷静な声が流れた。今まで無口でいた少女だった。ふと、

来夢が脱力したように

にしようとしたから、 「どうしよう、罰が当たったんだ。 罰が……」 こんな、苦しい思いをしている子達を名物作

りの

ネ

タ

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ! 何とかここから脱出 しないと、 全員 が死 ぬ

₹ !

その言葉に、来夢は我に返ったようだった。

ただし、隆也が意図したものとは違う意味で。

「そ、そうだよ。主犯の私はともかく、隆くんとこの子を巻き込むわけにはいかない 二人とも、何とか逃げて。あの子達は私が何とかするから」

「何とかって……どうするつもりだよ?」

「わかんないよぉ。でも、このままだと、 全員捕まっちゃうもの。 V いから隆くん、この

逃げろ!」

子を連れて逃げて!」

「バカ言うな! それなら、肝試しを計画したのは俺だ! 俺が囮になる。 お前達は早く

現れ、 人は顔を正面に向ける。 二人が言い合っている間にも、なにやら冷たい空気が流れ込んできた。 子供達がゆっくりとこちらに向かってくる。 白い、透き通った手が見えた。 やがて全身が、ゆらぐようにして はつ、として二

『酸素……』

『空気ちょうだい』

『苦しいよう』

『助けて』

少女の方を見た。

後ろがふさがれ 7 V る以上、 退避は不可能だ。 L か 隆也と来夢はうなずき合うと、

136

「早く隠れて!」

「こいつらは俺達が何とかする。だから!」

しかし、少女は軽く首を振った。逆に一歩前に出ると、「こい」には何美力何と力であった。

ため息まじりにつぶやく。

隆也さん、来夢さんを連れて早く逃げてください」

「多分、その扉はあ いや待て、どうするつもりだ?をれに逃げろって、 の子達が獲物を逃がさないように、そうしているんだと思い どこに!」 ます。

誰

かが犠牲になれば、扉も開くでしょう」

- 来夢の叫び吉こ、少女は長り亙って敞笑を写ったら、あなたは逃げて!」

「いいえ、私が来夢さんを守ります。それが私の役目ですから。 来夢の叫び声に、少女は振り返って微笑を浮かべた。 ただ、

もうこのように、徒に死者を冒涜しないと」

そして彼女は、

突然走り出

した。

小学生の群れの中

へと突入していく。

隆也と来夢が止

約束してください。

める暇もなかった。 少女は 幽 霊 に包まれ、も みくちゃ にされた。

その時、隆也の耳にはこんな声が届いた。

『これ、変……』

『酸素ない、空気ない……』

(え?)

『空気、空気どこ……酸素』

彼らが消えた後、少女の横たわっている床には何そして。子供達の亡霊は、すうっと闇に溶けた。

ŧ

なかっ

た。

「どう、いう……」

来夢が呆然とつぶやくと同時に、 後ろの扉が開いた。 驚き振り返ると、 そこには肝試し

を共にした仲間がいる。

やっぱりここにいた。 お い 新井。 大丈夫か?」

来夢ちゃん、 隆也と来夢は夢から覚めな 平気? 何があったの」 い気分で、「何でもない」 と答えるのが精

杯であった。

きに来たのである。

週間後の夜。隆也の部屋には来夢と、そしてみうらがいた。二人に肝試しの結果を聞

ありながら。みうらはふんふんとうなずくと、目を輝 かせた。

二人は包み隠さず答えた。一週間も経つのに、

体験

が

衝撃的すぎて、どこか放心状態に

「それはすごい! 本物に会えたなんてうらやましい!

¯あのな、他人事だと思って無責任に喜ぶなよ。こっちは死にそうだったんだぞ。それ

超うらやまし

V

!

人実際に死んだし……?」

いや、 実が後から 隆 也 それどころでは の語尾が疑問系に跳ね上がったのは、 発覚 てい る。 ない。 彼女が何者であるのか、 あの少女の死体が見つかっていない 隆也も来夢も知らなかったという事 いからだ。

そう、 隆也はずっと少女のことを来夢の友人だと思っていたのだが、 来夢も彼女のこと

L

を隆 1 なの 也 だろうと思い 0) 友人だと思ってい こんでいた。 た のだ。 他 <u>__</u> 友 人に 聞 ても同 じ結果で、 全員 が 誰 か 0) 知 り合

あ 0 少女は一 体 何 者 だっ た のか。 その答 は **今** 0 所、 ない。 ただ、 解 答 に近づく ため

ントなら、見つかった気がするのだが。来夢がそのことを口 に L た。

「それでね、みうらちゃん。肝試しが終 いたストラップがこうなってたの わってから気づいたんだけど…… 私 0) 大

ないストラップだ。 シ ンプル で、 何 0) 飾 り É な い。

そして彼女は携帯電話を取

り出

して掲げてみ

せる。

示し

してみせ

た

のは、

特

に

何

0)

事

に

L

7

0)

Y

なくすな

h

7

な

いと

「ここに、 そう、 飾りがなくなっているのだ。 昔 のアニメのキャラクターの人形がついていたんだけど。

「ふむふむ。 思うの。 人形は確認したし」 あの なるほどね 晚、 携带 電話はずっと家に置いてあったし、 え 家を出る時 にストラッ プ 0

切って持論を話してみることにした。 関 の女の子、今思えばそのアニメのキャラクター 心を示してしげしげとストラップを眺めるみうらに、 にそっくりだっ 隆也は少し躊躇してから、 た気もするんだ。 その、

外見も性格も。 まさかとは思うんだが……」

人形ってね、 元は厄除 け の道具なんよ」

-その人に降りかかる厄を、 いきなりみうらが切り出したので、 身代わりになって受ける形代。 隆也と来夢は顔を見合わせた。 それが人形 の起 源 な の。

案外

そのストラップの人形に ŧ 同 じ効果があっ たの かも しれ んね。 来夢ちゃ ん、 とっても大事

にしてたって聞いたし」

ーうん

神妙な表情で来夢はうなずくと、息を一つ吐いた。

私のせいで、あの子をなくしちゃったのなら、私とんでもない馬鹿だよ。

もう絶

「まぁ、ブログのネタにはしないように、一応肝試しに参加した全員には言っておい らな。不必要に危険な情報を流して、誰かを危ない目に遭わせるわけにはいかんし」 対に、危険な場所を名物にしようと考えない。私を助けてくれたあ の子にも誓うよ たか

いる。 ようだった。それどころか、ずっと火が消えかかったろうそくのように、 「うん、そうだね。 これで名物のネタは一つ消えたわけだが、さしもの来夢もこりたのか、 名物のためであれば、 何をしてもいいってわけじゃないもんね 元気を無くして 文句は言わ ない

に 諭すこともできるだろう。 逆に言えば、今は絶好のチャンスである。 これを機会に、 来夢に名物作りを止めるよう

だが。 隆也は、ふと気づけば、それとは違う意図の言葉を口 にしてい

「だけどな、来夢。俺はどうも納得がいかないんだ」

-え?_

「あの晩の出来事さ。本当にあれは現実だったのか?」

その言葉に、来夢は怪訝そうな顔をすると、

私達襲われそうになったし、

あの子のことも誰も知らないって言ってる

だって隆くん。

ストラップだっ Ź

子は くなっただけかもしれない。 0) 後 俺達 幽 霊達は、 が忘れ てい 俺 達が知らないうちに恐怖 るだけで、 ストラップの人形は、 誰 か き音の知 り合 心から幻覚を見てい V の女の子で、 偶然なくなっただけかもし 単 た 純 に 0) か あ ŧ 0) L 日 か れ れ な 5 な 姿を 見 あ な 0)

納得い かないように 流 れ る、 来夢 0) 声 隆 也 は肩をすくめ

そんな……」

そして、 「我ながら無理のある解釈だとは思う。でも、 人になるっていうのは、 そっちの方が 現実的だろう。 現実と折り合いをつけるってことだからな」 少なくとも、 そういう可能性だってないことはないん 世 間 は 俺 た の意見を採用するはずだ。

より、どこかで元気にしているって考えた方が、 だから、いつまでも引きずるのはや めようぜ。 そ ずっと健全的だろ?」 れ に、 あ 0) 子 が犠 牲 に なっ たと考える

「うん、そうだね

、現実と折り合いをつける、 最後の言葉に、やっと来夢は笑顔を見せた。 か 隆也は安堵すると同時に、 苦笑も浮かべた。

ある を生きてい そ れは、 台詞だろうか。 田舎だというだけで地 るんじゃ まだ、 ない か。 名物でも作って町を興そうとしている来夢の方が、 元 が 嫌 で、 そこか 5 逃げだそうとす る 人 間 に 一言う資 前 向きに 格 0)

どうしたの、 あ いや。 何でもない」 隆くん」

今は、自分の生き方に不安を抱いていても仕方ない。 今度は自分が暗 い顔をしていたの か、 来夢に気遣われた隆也は、 やれるだけのことをやって、 片手を振ってみせた。 それか

ら大人になろう。

そんな決意をした矢先。 みうらが脳天気そうな声を上げ た。

「しかしあれだねぇ、幽霊に会えるなんて本当ラッキーだよ二人とも。 ねえねえ、 今度一

緒に 肝試 ! しにいかない? お前は、今までの話の流れをちゃんと読んでいるのかっ?」 いいスポットがあるんだけど」

「いいね、みうらちゃん。隆くんも入れて、ぜひ行こうよ」

こらぁああっ! 来夢、 お前今までの殊勝な態度はどこ行ったんだ!」

隆也が頭を抱えると、二人はどこか呆れたように彼の方を

から。ね、一緒に行こうよ」

「現実は現実、オカルトはオカルト。

見てきた。

まりにもあまりな発言に、

隆くん、 別に名物に指定するとかそういうんじゃないから。 単純に肝試ししたいだけだ

楽しむ気持ちがないと人生損だよ~」

みうらは人生を楽しみすぎだ。

あれだけ怖

い目に遭ったのに誰が行くか。

てか、

女の

えていることってわからねぇ。

どれからツッコミを入れて V い か迷い、 結局隆也は大きく息を吐くことを選ぶ。

「……好きにすればいいだろ」

「やったぁ」」

女の子二人の歓声が上がり、 隆也は首を振って嘆息する。 きっと、こうやって色々なこ

とを諦めるのも、現実に折り合いをつけるということなのだろう。 (しかし、名物探しはこれ以降絶対に手伝わないからな)

用していないのであった。 心中つぶやく隆也は、しかし次も来夢に協力させられるのだろうなと、

自分の決意を信

143

Nonstop



: あらすじ

不幸な事故で滑り止めだった優華女学院高等部に通うことになってしまった有香は、 クラスメイトのひかりに誘われて、弱小合唱部に入部する。自分と似た環境だった部長 の菜々子のように「自分の居場所を見つけるため」に。県の合唱祭で初ステージに立っ : たり、ひかりの家に遊びに行って友情を深めたり。有香の優華女学院での高校生活は、 うのところ、思ったよりも悪くない。



土田菜々子 (つちたななこ)

酒井有香

優華女学院合唱部部長。高: 高一。受験日当日の事故に 有香のクラスメイト。純粋 三。成績優秀で教師の信頼: より優華女学院に通うこと 培養のお嬢様。誰もが認め も厚い。さばさばしている。 に。平凡な家庭で育った平 る美少女。合唱部。 凡な女子高生。

だ枝ひかり (さかいゆか): (ともえだひかり)

今 日

は、

ートリ

1

ダーである菜々子がじゃ

んけ

んで負けたので、アルトは

廊

下

で

練

第 夏合 宿

井有 夏 香 休 み 0) 所 とい 属 高する優! えども 部 華女学院 活 は あ る。 髙 等部 授 合唱部 業が な でも同 い分、 じだ。 V つもより長 毎日昼 から三 く練習 時 できる。 間 ح れでも そ れ は 酒

会系の 部 活に比べ 、れば、 かなりゆ Ź い方だろう。

田先輩。 夏合宿 つて、 やっ ぱ り、 日中みっち り歌うんですか?」

ね 休 てみ 憩中。 た。 酒井有香は、 ふと疑問に思ったことを、 同じパートの先輩である土田 菜 々子 に

尋

を始 県の めたば 合唱祭も終わり、 かりで、 まだまだパ 合唱部 1 では、 練習に + 月の大会に 大きく時 間 を割 向 け た曲 い 7 V 0) 練 る状態だ。 習を始め 7 1 た 練 漝

大会が近い吹 奏楽部 0) 演奏が大きく聞こえてくる。

「そうね。 持 ってきた 半分は ル水筒 歌の練習。 か 5 水を飲 半 んでか - 分はちょっと違うかもね 5 菜 々子は答え

「どういうことですか?」

「合宿は、少年自然の家でやるでしょう? 毎年、 近くの 高 校の 合唱部が、 日 程 !を合. わ せ

て終結するのよ。それで、交流会を開くの」

「交流会?」

「そう。まあ、やっぱり合唱部だから、 校混合でチームを作って、簡単な発表会を開く感じかな」 合唱 メインなんだけどね。 大ざっぱに言うと、

「そんなこと、するんですか?」

「なんか、慣例みたいね。 てっきり、合唱部のメンバーでひたすら歌 最初は、外部講師を呼ぶ都合で日程 (1) 続けるものだと想像してい 合わせてい たんだけど、 た。

「そうなんですか?」

うせ同じことをしている部活が一同に会するならって、

始まったみたい

「酒井さんは不安?」

「少し……」

有香は正直に答えた。 交流はまだいい。 問題は 「簡単な発表会」だ。 初心者の有

足を引っ張ってしまわないだろうか。

その不安が濃く顔に出てしまったのだろう。菜々子が微笑む。

「そんなに深く考えなくても大丈夫よ。 あくまで発表会なんだから。 曲 だって、 簡単 -な 曲

しかやらないし。じゃ、そろそろ練習始めようか」

*

*

*

合 V

宿

自

体

は

楽

L

7

だ

っ

た。 Iは曖

中

学

0

ときは、

部活

に合宿というもの

が

な

か

た。

度

かりの

言葉に、

有香

昧な相づちをうつので精一杯だった。

は

な

か

つ

た

有 前 香 た 0) こと ち、 だっつ 優 華 た 院 合 唱 部 員 が、 合 宿 0) 場 所 で あ る少 年 Ė 然 0 家 に 着 N た 0) は お 尽

り 五. ú 年 Ν 初 ほ 市 8 0 てら 前 Ш に 間 L 建 に て替 あ る少 好 え 5 奇 年 れ ιĽν É た にきらきら輝く 然 建 O物 家 は、 は 使 有 用 香 瞳で周り 人数 ŧ 中 0) 学 割 0 を見回し に とき は、 宿 まだ綺 泊 7 訓 (J 練 る。 麗さを保ってい で 泊 ま つ たことが た。 あ V Ś か

なっ 六 人人と 7 い た。 人数 部 0) 屋 小 に な 向 い かう途 優 華 -女学 中 院 他 高 0) 等 部 部 屋 合唱 のプレー 部 は トも見てみ つの 部 たが 屋 に 押 L 確 込 か め に 宿 5 泊 れ る 者 は ح と

が 部 多 屋 に 1 荷 5 物 Ū を置 1) き、 中 央 高 昼 食を 校 合 取 唱 る。 部 0) 昼食のこ 名 前 ŧ 場で、 そこに 簡 単 は - な予定 あっ た。 0) 説 明 が あ

部

程

は

二泊三

日。

菜

々

子の

言って

いた交流会に

うい

ても

説

明

が

あ

る。

つ

た

夕 そし 方 一つ優秀賞 五. て三 時 半 \Box か 見を決め 目 5 0 午 広 温場で説 前中 5 に、発表会がある。 1/1 明と班分け をする。 発表会といえども、 その あと、 日 ĺ 各 高 校 日 0) 目 顧 問 0 が 夜 話 は 班 合 で 練

んだか面白そうだね。 混声 、合唱ってあまりしたことない Ľ

る

L

は あ 柔 道 り る 大会 < 0) 県 5 一に臨 大会で い だ。 む メ す 日 ンバ で 帰 に り が] 敗 はど 無理 退 L Z 7 な か H V J. 程 た りぴり 有 0) 香 ときがあ は、 サ ていて、 ポ って、 1 1 宿泊 とい そのときに、 う形 に 胸をときめ で 同 好 旅 館 L かせ た に 0) 泊 まっ 7 だ い け る れ たことが 場

で も、 今日 からの合宿 は 違う。 純 粋 に練 習を目的としてい る。 合唱部 0) メンツと一 日 丸

ごと一緒 に ·過 ご す \hat{O} だ。

同 じく合宿 初 体 験 0 \mathcal{O} かりも、 合宿は楽しみだったらし 数日前 から、 か なりテン 日

ンが上が つて V て、 菜々子が苦笑していたくらいだ。 半近くに

午 -後は 普通 に 練習 を重ね、 そして、いよいよ夕方の五 時

になる。

初

日

ということも

制 服 すでに 何となく六人でかたまりながら、 で練 習し 他の学校 ていたが、 の部 員 私服 たちも、 の学校もある。 集まり始めている。 広場へと向かった。 有香たちは、

中 央 高 校 0 制 服 も目 に 入る。

りに 中 誘 央高校は、 に等しいはずだった。 われたからであって、 有香が本来志望していた学校だ。尤も、 中 央高校に入学していたら、 有香が 合 唱 部 合 唱 に 入っ 部 に 7 入 5 たの た 確 率 は は ほ \mathcal{O} か ぼ

っぱい いますね」

有 香の呟きに、前 に V た菜々子が答えてくれる。

あとは、多くて二十人ってところ 「今回は、全部で六つの学校が 参加 ね しているみたいよ。 番 部 員 が 多 V 0) は 中 央 高 校 か

するのをや 番少ないのは? め た。 たぶ とい 優華 う質問 女学院だ。 は返ってくる答えが 容易 に 想像 できたので、 有香

は

 \Box

に

久しぶり。 土田さん」

るのかもしれない。 をうける。 女子生徒 知 5 な にが立っ い 久しぶり、 声 が ている。 して、 とい 思 身長は わ ず う響きが 有 香 わりと高 ŧ あ 声 ŧ (D) り親 め。 L た方 眼鏡を L げ を な 向 ŧ か い 0) けており、どこか神 てしまっ に 聞 こえな た。 かっ 中 央 た 高 か 経 校 5 質そうな 0) 制 そう感じ 服 を 印 着 象 た

「久しぶり。田中さん」

子の様子を気にもせずに笑った。 菜々子は少し面倒くさそうに挨 拶 を返 ず。 田中 さん、と呼 ば れ た女子生徒 そ h

- 今年もコンクールに出られないんですってね」

何、この人?)

有香は眉をひそめた。

合唱協 1 に 確 向 かに けてす 会 一のコン 優華女学院 でに クー 練習 ル 0 合 を に 開 出ら 唱 始 部 L れ 員 てい ない が コ ことは ンクー る。 事 ル 事実だ。 0) 規 定 でも、 0) 人数 <u>+</u> に 足 りず、 月 のアンサ 二年 ンブルコンテス 連 続、 夏 に あ る

それを中央高校の生徒に嘲笑されるいわれはない。

:

新入部員、 菜々子は まっすぐに 今年は少なくて、八人しかいなかったのよ。ま 「田中さん」 を 見 0 める。 田田 中さん」 あ、それでも、 は ひるまずに 土田さん 0)

ころよりは多い んだけれど。アンサンブルコンテストまで三年生が 引退できない な h 7 か

わいそうね_

全国大会に行け

たら、

あ

な

た

たちも

同

じようなも

0)

じ

B

な

1

?

確

か

全

玉

は

+

_ 151

月よ ね 今年は本気で全国目指しているんでしょう? それとも、 一人、 九月の地方大会

で引退するつもり?」

「そんなはずないでしょう!」

淡々とした菜々子に比べて、「田中さん」の 調が荒くなる。

「ええ。せいぜい頑張らせていただくわ」

「じゃあ、ほとんど同じじゃない。まあ、

全国大会出場目指してがんばって」

まるで捨て台詞のようにそう言い捨てると、「田中さん」はすたすたと去っていった。

(一体、何だったんだろう)

有香はぽかんと「田中さん」の後ろ姿を見つめる。 わざわざ菜々子に当てこすりを言い

に来たとしか思えない。

片や弱小合唱部。 でも、 中央高校と優華女学院では、 中央高校の「田中さん」の方がむしろ誇れる立場にあるはずだ。 合唱部の実績は全然違う。 片や県内では強豪 扱

中学の同級生なのよ。 恒例行事みたいなものだから、 あまり気にしないで」

菜々子が苦笑する。

ーはあ」

「そろそろ始まるみたいよ」

菜々子の言葉通り、 教師たちが広場へとやってくる。 まず、 学校ごとに整列するように

指示された。

し悲しい。

有香たちも 列に並ぶ。 列でも、 他の二列で並んでいる学校よりも列が短い のが、 少

152

通り、 交流会の 趣 旨について説 明 を受ける。

各部活 0) 部長がリーダーとなって、六つの班を作る。そして、 班ごとに分かれて曲

習する。 昼 食時に相澤先生から聞いた話をほとんど変わらない。

「これから、各学校ごとにくじをひいてください」

くじを持った顧問が、生徒たちを回る。くじは学校ごと、そして男女別に なってい た。

各班にバランスよく配分するためだろう。

優華女学院は、 人数が少ないので、二人ずつ三つの班に分かれることになってい

有香ちゃ んは何番?」

くじをひいたひかりが尋ねてくる。

になる。 ないらし あっという間に全員がくじをひきおえた優華女学院だが、 優華の次に部員が少ない高校でも、 十三人。つまり、 そのほかの学校はそうも 優華の倍以上い ること か

「あたしは……四 番。 S かりちゃ h は?

「ライバル?」

「私は二番。ライバルだね

だって、発表会は 位 決めるんでしょう? 負け ないからね」

ぐっと握った手を振り上げるひかりに、有香はこう答えることしかできない。

.....がんばる」

ここはきっと、 果たして三日で曲 努力 が仕上がるのが、少し不安なわけだけ ĩ かな い のだろう。 れど。

全員がくじを引き終わると、 班ごとに集まるように指示される。 各班ごとに 練 習 用 に 研

修室があてがわれていた。

有 「香は、 副 部長 の月岡若菜と一緒だった。一 つの班 は、 だいたい二十人弱、 男女比 は

対一くらいで構成されている。

四班は、中央高校合唱部の部長がリーダーとなる班らしい。

「私が、中央高校合唱部部長の田中里穂です」

前に出て挨拶をした人物に、有香は目を丸くした。

(……このひと、部長だったんだ)

説明が始まる前、菜々子に絡んできた女子生徒だった。

-パートはアルトです」

(しかも同じパートかあ)

菜々子に絡んでいた里穂を見ている有香は、何となく憂鬱な気分になる。

「じゃあ、簡単に自己紹介をしましょう」 順 「番に自己紹介が始まる。学校、学年、名前、そしてパートを言うくらい

だ。有香の番はすぐに回ってくる。

の簡単なも

0)

「優華女学院合唱部の酒井有香です。一年です。パートはアルトです」

じっと里穂に

それ に に見られ は気のせいなのかと思うくらい一瞬で、 た気がする。 優華 女学院という言葉に 里穂はすぐに次を促した。 V っ か か つ た のだろうか。

自己 紹 介はそんなに 時 間 が か からず に 終 わ つ

一穂は ぐるりと周 り を見 口 した。

私たちの歌う曲ですが、 『 グ リ ĺ ンスリー ・ブス』 です」

いう。 習する曲は、あらかじめ教師が用意 どれも伴奏のいらないアカペラの混 L た曲 声 四部合唱だ。 0 中から、 リー ダーがくじ引きで決めたと

はそのまま。メゾソプラノの人は、ソプラノとアルトの人数バランスを見て決めます。 楽譜は あとで配ります。 とりあえず、 パートはソプラノ、 アル ŀ テナ ĺ ベ] ス 0)

> 他 人

にもバランスによっては、 堂々と里穂は続ける。その姿はとても頼もしい、 違うパートをお 願 いするかもしれませ まさしく「部長」だ。 h

若菜のパートはメゾソプラ

有香はちらりと隣の若菜を見た。

月岡先輩もアルトに来ますように

有 香は祈る。 知っている人間が近くにいるのは 心強

「じゃあ、とりあえずパートごとにわかれて。メゾの人はメゾで集まって」

ただし、 里穂はいない。 里穂は-アルトのはず。

里穂の言葉通り、パートごとに何となく集まる。

十八人中、アルトもソプラノも四

人だっ

メゾソプラノは、 若菜ともう一人。

主穂は、 ルトとソプラノを交互に見る。

メゾソプラノの二人は、ソプラノをお願いできる?」

(……やっぱり)

155

ちらりとメゾソプラノを見ると、若菜と目があった。 若菜は 「頑張ってね」と言うよう

に微笑む。思わず有香は手を伸ばしかけた。

「じゃあ、 あとは時間までパートごとに音取りをして。リーダーはパート内で話し合って

ください。最後の五分で合わせましょう」

宣言したあと、 アルトの方へ里穂がやってきた。四人の顔を一人一人見たあと、 里穂は

微笑む。

「じゃあ、がんばりましょうね」

(大丈夫かなあ) 有香はおずおずとうなずく。

不安だ。 練習時間は、夕食が始まる七時まで。あと一時間もない。

(でも、やらなくちゃだよね)

有香はそう自分に言い聞かせる。

'どうしたの? 有香ちゃん」

ひかりが顔を覗き込んでくる。あまりにも不意打ちだったので、有香は本気で驚いた。

「うわっ」

思わず後ろにのぞける。椅子ごと後ろに倒れなかっただけマシだろう。

「どうしたの。有香ちゃん。ぼんやりしているみたいだけれど」 夕食は、 食堂で一斉に取ることになっている。そんな夕食の最中だった。

周りには、

央高校の生徒の姿も多く見られる。

「……べ、別に」

有香は慌てて取り繕ったが、ひかりには全然通じなかったらし

「でも、あまり食事も進んでいないみたいだし」

かりがほとんど綺麗に食べ終えているのに比べ、 確 かにひかりの言うとおりだ。今日のメニューは定 有香 のは半分以上残っている。 番 0 カレーライスと野菜サラダ。 V

になってしまった。今はピークが過ぎて、 昼食時 今更席を変えるの のように固まって食べたかったのだけ も面倒 でその ままに 八人掛けのテー なっている。 れど、 食堂が -ブルに 混 んでいて、部員 有 香たち以外いない は ば 5 け ば

5

夕食後の練習の予定は特にない。

「もしかして、さっきの練習で何か、あった?」 有香はぼんやりとカレーライスと見つめる。スプー ンが皿にぶつかり、 古 音を立てる。

ぎくり、とした。

「ど、どうして? ひかりちゃん」

ひかりの観察眼を侮ってはいけない。

「だって、元気がないのがそれからだから。 有香ちゃ んは四 班 だっ たっ け。 何、 歌うの?」

「グリーンスリーブス……」

有香は唇をかみしめた。

さっきの練習のことが甦ってくる。

パ 1 練 習 は よかった。 ただメロディラ インを追うことに必死だったけ れど、 なんとか

追 いつくことはできた。

待し 問 てい 題 は、 ないようだった。とにかく最後まで歌 全体 練習だった。 最 初からパートが綺麗 いきること。 に 重なることは、 それが目標だと言ってい リー ・ダー () () 里穂 も期 た。

指揮者を前 に立たせることはせず、 里穂 0) 合図で歌 強引に最後まで歌 い始める。 いきったのだ。

事実、 少しが たがたの箇 所は あったものの、

今まで、女声合唱 有香も、 他のパー ばっかりだった有香にとって、 トに釣られないように、必死になって歌った。 自分より低い音を歌うパ 1 <u>|</u>

り男声がいるのは、 すごく新鮮で、 そして難しかった。

歌 い終えたとき、 香 はほ っと胸をなで下ろしたくらい だ。

でも、 それで終わらなかった。 有 解散して自分の部 屋に戻ろうかというとき、

里穂

に 呼

び

つま

酒井さん」

止められたのだ。

^なんでしょうか」 あなた、合唱は初めてなのよね

里穂のどこか高圧的な態度に、 ? 有香は萎縮してしまう。

ري

答える声は、 消え入るように小さい。

あなたの声だけ浮いているの、分かってる?」

あまり足を引っ 張らないでちょうだい」

すみ ません」

有 :香としてはそう答えるのが精一 杯だった。

気分だった。もちろん、 確 かに 有香は初心者だ。 初心者を免罪符に甘えるつもりは でも、 初 心者 な りに 精 _ 杯 8 5 な 7 い。 V た 0) だ。 そ れ を否定さ れ

た

(でも、 そう言われても……)

どうしたら有香の声が浮かなくなるの か、 わ いからな \ 0 第 声 が浮く、 とい う 0 は

んな感じなのだろうか。でも、どうしたらい 里穂は 言うだけ言ったら満足したらしく、 いんですか、 人さっさと去っていく。 0) 声 は 出 てこなかった。 取り残され た 有

香

「あ。 典 私の班と一緒だね。 グリーンスリーブス_

里穂に言われたことが頭から離れな

\ 0

出

る

0) は

ため息だけだ。

「そうなの?」

は、

半分呆然としていた。

食事の最中も、

「うん。なんでも、 歌 は三 種 類 **ぶらし** (J ょ

⁻ひかりちゃんは木浦先輩と一緒だっけ」

「そうだよ。 木浦先輩、 メゾソプラノなんだけど、 ソプラノになったんだ」

同じパートに若菜がいたら、

きっと心強かっただろう。

有香ちゃんは、 月岡 先輩と一緒だよね?」

いな、

と有香は思った。

「そうか。 でも、先 輩は 残念だね

ソプラ

ノに

なったんだ」

「つっぱっ、丁ぃらっこ)」有香はまたため息をつく。

「やっぱり、何かあったの?」

ひかりは中学のときから合唱を経験している。有香は打ち明けるか迷った。

もしかしたら、

何 か、

いいアドバイスを

くれるかもしれない。

「あのね……」

ひかりは真面目な顔で聞いている。里穂の名前も出さない。

「そうかあ。声がうく、かあ」

「どうしたらいいかなあ」

「一緒に練習しようか。有香ちゃん」

へっ?」

るはずだよ」

「どうせ、夕食後って、特に予定ないでしょう?

練習し

たホールをたしか、

開放してい

有香は、しばし沈黙する。

「お風呂、夕食直後は混んでるっていうし」

「そうだね。練習しようか」

うん

ひかりは大きくうなずいた。

有香は里穂に言われたことを、なるべく印象がソフトになるように説明した。もちろん、

160

ちょっと待ってて。 V かりちゃ h_o ご飯、 食べち B . う

有 香 猛然とカレーライスを口 に運び 出 した。

部 屖 に 戻っ た 有 香 たち は、 丰 Ì ボー F を 借 りて ホ Ì ル بح 向 かう。 先 輩 た 5

は

特

に

何

ŧ

ホ 1 ル に は 有 香た ち 0) 他 に Ł 歌 0) 練 習 7 15 る 生 徒 た 5 が 15 る。 + 時 ま で は 開 放 L 7

る · う話 だっ た。

言

ゎ

ず

に

有

香

た

ちを見送ってく

ħ

た。

ス 0 グ 曲 ij だけ 1 ンスリー れど、 ・ブス。 歌 詞 は 歌 日 本 つ たこと 語 に 訳 さ は れた な V Ł Ł 0) 0) 0 に な X つ 7 \Box デ V る。 イ は 有 香 Ł 知 つ 7 い た。 1 ギ 1]

ア 知 つ ル 7 1 V 0) 場合、 るメロディ ソプ を ラ ノと ず さみ 違 っ てほとんど主 たくな る。 旋 律 が 巡っ てこ な () け れ ど 4 は り

自

分

Ó ア デ 0) 素 1 浜養 もあ を 歌 つ た る V かり が、 X \Box ーディ を弾 いてく れ る。 有 香 は 少 ĺ 前 に 覚 え た ば か

5 有 香は 歌う。 ح れ 5 は すべて、 合唱 部 に . 入 部 L 7 か 5 習ったことだった。

が

勢

を伸

ば

して、

足は

少

ĺ

開

\rac{1}{\cap 0}

声

が

頭

0)

てっぺ

h

か

5

突き抜い

ける様子をイメ

ĺ

ジ

1.

な

ŋ

X

口

最 初 は 戸 惑 つ た 窮 屈 なことも あ つ た け れ ど、 だ 15 5 慣 れ てきたよう に

てきたように思うからこそ、 里穂 0) 言 葉 は シ Э ッツ ク だっ た のだ。

が浮いてい 、 る □

全体で合わせたとき、 どうやら、ひかりい わく、 有香 有 は 香 特 0) 声 に 大き だ け なミスは 悪 目 1/ 5 Ū L てい な か るということら つ た は ず だ。 楽 譜 1 と必

死

に

に

5

めっこをして、音を外さないよう、 歌詞 を間 違えな いよう、 必死で努力した。

これ以上、どうすれ ば いいのだろう。

ひかりの指が最後 のメロ デ イを弾き終える。 鍵 盤 から指が離れ たのと同 時に、 有香も

を止めた。

少し音を外したけれど、 無事に歌 い 、きる。

「どう、かな?」

ひかりは首をかしげる。

「別に悪くないように思えるけどなあ。 合わせてみようか? 数カ所主旋律なくなるけど、

いいよね

のパートにも、 今日、渡され た楽譜は、基本的にソプラノが主旋律を歌うように ワンフレーズずつ主旋律が与えられ ている。 編曲されてい 、るが、

他

一そうする」

有香は正直羨ましい。

のは初めてだ。 有香とひかりは声を合わせる。考えてみれば、 ひかり 0) 声 は、とても澄んでいて、広がりがある。 ひかりとこうして二人きりで練習をする 高い声も無理なく出て

まだ一人でパートを歌うのは難し 二人の声が響く。有香 はひかりの 声 に つられないように、必死になって歌っ た。 B

はり、

やっぱり、 まだつられちゃう」

わったあと、 有香は照れくさくなって、 自分からミスを白 状する。

仕方ないよ。 まだ音取ったばかりだし。 ソプラノはメロディ多いけど、 アルトは少ない

L ね

ありがとう」

ひかりは微笑む。 V かりなりに慰めてくれ てい るの だろう。

そのあとも、 有香とひかりは、 ホー ル が 閉まる十 時 まで 練 習 1を続 けた。

を習う。 次 0) H 有 香 午 に 前 取 中 つ は ては いアンサ 初め ンブル て知ることも ハコンテ ス 1 い · つ に ぱ 向 け 1 で、 た練 目からば 習。 午 鱗 後 が は 落ちた。 外 部 講 師 優華 に 発 女学 声

をするのも 合宿 は始 面白かった。 8 ての経 験だけれど、楽しかった。 おかげで、 少し寝不足だけ たとえば夜、 ħ ど。 先輩たちも含め、 何 気 な N 話 持ち時

間 は

わ

ず

か

だっ

たけ

れど、

それでも

有

意義

な

時

間

が過ごせ

た

ように

思う。

0)

院 仕 方

0

そして、 夕方。 いよい ょ、 各校合同の 合唱練 習 0) 時 間 に なっ た

各班練習場所は昨日と同じ。

昨

日の練習の成果がでるとい

(J ね。

有香ちゃ

ん

「うん。がんばってくるよ」

笑顔でひかりとわかれる。

研修室には、 すでに若菜の 姿があっ た。 そして、 里 種のの 姿も。

昨日、

十分に

練習した。

きっと大丈夫だろう。

何となく里穂と目が あった気がして、 有 香 は体 をこ わ ば 5 せ る。

大丈夫。昨日、 がんばったんだし)

時 間になると、 里穂が今日の練習予定を話 ず。

明 最 日 初 の三十 0) 午 . 前 -分がパ 中 が 発 1 ŀ 表とな 練 習。 る。 そし 少し 7 は 時 練 習 間 時 か けて全 間 が あ るけ 体 練習。そ れ ど、 基 れ が今日 本 的 に は 0) 予 **今** Ė 定 5 中 L に 仕 上

げ たい。 それ が 里 穂 0 想 い のようだっ た。

1 1 練 習 は たけで、 特 に 何 ŧ なく終 わ 5 た。 発 声 練 習と 昨 日 0) お さら () さら りと通 L 7 注 意

点を確 里穂 は 認 何も言ってこない。 するだ あっという間 有 香 には ほ に 時 つ 間 Ū は 過ぎて た。 昨 日 L まう。 言わ れたところは、 きち んと直

せて

1 たのだろう。 萎 縮 L てい た有香だけれど、 そう思うことに する。 思い切って 声 を出 L

そし 7 全体 練 習。 昨 日 と同 じ ように、 里 穂 0 合 义 で 歌 V 始 \aleph ることに な る。

てみることに

た。

Ш に 慣 れ たこともあるのか、 ばらばらだった昨日よ りは、 各パートが重なってい るよう

きち 通り んと メリ 通せたところで、今度 11 リをつけて歌うことが目標 は強弱や だ。 をする。

表現の確

認

盛

り上がるとこ。

弱めるとこ。

り記 有香 な気がす

る。

V な 0) は、 暗譜 をする必要がない ことだろう。

何

度

か里

穂

は

曲

を止

め、

ここをこうしてほしいとい

う要望を口

に

. する。

譜

に

L

っ

か

入をして、

は

生

懸

命

に

歌

う。

そ のたび しに、 有 香はこうかな、 と自分なりに考え、 声 を出

時 間 半 . О 練 習 時 間 は、 あっという間 に 過ぎた。

B りまし

 σ

里

穂の

声

で解散となる。ふう、

と有

香

に

息を吐き出

、あ、 明 日 が んば しょう」

集中したせいか、少し疲れた。

「酒井さん」

おそるおそる顔を上げると、目の前には里穂が立っていた。

(大丈夫なはず)

「昨日の私の話、 曲を止めてしまうようなミスはしていない。大丈夫。 聞いてた? あなたの声、悪目立ちしているわよ」 昨日あれだけ練習 ī たんだから。

昨日、ひかりと一生懸命練習をした。(どうして……)

「……すみません」

それなのに。

ペこりと頭を下げる。それしかできなかった。

「最悪の場合、明日、あなたは声を出さないで」

わからない。わからない。

有香は黙ってうなずいた。

涙がこぼれそうだった。

一体、どうすればいいのだろう。

「酒井。大丈夫?」

同じ学校の先輩である若菜が憔悴している有香の元へやってくる。

有香はゆっくりと首を振った。

けで」

何でもないです。ちょっと間違えたところがあったので、 田中 先輩に教えてもらっただ

にっこりと笑ってみせる。

若菜に余計な心配をかけてはいけない。たかが交流会。 明日の 発表が終わってしまえば、

それで終わりだ。だから、明日までがまんすればいい。

「……部屋に戻ろうか」

若菜はそれ以上何も突っ込まなかった。それが有り難い。

(そんなにあたし、駄目だったの?)

たくても、 里穂は、 悪いところを指摘するだけで、どういうふうに直すのか言ってくれな 初心者の有香はどうすれば自分の声が悪目立ちしなくなるかなんてわからな 直し

部屋についても、有香はため息しか出てこなかった。

有香ちゃん。夕食に行こう?」

うん、と有香はうなずいた。――楽しいはずの合宿だった。すでに部屋に戻っていたひかりが、有香の元へ寄ってくる。

「ちょっと楽譜しまってくるから待ってて」

-わからない。どうすれば、 里穂は認めてくれるのだろう。

有香は自分の鞄の元へいき、楽譜をしまう。ふと見えるグリーンスリーブスの文字。

「酒井さん」

ふと顔を上げると、 目の前には土田菜々子が立っていた。 有香にとって、 同じパートの

頼もしい先輩。

「夕食後、一緒に練習しようか」

ー え ? 」

「どう? 酒井さん」

まさか菜々子がこんな風に 誘ってくるとは 思わ な か っ たので、 有 香 は 戸

有香に道を示してくれるかもしれな

「よろしくお願いします」

でも、菜々子なら。

有香は即答した。

な ホ ルル 有香 んだ には、 I は ホ か緊張する。 Ì 昨 ルへと向かった。菜々子は先に 日と同じように練習をし 何 の練習をするの か 7 わ い か る生徒 らなかっ 行 って たちがいた。 準 備をしていると言 たので、 目 有香の に つく楽譜 つて 知って い を いる た。 全 部 顔 Ł t

何人 かい る。

有 ーボ 香はきょろきょろと辺りを見 ド . の 前 に菜々子が立っていた。 口 す。

遅れてすみません」

いいよ。別に待っていないから」

菜々子が軽く口角をあけ る。 それより、 と菜々子は た。

酒井さん。 田中に何か言われた?」

-え? _

酒井さんに何か言っていたみ 「若菜が気にしていたから。 酒井さんの元気があまりないって。どうも、 た , _ じゃ な い ? な んて言われたの?」 田 中、

練

習

後

に

若菜は見ていたのだ。 有香は黙り込む。 菜々子はため息をつい た。

でね。 彼女、私の中学の同級生なんだけど、 しょっちゅう絡まれるのよ。 もし、 私が優華女学院に行ったのが気に入らない 理不尽なことを言 わ れた のだとし たら、 み 無 たい 視

ていいのよ。今回だって、妙にライバル意識もたれてるし」

ごっ、正斉でできょういっ耳ミようごうら。確かに、里穂が有香に注意するのは、それもあるかもしれない

「……声が浮くって言われたんです。 でも、 有香が下手なことも事実なのだろう。 直らないんだったら、 明日 Iは声 を出さないでって言

有香は、菜々子を見上げた。

われました」

「土田先輩。どうすれば V いんですか? 私には全然わからなくて。 昨日だ ってひ か つりちゃ

んと二人で練習したのに」

これ以上、どうすればいいのだろうか。 きちんと歌えているはずだ。 強弱だって、 皆目、 里穂が言ったように気をつけてい 見当がつかな

「声が、浮く、ねえ」

菜々子は息を吐き出した。

田中が言ったのはそれだけ? 具体的にアドバイスはなかったの?」

ありませんでした」

……田中も、何か言ってあげればいいのに

ぼ はそり、 と菜々子は呟くと、 有香の顔を見つめた。 有香は思わず姿勢を正

体、 菜々子に何を言われるのだろう。

酒 井さんは 周 りの声 を聞きながら歌っている?」

-え?_

有香は、 ゆっくりと目を見開 い た。

周 りの声を聞きながら ? あ まり考えたことは な か っ た。 とに か ζ, 自 一分が 間 違 えなな

け

れば いい。そう思ってい た。

りの 声を聞きながら、 ですか?」

ょ。 それ以外は自分が引く気持ちで歌うの」 も大切。 かに自分のパ 基本的に、 合唱は、 アル ートを それぞれのパートがあって成り立つもの。 トは縁 間違えないように歌うことも大切よ。 の下の力持ちだし ね。 主旋律のところは目立ってい ときには譲り合うことも必要 でも、 周 り 0) 声 を いけ 聞 \langle れど、 こと

「あと、パ は大切。 音程を合わせるっていう意味でも ートで合わせることも大 事 か な。 同 U パ 1 1 で ŧ 他 0) 人 間 0) 声 を 意 識 す る 0)

人の声を聞きながら歌う。

有香は、 今まで自分のパートを歌うことで精 杯だ つ た。

が合わさることは楽しかったけれど、それだけだった。

ありがとうございます。 れを意識することができたら、 あたし、 もう少 あまり考えていませんでした_ し変わ ってくるか ŧ

ね

有

香は勢いよく頭を下げた。

169

菜々子は、有香の話を聞くためにわざわざ練習に誘ってくれたのだろう。

「じゃあ、どうする。酒井さん。 スだっけ? それを歌う? 合わせてみるのもいいと思うけど」 何を歌おうか。 酒井さんの班の歌 ーグリーンスリー

有香は首を振った。

コンクールのための曲がいいです。そして、土田先輩の声と合わせてみたいです」

グリーンスリーブスは音自体は取れている。あとは、自分の心がけ。

今まで、菜々子に声を合わせて、と言われたことがなかったのは、

もしかしたら菜々子

が有香の声に合わせてくれていたからかもしれない。

「そうだね」

菜々子が笑う。鍵盤が音を奏で始めた。今、練習しているコンクールのための曲

「あ。有香ちゃん。菜々子さん。何してるんですか?」

二回通したところで、ひかりの声がした。ひかりはこちらへと駆け寄ってくる。

「どうしたの? ひかり」

有香ちゃんを探していたんです。 菜々子さんは?」

「ちょっとアルトの自主練 中

「ひかりちゃん。――どうしたの?」

「ううん。姿が見えなかったから、 よく見れば、 ひかりは楽譜らしきものを抱えていた。 昨日に引き続き自主練し てるのかなあって思って」

「いいんですか?」

ちょうどいい

んじゃない?

ひかりも一緒に練習する?」

L

説

明の 最 初 意識

あ

Ł

班ごとに

練習のために

研修室

へとちらば

る。

ひかりの 顔がぱっと輝く。

いよね。 酒井さん」

もちろん、菜々子に返す答えは決まって () る。

「 は い !」 きっとひかりは心配して有香を探しに来 てくれたのだろう。 それがとても嬉し

かった。

(合唱部に入ってよかった)

早く明日が来ないか 菜々子の弾くキーボードに合 な。 絶 対里穂に認めてもらう。 わせて、ひかりと有香 0) 有香はそう思う。 吉 が響く。

*

*

合宿も最終日になった。 午前中は交流会のメインとなる。

有香は気を奮い立たせた。 昨日、一 昨 日と夜に練習 したホ Ì ルに全員が集まる。 里穂の姿を見ると、

気が引け

るが、

(大丈夫)

昨日、菜々子と一緒

に練習

した。

途中、

様子を見

に

来たひ

かりも

加 わ 5 て、

簡単

に

合

せてみた。

の一時 たの んは、 間 は 菜々子 練習 0 そして、そのあと、休憩を挟んで発表会という予定らしい。 声 を聞 くということ。できた、 と思う。

171

軽

酒井。大丈夫? 昨日の菜々子との練習、有意義だった?」

研修室へと向かう途中、月岡若菜が有香に尋ねてくる。

「はい。ありがとうございます」

有香は笑顔でうなずいた。

「その分なら、大丈夫そうだね」

若菜も笑う。

「酒井さん。足をひっぱらないでね」

時間がないということで、今日はパート練習なしで全体練習をすることになった。

隣に立った里穂にちくりと嫌味を言われ る。

大丈夫。有香はそう信じて、 里穂の顔をまっすぐに見つめた。

「じゃあ、練習開始するわよ」

里穂は何も返さずに、辺りに向かって、

声を張り上げる。

いよいよだ)

えて、意外と難しかった。 里穂の合図で歌い始める。 昨日、やったことを有香は思い返す。人の声を聞きながら歌うのは、一 見簡単そうに思

香は ぬての発見がいくつかあった。 耳 を 澄ませ ながら歌 う。

の声を聞きながら。

周りはどんな声で歌っているか。

どうでしたか」

自 分 0) 吉 だけ 飛 び 出 L が 5 な 場 所 が あ ることが わ か る。

まで、 X \Box デ 1 通 り、 楽 譜 通 b に 歌うの が 精 一杯で、 周 り に気を配ることができて

なかったことに 気づく。

てい 優 たから、 華女学院 あまり意識 0 場合、 同 じアル したことがなか トは 2菜々子 っ だけ たの だろう。 だった。 菜々子 0) 方が自分 に 合わせてく

け れど、 今は違う。 頼 りの菜・ 々子 は 1

な

, ,

だから、 自分で周りに合わせるように L な

そういえば、 番曲が盛り上がるところ ここは 歌うのが気持ちよくて、 に さし か か る。 思わず

声

を出しすぎてしまってい

た。

楽 譜

歌

つ 7

上も、 け れど、 強くを示すフォ 同じアルト 0) ルテになってい 人たちの声 を 聞 る。 い てみると、 そこまで飛 び 抜 け て大きく

るわけではない。 、今まで、あたしは、 V きなり盛り上が 有 る 香も気をつけて、 独りよがりだったのかも) のではなく、 徐々に盛り上がるように強くなってい 声 の大きさを合わせてみ る。

に歌えば

いいと思っていた。

楽譜通りにただ単

れど、 それ だけ では 駄目 Iだっ た . の だ。

唱 は 人 が 好 き 勝 手 に 歌 え ば V V んじ B な

周 り É 合 Iわせ て 3 h なで音 楽を作っていくことが 大切 な のだ。

曲 が 終 わる。

有香は思いきって、 自分から里穂に話しかけた。

里穂は有香の顔を見て、それからそっけなく言った。

いんじゃない」

「ありがとうございます!」

有香は頭を下げる。二人の事情を知らな

() 周

囲が首をかしげ

ていたけれど、

有香は気に

ならなかった。

里穂に認められた。そりゃ、 まだまだ完全ではないだろう。 それでも。

歌える。歌っていい。

その事実が嬉しかった。

「本番も、その調子でいってちょうだい ね

*

「はい!」

* *

メニューは、スパゲッティーミートソースとたまごサラダ。 デザートはヨーグルトだった。 これが、 なんとか同じ一つテーブルを確保した合唱部員たちは、 最後の少年自然の家での食事だと思うと、 何となく淋しく感じられる。 みんなで食事を始める。 昼食の

惜しかったよねー」

は らあ、 とため息を若菜がつく。

有 結 7香も 局 一通 交流 会で優 発 表 を 勝 聞 L たチームは、 1 たけれど、優勝の予想は全くつかなかった。 優華 女学院のメンバ ー が V ない チームだった。 優勝したチームも

正直どこがよか つたの かと聞 かれると、 有香は何も言えない。

ŋ

⁻うちの班もうまかったと思うんだけどなあ」

勝賞品は、

お菓子セットだった。

絶対にほしい、

というわけではなかったけ

れど。

音外して

仕方ないよ。合唱は目に見える勝敗っていうものがない よほど悔しかったの か、若菜はぶつぶつと言ってい る。 からね。 あからさまに

いるとか、 もちろん、どの班もそんなことはなく、きちんと曲としてまとまっていた。 声がばらばらだとかじゃ ない限り」

.....あ。田中」

菜々子の声 に、 有 香 0 心臓 は 思わ ず 撥 ね る。

おそるおそる顔を上げると、 里穂 が足を止めていた。 たぶん、 食器を返す途中だったの

だろう。

「残念だったわ ね。 お互い

後輩の弱 点を指摘してくれ てありがとう。 感謝 L ているわ」

菜々子の言葉に、有香は思わず目を見開 いた。

じゃあ、またね。 にこりと微笑む菜々子に、 コンクール頑張って。応援しているわ」 里穂は 少しの 沈黙の のち、 そうね、 とだけ答えた。

「ええ。 じゃあ」

どこか気まずいのか、 里穂は逃げるようにそそくさと歩いていく。

「菜々子ナイス」

若菜がぐっと親指を立てる。

「私は本心を言っただけよ?」

菜々子が笑う。

(この部活に入ってよかった)

有香はそう思う。心配してくれる先輩や友だちがいる。

確かにきつかったけれど、里穂のおかげで、今まで自分が合唱で他の人を気にして歌っ それに、里穂にも感謝している。

ていなかったことがわかった。

「有香ちゃん。合宿楽しかったね」 それを本人に言うつもりはないけれど。

隣のひかりが笑いかけてくる。

有香は大きくうなずいた。

二泊三日の夏合宿が、もうすぐ終わろうとしている。



あらすじ

澤村葉月は中学校の卒業式の日に、片思いの相手・塚本日向に告白する。しかし彼は「一年以内に僕を見つけることができたら返事を教える」という謎の言葉を残して、その日を境に姿を消してしまったのだった。



第三話 オーバーライト

バイト?」

「そう、夏休み限定で。やってみる気ない?」 昼休みの教室。 机を挟んで向かい側に座る親友が、

何

0

脈絡もなく持ちかけてきた話

題

萌ゅをとともに昼食をとっていた。 私立中央高校一年四組。 澤村: 葉月は自分の席で、

澤^さわ 村^さら

組の教室からやってきた友人、常味

に、

首を傾げる。

「私の親戚が旅館経営してるんだけどさ。人手が足りなくて困ってるみたい」 萌々がやれば いいじゃん」

補習があってね……」

あんた、 ふっ、と黄昏たように窓の外を見る萌 期末でどれだけ悪い点数とったの……」

々。

赤点は確実なのだろう。 かないで」

179

「まったく……」

ため息をついてから、 ああそうだ、 と脱線しかけた話の流れを元に戻す。

「で? バイト?」

「あ、そうそう。どう? 興味ない?」

「んー……バイトねぇ……」 そうか、できるようになったんだ、と今更のように思う。

たことが許され、一気に大人になったような気分になる。

高校生になり、自分で働いて金を稼ぐことが可能になったのだ。中学生までは出来なかっ

·い、学校側はアルバイトを厳禁しているというようなこともな

「あたしは特に補習の予定とかもないから、やってもいいけど……」

「何それ、 嫌味?」

「事実です」

どう考えても萌々の自業自得だろう、と乗り出してきた彼女の額に軽くデコピンをかま

「いてっ」と小さな悲鳴をあげて萌々は椅子に座りなおした。

「でも、一回ぐらい面接とか行かなきゃならないんでしょ?」

んだけど……」

「んー、そうだね。

その

辺りの詳し

い 日

程とかは

直 に 電話

して聞

Į)

てもらえればと思う

「わかった。電話番号かその 旅 館 の名前教えて」

オッケー。 あ ŋ がと、 助 か る わ 1

にこにこと笑いながら、萌々はポケットから小さなメモ帳とペンを取り出した。そこに、

恐らく旅館の名前を思われる文字を記す。

「……『華潮』?」

そー。海の近くにあるの」

⁻ああ、あっち側なんだ」

てい 萌々の言う海は、 る。ここからだと、 この中央高校や葉月たちの 車 や自 転車 が なけ ħ ば 家があ 厳 l 1 距 る駅側とは、 離 だ。 市 0 反 対 方向 に 位

置

萌 々は旅館の名前 の下に電 話 番号 を綴ると、 そのメモを二つ折りにして、 ハイ、

「了解」

「ん。今日中にでも電話してみる」

に渡した。

「夜は忙しいだろうから、 夕方の…… 放課 後とかに連 絡すれば V い か Ł

一了解

た。

受け取ったメモを開いて、『華潮』の文字を眺める。 そして、今更ながらにふと心配になっ

「……なに眉間にシワ寄せてんの?」

葉月の表情の変化を目ざとく見つけた萌 々に、そう指摘され た。

「大丈夫でしょ、葉月なら。接客業とか得意そうだし」

いや……やっぱさ、バイトって初めてだから。

ちゃ

んとや

れるかなーって、ちょっと不安」

-.....うーん、人と話すのは好きだけどね」

メモを再び折りたたんで、シャツの胸ポケット

しまう。

好

と働くことは違う。

(まあ、実際に始めてみないことには、なんとも)

とりあえず放課後電話してみるか、と考えていると、 萌々が 何やら意味深な笑みを浮 か

べているのに気づいた。

「……何さ」

「いやー? もしかしたら、塚本くん探しに割ける時間が減っちゃうことを心配してんの

かなー? と思ったんだけど。違ったみたいだね」

という擬声語の似合う笑顔が憎たらし

()

葉月は、

自分の顔が引きつる

のが

わかった。

にやにや、

「その笑いやめて。なによ、何が言いたいわけ」

「べっつにー? ただ、私はこの前の一件以来、 葉月の愛の強さにえらく感動しているわ

けでして」

「あ……っ! 何言ってんの!」

らを見るいくつもの視線から逃れるように、 昼休みで騒がしいとはいえ、葉月のその声は教室内に大きく響い 葉 月は 椅 子に座りなおした。 た。驚 たようにこち

「……萌々、あんた以前とは随分態度が違うわね?」

「だから言ったじゃん。葉月の愛の強さに」

「それはもういいから」

た。 り 葉月が、 萌 「一年以内に僕を見つけて」という、 かし彼は、 帯 \(\alpha\) 0) 0) 言う 地主である塚本家の分家出 ずっと想いを寄せていた彼に告白し 塚 葉月の想いに答えを返すことなく、その日を境に忽然と姿を消してしまっ 本くん』 とは、 葉 自身で、 月たち 謎の言葉を残して。 0 年 中 たのは、 0 学 終 時 わ 代 り 0) 中学校の卒業式の日のことだった。 頃 同 級 から葉 生、 塚本日向 月の友人だった少年だ。 であ る。 ح 0) 辺

でも、 そ れ以来、 日向の行方はわからなくなってしまった。 卒業式から四 ケ 月 以 Ĺ が 経 つ た

てほ く諦 萌 l 々とは めろ」と何度も言 いという萌々な 彼の手がかりは依然としてつかめていない。 、彼を巡って一 り い聞かせた。 Ó 度、 思 喧 い が 嘩をしたことがある。 あ それに つ たか らだ。 は、 葉月に だ が、 早 日 -く 新 葉月 向 0) は L 行 まだ V 方を追う葉 恋を見 日 向

を 0

諦 7 に

 \aleph

きれな

け 月

幸

に

萌 せ

々

は なっ か

早

そうして二人の意見は対立 たが、 最終的には萌 々が 葉月 の考えを理解 l てくれ た。

た。

まあともかく、 杖をつい た萌々は、 は 葉 月に協 目を細めて微笑んだ。 力するっ て決め た わ け だ か

出 一来る限 補習 もしっ りのことはや かり受けなさい ってみ るよ

そ

れ

は

ま

あ

うん」

れ

た萌々

に、

胸

0)

奥

が

温

かく

なる。

曖 昧 に 答えて 再 Ü 窓 の外 を見や る 萌 Þ に 多少 0 不 安は募るが、「 協 力す á と 言 つ てく

人で日 向 0) 行 方を追っ 7 い た時 よりも、 ず つ と心強い と思えた。

り、 年 Ó 式とホームル 終業式の日は そ 普通に学 で の 日 女性 0) 0) 吉 放 校があ が課: が応対してくれて、 ームを終えて自転車 自転車 後、 る日 葉月は 干で登校 は行けそうに 萌 Ĺ 々に 帰りにそのまま華潮へと向かうことにした。 言 面接 十小屋に つ ないということで、 う の 日 た通 向 り華 取りを決め かうと、 潮 に 電 る。 話をかけてみた。 後ろからポン、 数日後の終業式 中央高校から華 と肩を叩 人の良さそうな中 0 潮まで距離 H に決まった。 か れ る。 があ 振

「宗輔。そっか、宗輔ってチャリ通だっけ」

り向くと、

背の

高

い少年が「よっ」と片手を上げた。

中 学時代からの友人である、 青田宗輔だ。 何 É ・ら学 生鞄、 لح は 違 ~う、 大きな鞄 を引 つ っさげ

「そうだけど、 今 から 練 習 試 合 あ つ から 近く . О 運 動 公園 行くんだよ

「あ、なるほどね」

てい

る。

大きな鞄は部活用か、と納得する。

高 校 野 輔 球 は 0) 野 夏 球 の全国・ 部 に 所 大会、 属 L 7 全国 い る。 高 等 中 学校野 央 高 校 球 0) 選手権大会も、 野 球 部 は は つ きり言 すでに地方大会で敗退してい つ てそこまで強 <

う。

る。

(それでも頑張って続けてるのは、 やっぱり好きだからだろうな あ

思わず宗輔を見てにこにこと笑顔になると、「なんだよ」と軽く引 か れ

「いや、宗輔はすごいなと思って」

「はあ? ……それよりも、お前徒歩通じゃなかったっけ」

自転車小屋に葉月がいることが珍しいからだろう。 あ、 今からバイトの面接あってさ。それで今日、 自転車で来たの」 宗輔 は首を傾げてい

「旅館だよ。夏休みの間だけだけど」「ヘー、バイト?」何するんだ?」

葉月が答えると、 何 故か宗輔は嬉しそうに ーそうか」 と笑い、 葉月の頭をくしゃくし

と撫でた。

「な、何?」

いやー、お前が元気そうにしてて良かった」

よいしょ、と宗輔は鞄を担ぎなおすと、

塚本のことも、そうやってゆっくり忘れてい

け

ばいいさ」

そう言ってくるりと葉月に背を向けた。

「じゃあなー。良い夏休みをー」

ひらひらと手を振り、 自分の自転 車 0) 元 へ行 ってしまう宗 輔 0) 背 中を見送る。

向のことや、 萌々との喧嘩など、 何 か と彼に心配をかけていたんだなぁと、 改め て思

185

(……ほんと、良いヤツだよね……)

Z れから練習試合に臨む彼に、 日頃のお礼替わりにこっそりと、心の中で応援を送った。

普段は通らない道と、 夏休みが始まるという解放感が、 葉月の気持ちを高揚させる。

「……お ~ …… 海 ~ ……

びらく自転車を走らせると、そのうち海が見えてくる。 その青々し い · 夏の 風 景に、 思

わず声が出ていた。

人手が欲しくなるだろう。 十潮は、 海水浴場から徒歩数分のところにあった。 なるほど、 確かに夏場は客足も増え、

「すみませーん……」

同じ声だ。

入り口のところから声をかけると、すぐに女性の声が返ってきた。電話で話した相手と

「あの、バイトの面接に伺ったんですけど……」

足音が近づいてきて、すぐに四十代ぐらい

の女性が姿を現

した。

「ああ、澤村さんね? 萌々ちゃんから聞いてるわ」

どうぞ、とスリッパを出してくれたので、礼を言って靴を脱いで上がる。

「すぐに戻ってくるから、ちょっと待っていてくれる?」

テーブルが置かれている。ここに座って待っていろということなのだろうが。 入ってすぐ右手がロビーになっているようだった。向 かい 合わせ のソファ 0) 間 に П

かし、 そこに は 先 落が いた。

葉月と 同 い年ぐらい の少女だ。 葉月を見て小さく会釈してきたので、 同じように

えっと……)

どこに座ればいいのか迷ってしまい、少女に声 をかけることにした。

もしかして、あなたもバイトの面接に?」

知り合いから、人手が足りないって聞い て

ということは、葉月とこの少女の

面になるよう考慮 して、 葉月 は 少女 0 隣 に 腰 掛けた。

面接を一緒に行うということだろう。

そう判

断

そこで葉月は 彼女が着てい 、る制 服 に 気づいた。

「優華の生徒?」

「そう。一年生」

「そっかあ、 じゃあ会ったことないね。 あたしは中高だから」

校とは、 優華』とは 距離的 私立優華女学院のことで、 には割と近い位置にあるが、 Çì わ 優華女学院の方は ゆ á お 嬢 様学校であ エスカレー る。 葉

月

ター 0)

式で中 通 う中

等 央 部 高

から高等部への持ち上がり組が多いため、 そう言わ れてみると、 確かに彼女からはどことなく上品 面 識のある生徒は少なかった。 な雰囲気が漂っ てお り、 まさに

麗 な目元を縁取るまつげは長く、妖しげな魅力が ある。

嬢様学校の生徒』といった感じだった。

ショートボブの黒髪はつやつやとしているし、

どうしても れ でも優華ってバイト大丈夫なの?」 「お嬢様学校」というと、 校則

が厳

1

1

イ

メー

ジ が

あ

るのだが。

許 可を取れば大丈夫よ

「へえ、そんなもの なのか 7あ。ねえ、 名前 説は? !

あ たしは澤村葉月っていうの。 よろしくね

「……葉月」

「うん。あたしも、 依織って呼んでいい?」

いいけど……」

曖昧に答えてから、依織はふいっと目を逸らしてしまった。 もしかしたら、 人見知りす

るタイプなのだろうか、 と思う。

「……まだ、 ぽつりと依織が呟いた言葉に、「あ、 面接通るって決まってない のに そっか」 と葉月は今更気がついた。

「あらあ、心配しなくても大丈夫よ」

一つの声が会話に加わった。振り返ると、 先ほどの女性がにこにこと笑顔を浮かべてこ

ちらに歩み寄ってくるところだった。 「一応、面接って形にさせてもらったけどね。ほんとはもう、二人とも採用することが決

「え、そうなんですか?」

まってるようなものなの」

女性はソファを回りこみ、葉月たちの正面に腰掛ける。 手には、 数枚の紙を持っていた。

そうなの。二人とも良い子そうだし、 言いながら、 安心したわ」

女性は手にしていた紙を葉月と依織の前にそれぞれ広げた。

規 約 とか書 () てあるから。 応 目を通し 7 お い 7 ね

あ

じ B あ早速だ たけど、 い つか 5 入れそう?」

「えっと、あたし はすぐにでも……」

私は……」

そ たなっ んな風にトントン拍子に話が進 た。 み、 葉月 は明 日から、 依織 は 明 後 日 か ?ら華 潮 で

ま だ日は高く、 とに

た。 肌を 焼 くような暑さの 中、 人は 堤 防 に 腰 掛 け、 海 を見 なが 5 話 7 1)

を待っていたのだった。

依

織

はここまで親

に車で送ってきてもらったらしく、

葉月もなんとなく

緒

に

そ

0) 迎

え

「朝七時からかー……やっぱり旅 館の 朝は 早 V) ね

「バイトなだけまだマシよ。

それ

に、

昼 の

間

は

自

由

にできるしね

葉月と依織 く時間帯は、 の都 朝から昼まで、 合 に 合わせて、 そして昼 午前 中 Oの長い休憩を挟んで夕方から夜までとなる。 2 À 宁 後 0) みということも可 能 5 L た

「まあ うんだけどね。 あたしは夏休みの間 依織は ? は特にすることもないから、 入れる時はいつでも入ろうと思

「私は……用事ってほどのことでもないけど……」

依織が少し目を伏せたのを見て、まずいことを聞いたかなと焦った。

¯身内にちょっと……体の、弱い子がいて。何かと手助けが必要だから」

「そうなんだ……」

した。

やっぱり、聞いてはいけないことだったのかもしれない。慌てて、 葉月は別の 話題を探

「えーっと……そうだ! 彼氏とかはいないの? デートしたりとか」

「いないわ」

きっぱりと答えてから、 依織は少し何かを考えるように目を細めた。

「……葉月は?」

_ え ?」

「いないの? 彼氏とか……好きな人とか」

依織の方から何かを聞いてくるのは、初めてだった。といっても、今日出会ったばかり

なのだけれど。

彼氏はいないけど……好きな人なら、いるよ。……しばらく、会ってないんだけどね」

「……そうなの」

「うん。どこにいるのかもわからないんだ」

もあり、 海水浴場となっているため、 夏 の照りつける太陽よりも、 日 向 は あ んまり海ではしゃぐようなイメー 浜辺にはそれなりに人がいた。 春の穏やかな陽気の方が似合ってい ジが な () な あ、 同い年ぐらい る。 となんとなく思う。 の男の子の姿

「……ず っと会ってなくて、 気持ちが薄れたりとかしないの?」

いん だし 別れ方が、 ちょっと印象的なものだったからかな。そういうの は、 あんまり な

理由も教えられず、 ただ「見つけて」とだけ告げて姿を消した日 向。 そう簡単

に

忘れ

「……そう」

ることができない。

依織が小さく頷いた時、背後に車の気配がした。

「あ、迎えが来たみたい」

「ええ。付き合ってくれてありがとう」 「おー、じゃあまた今度。バイトでね

なんとなく、 立ち上がり、 その運転手に視線を向ける。 制服についた砂を払うと、 依 織 は小さく手を振

派って車.

に向

か

7

15

つ

た。

(……あれ?)

気のせいかもしれない。

だが。

(……あの人、どこかで……?)

い 出せない。 車 を運転する女性の 顔は、 なぜか見覚えが

結 局 依 織 とその 女性 0) 乗 つ た 車 が 視 界 か ら消えるまで、 葉月は ずず 、つと記憶を辿 つって N たが、

あ つ

た。

それなのに、

どこで会ったの

か、

思

えは見つからなかった。

第に < 旅 色んなところに目が行き届くようになり、細かい気配りができると褒められ 館 一週間もすればすっかり職場に馴染んでい の従業員は葉月の母親と同じくらいの年齢 た。 の女性が多かったが、 仕事も最 初は 慣れずに 気さくな人が多 戸惑ったが、 た。 次

声をかけてくれた。女将さんとは、 ある日の朝、 客室の窓を磨いていた葉月に、一緒 葉月と依織の に掃除をし ていた従業 人のことだ。 員の女性 がそう

「女将さんが、窓がピカピカだって喜んでたよ」

割とみんな、サッと磨いて終わりにしちゃうからね。 面接 を行ったあ 葉月ちゃ h 0 が 毎 H 頑張っ てく れ

ホントですか? ありがとうございます」

るおかげで、前よりずっと綺麗だよ」

褒められると、 素直に嬉しかった。やる気もさらに湧いてくる。

食事や布団の用意をするときなどに、

交流 も楽しく、 萌々の言った通り向 いている仕事なのかもしれないと思った。

宿泊客の人たちと話をすることもある。

そういった

トイレの点検、終わりました」

葉月たちが掃除をしている部屋に、 依織がひょっこりと顔を出す。

「ありがとう、 依織ちゃん。じゃあ、 二階に残ってる洗い物、 片付けちゃってくれる?」

一わかりました」

依

織は仕

事

の飲み込

つみが

非常に早く、

与えられた仕

事を確

実にこなすタイプだった。

葉

言だけ答えると、 依織 は すぐに 指 示された仕事を片付け に 行 った。

月がまだ仕事を覚えきれていないときに ŧ 何かと助けてくれ

「二人が入ってくれて、大助かりだわ」

従業員の女性が、そう言って笑ってくれる。

「あたしも、この旅館でバイトできて良かったです」

「あらホント?」

「ええ」

夏休みは始まったばかり。 これからも色々と覚えなければならない、 と葉月は改めて気

を引き締めた。

あら、困ったわね」

アルバイトを始めて一ヶ月近く経ち、 八月も半ばに差しかかろうとしていた。 そん なあ

る日のことである。

仕事を終えて私服に着替え、

帰ろうとしていた葉月は偶然、

従業員の女性たちが話

7

いる声を耳にした。

「どうかしたんですか?」

なんとなく気になったので声をかけてみる。

「えっ、そうなんですか?」 「実はね、お客様の一人がちょっと出かけてくるって言ったまま戻ってきてないみたいで」

「チェックインは済ませてるし、 荷物も置いてあるんだけどね。 女将さんもすぐに戻って

くると思ったらしいんだけど」 若い女性だし心配ね、と眉根を寄せる従業員二人の会話を聞きながら、 葉月も帰 る前 に

少しその女性客を探してみようか、と考える。

と、その時。フロントの方から、 女将の声が聞こえてきた。

「あら、戻ってこられたのかしら」

少しだけ顔を覗かせ、フロントを確認した従業員の一人が、 ほっとしたような笑顔でこ

ちらを振り返る。

「良かった。 それを聞いて、葉月も安堵の息を吐いた。 何事もなさそうよ」

「それじゃあ、そろそろ失礼します」

「お疲れ様。明日もよろしくね」

その途中、 二人の従業員に頭を下げてから、従業員 廊下を横切る時に一人の若い女性の姿が目に入った。 専用の出入口 へと向かう。 先ほど話していた女性

客だろう。

翌朝

その横顔が、 ひどく疲れているように見えた。

あ くび を 噛 み 締 8 ながら、 葉 月 は 朝 0) 食 事 0 用意を整えてい た。 朝 食は、 個 室では

大広間 で一斉にとられることに なっている。

葉月は 依織と一緒 に、 長細 い机の上に一つ一つ食器を並べてい

「……眠そうね

んー……昨日、遅くまで宿題やってたから……」

実のところ、 葉月はつい数日前まで「夏休みの宿題」 う存在をすっ かり忘れ 7

た

で

「一つのことに のである。

いっぱいいっぱ 集 いで、いつも後半にまとめてやってたんだよね……」 中すると他が見 えなくなっちゃうタイプでさー..... 中 学 0) 時 ŧ 部 活

になっている。 高校に入り、部活はしなくなったけれど、その代わりにアルバイトでい 結局のところ、 何も成長していないということだ。 つ ぱ い N つ ぱ

依織はもう終わってそうだよね

「ええ。七月中に終わらせたわ」 涼しい顔で告げられた言葉が、

葉月の胸

にグサリと刺さる。

要領いいもんね、

依織は」

「そんなことないわよ。 私はむしろ、 葉月の方がそういうのさっさと終わらせてるタイプ

だと思ってたわ」

- 全然そんなことないんですよねー

「あれ、 喋りながら作業を続けていたが、 鮭 のお皿が一つ足りない」 ふとあることに気がついて手を止めた。

「え、本当?」

「うん。ちょっと調理場行ってくる」

配膳の続きを依織に任せて、葉月は一旦大広間を出

調理場へ向かう途中、 客室の一つが開き、 中から女性客が姿を現 した。

た。

あっ、おはようございます」

お辞儀をしてから、その女性客が昨夜見かけた人であることに気がついた。 長 い 髪をゆ

るく束ねた、二十代前半と見られるその女性もこちらに挨拶を返してくる。 まだ朝食の用意も終わっていない早朝なのに、 彼女はすでにきっちりと服を着替えてい

た。

「……どこかへ、出かけられるんですか?」 ふと気になって、尋ねてみる。すると女性は頷いて、

はい。朝食までには戻りますので」

と微笑んだ。優しげな笑みだが、どことなく焦燥感のようなものが見られ

急いでいるのだろうか。引き止めてはいけないの かもしれな そう思 い ながらも、

た。

うしてもその女性のことが気にかかってしまった。

「あの……昨夜も、

はい……すみません、ちょっと探し物をしていて……」

遅くまで出かけてらっしゃいましたよね?」

探し物、 ですか?」

こくり、 と女性は一つ頷く。 それから、 困っ たように眉尻を下げた。

浜辺で……落としてしまったみたいなんです」

あ あ、 と葉月は納得した。 だから、 人の少ない早朝にもう一度探しに行こうと思っ た

だろう。

(見つかるといいな……) 女性は「すぐ戻りますので」と頭を下げると、廊下の向こうへと歩いて行ってしまっ た

それが何なのかはわからない 夜遅くまで、そしてこんな朝早くから探すということは、かなり大事なものなのだろう。 けれど、朝食の席 に姿を現した彼女がまだ沈んでいた様子だったので、 が、 葉月は彼女の探し物が見つかることを、 心から その願いは叶わ 願 った。

なかったのだと知

った。

「そう。浜辺で落としたって言ってたんだけど……」 朝食が終わり、 依織と二人で食器を片付けている時

に、

あ

の女性のことを話し

てみ

「そうなんだよね……」

「浜辺……それは、見つかりにくいわね」

なれ 何を落としたのかは 見つけるのは わからないが、この時 容易ではないだろう。 期大勢の 人が訪れる浜辺でそれを落としたと

「……手伝おうかな」

昼 0 間は時 間ができる。 女性は観光客だろうから、 い つまでこの近辺に滞 在す るつ

ŧ

なのかはわからないけれど。

「……私も」

葉月が一人で考え込んでいると、依織がぽつりと呟いた。

「え?」

「私も……手伝うわ」

なんとなく、彼女の方からそんな風に言ってくれるとは思っていなかったので、 葉月は

「ありがとう、依織……っ!」目を丸くする。けれど、とても嬉しかった。

「……葉月が礼を言うようなことでも、ない気がするんだけど……」

少し照れたような依織の横顔を見ながら、「確かに」と葉月は笑った。

運良く、 女性がチェックアウトする時に捕まえることができた。

探 し物の協力を申 し出ると、 彼女は申し訳ないからと首を横に振ったが、 葉月が押し 切

る形で承諾を得た。

その後 急いで制服 から 私服に着替えた葉月と依織 は、 再び ロビーのところで女性と合

流する。

-·····キー 分がいつの間にかとれちゃってて」 ホル ダー、 なんです。 赤 い イルカの……。 鞄につけてたんですけど、 飾 9 0) 部

彼 女がなくし た ŧ 0) を 聞 い て、 正 直 なところ少し意外だと思っ た。 財 布 だとか、 指 輪

だ

とか、そういった貴 重 品 かと思ってい たから。

でも、 きっと何 か思い 入れの あるキー ホルダーで、 彼女にとっては紛 ħ Ł な 1) 貴 重 品

なのだろう。

ホルダー探しに協力することに 葉月と依織は、 夕方からのバ なっ イト た。 が始まるまで、 とい う 诗 間 制 限 0 き 0) 中 女 性 0) 丰

あの辺りでタクシーを降りて、この浜辺を散歩してたんです。 そ の後、 旅 館 に 行 つ 7 か

らなくなったことに気づいたので……」

何 かの拍子に引っ掛けたりしちゃったんでしょうかね?」 の辺り、と彼女が指を差した方向を見る。 そんなに遠くでは な

()

ホ ル 距 ダー探し 離はそんなに長くないが、 は難 航しそうだと思った。 砂に 埋ま

つ

てしまってい

るかも

Ū

れ

な

1

と考えると、

「……今日、 は い。十六時半 お 帰りになるんですか?」 発 の電車で……」

六時半……」

方からのバ イトが 始まる のは、 十七 時だ。 彼女が 出 発するギリギリ É で、 緒 に

とができる。

依 織と顔を見合わせ て頷きあうと、 葉月 たちはキ Ì ホ ル ダー 0) 搜 対索を始 め た。

予想していた通り大変なことだった。 真夏の海 .水浴場。炎天下、人で溢れかえる中を、小さなキーホルダーを探し歩くのは、 ただでさえ歩きにくい砂浜。 じっと神経をこらして

いることもあり、疲れは早くもやってきた。

「あっつ……」

額から伝ってきた汗を、手の甲で拭う。

(……見つかるのかな、コレ……)

だだっ広い砂浜を見渡して、ふと弱気になる。 しかしすぐに、 駄目だと自分を奮 い立た

(見つけるために、協力したいって言ったんだから)

せた。

振り向くと、いつの間に買ってきたのか依織がペットボトルのジュースを三本手にしてい よし、と気合を入れるために自分の頬を軽く叩いたところで、後ろから名前を呼ばれた。

「水分補給しなきゃ」

た。

と言いながらそのうちの一本を差し出され、 葉月は ありがたくそれを受け取った。

「ありがと」

依織はすぐに、葉月から少し離れたところで地 ジュ ースを持っていく。二人の傍に寄っていっ 面 に 目を走らせて V た例 の女性のところ

「あ、お金……」

「いいですよ。ジュースぐらい」

慌てて自分の鞄から財布を取り出そうとする女性に、 依織はそう言って断った。

「でも、手伝ってもらってるのは私の方だし……」

「気にしないでください。私たちが勝手にやりたくてやっていることなので」

依織はジュース代を受け取る気が全くないようで、その話をそこでおしまい

にすると、

蓋を開けてペットボトルに口をつけた。

女性は両手でペットボトルを持つと、「本当に、 何から何までごめんなさい」と小さく

すね」「いえいえ、ほ

頭を下げる。

「いえいえ、ほんとに気にしなくていいですって。キーホルダー、 早く見つかるとい

女性が申し訳なさそうに 勝手に首を突っ込んでいったのはこちらの方なのだ。 しているので、 葉月は横 いからフ オ \Box 1 -を入れ た。

依織

の 言

う

「ええ……」

女性はどこか悲しげな、寂しげな微笑を浮かべる。 その表情が引っかかり、 思わず葉月

は気になっていたことを尋ねていた。

「……そんなに、大事なものなんですか?」

女性はこくり、と一つ頷いた。

「……高校の時に、 んですけど」 好きだった人がくれたものなんです……。 もう、 亡くなってしま 5 た

葉月も、そして傍らに立つ依織も、 小さく息をのむ のがわかった。

(亡くなった……)

きゅっ、と小さく握られた両手を見て思う。

´……もしかして、まだその人のこと好きなのかな……)

胸がざわついた。

先ほどよりも、さらに固い決意が胸に生まれる。

(……絶対に、見つけないと)

勢い良くジュースを飲み干してから、 葉月はペットボトルの蓋を締めて鞄に入れる。

-....もう行くの?」

依織の声に、振り向いて答えた。

「あたしはもう大丈夫。依織たちはまだ休んでていいから」

再び砂浜を歩き出す。

残された時間は、少ないのだ。

「……つ、依織ー! あったー?」

方も、まだ見つかった様子はない。

少し遠くにいる彼女に大きな声で問いかける。

しかし、

依織は首を横に振った。

女性の

腕時計に目をやる。時刻は十五時五十分。

(まずいな……)

駅 まで行く時間 を考えれば、そろそろ女性はここを離 れなけ ればならない。

ホルダーはまだ見つからない。

好きだった人がくれ たというキー ホ ル ダー。 何としても、 見つけた N 0) に

いた。 「……あの……」

葉月が砂浜を睨みつけたまま立ち止まっていると、 (J 5 0 間 に か 女性が すぐ傍まで来て

「すみません……やっぱり、見つかりませんでしたね……」 そう言って、女性は眉尻を下げて微笑んだ。

葉月ははっとする。その言葉は、 捜索の打ち切りを示していた。

だされば……」 「あっ、あの! あたし、もうちょっと探してみますから……その、 連絡先とか教えてく

いんです、もう」

葉月が必死に紡いだ言葉を、

女性は首を横に振ることで柔らかく制

- え _

は呆然としてしまった。

あんなに必死に探していたのに。

予想外にあっさりと吐き出され

た諦め

0)

言葉に

二人が話していることに気づいたのだろう。依織が、 生懸命探してくださったのに、 すみません。でも、 傍にやってきた。 もういいんです」

「ええ。でも……」 「いいって……なんで……。だって、大事なものなんでしょう……?」

203

どこかすっきりとして見えた。もう、 す っと顔を上げて、 女性は遠く海の向こうを見つめて微笑んだ。その笑顔は、 悲しいような色も、 寂しいような色も浮かんでいな 不思議

「そういう、 時 が来たのかなって、 思ったんです」

そっと目を細めた女性に、 葉月はそれ以上、 何も言うことが出来なかった。

イトを終え、 葉月は 人、 すっ かり日 の沈 んだ暗 V 海を見つめ てい

ちからは、怒られるよりも心配され、逆に申し訳なかった。

その日の夕方からは、ぼんやりとしていて小さなミスが多かった。

女将や従業員の先輩

た

一疲れてるんじゃないの? 早めに上がったら?」

女将にそう声をかけられたが、別に体調が悪いわけでもないので、 女将 7の勧 めを断り定

時まで働かせてもらった。

『そういう、 時が来たのかなって、 思ったんです』

波の音を聞きながら、女性の言葉を何度も何度も思い

返していた。

の言葉の意味が、 葉月にはどうしてもわからない。

「……帰らないの?」

0) 背 返事を待たずに歩み寄り、 か 5 かかった声 に 振り 向 隣 に腰掛ける。 くと、 依織 が立 ってい た。 尋 ね ておきながら、 彼女は

「……あの人のこと、考えてたの?」

発で、核心を突かれる。葉月はそれに 頷 () た。

そういえば、 名前も聞かなかったな、 と今になって思い 出 す。

「……依織は、どういう意味だと思う?」

何が?」

「『そういう時が来た』って」

スカートから覗く長い脚をふらふらと揺らしながら、 依織は空を見上げた。

「そのままの意味じゃないかしら」

「……そのまま?」

依織の言う「そのまま」が葉月にはわからない。

「……未練を、断ち切る時が来たってこと」

どうして彼女は、大事なものをそんなに簡単に諦めることができたのか。

「……ねえ、葉月」 という言葉が、 何故か葉月の胸にずしりとのしかかった。

依織の声のトーンが、少しだけ落ちる。

「もしかしてあなた、あの人と自分を重ねていたんじゃない

冷たい空気が、すうっと肺に入り込んでくるようだった。

そう、そうなのだ。きっと依織の言う通り、

葉月はきっとあの女性と自分を重ね

てい た

会えない人を想い続ける。 その心を、 重ね ていた。

205

「……依織、さっき『未練』って言ったよね」

確認するような言葉に、依織の視線がようやくこちらを向く。

「その、恋と未練の境目って、どこなの?」

わ 月明かりと街灯の微かな明 からない。 日向を好きだと思う気持ちは かりで、 彼女がそっと眉 確 か に あ ったのに、 を寄せる 0 それ が 見 が現 えた。 在進行 形の

なの 恋愛としての感情はすでに終 か、 それともすでに過去のものなのか。 わっていて、 けれどまだ七ヶ月とい それがわ いからな () う 期限 が 残っ てい

るか

もの

諦めきれずにずるずると引きずっているだけなのだろうか。

(それじゃあ、あたしは……)

なんのために、 日向を探すのだろうか。彼を探していたのは、 日向が好きで、 告白の答

えを聞くのが目的だったからではないのか。

宗輔が野球を続けていられるのは、 好きだからだ。 葉月が 日向を 探し続け たのだって、

同じことだ。

ららば、 その 好好 き」という気持ちがなくなってしまったら。 葉月 が 日 向 を探すことの

意味だって、なくなってしまうのではないか。

夏 依 武織は、 休みが ?残り 葉月 0 半月に 問 V) に 迫ったその日。 は答えなかった。 葉月は、一つの大きなしこりを抱えることになった。 ただ二人、 無言で潮騒を聞 いてい た。





3350 -

ヒロキはこれといってやりたいこともない、平凡な高校生。高校入学を機に始め たアルバイト先で、ダンサーを目指すヤヨイと出会う。

曲者ぞろいのバイトの先輩たちにも囲まれて、なんでもないヒロキの毎日が、少しずつ転換点に向かっていく。



PII.

私立優華女学院高等部の三年生。ダ ンサー志望で、アルバイトの合間に 練習にはげむ。無口で、感情表現が 小さい。



市立中央高校の一年生。高校入学を 機に駅前のショッピングモールでア ルバイトを始める。ごくごく平凡な 少年。 のうちだ。

とりあえず

お

いておこう。

Ļ

夜は寝なくても 天 国

まあ、

そ

にとっては

0)

ような時 いい。

間 課 題は だ。 第三 なんとなくのフルスロ ッツ \vdash ル

不純な動

1

「海、行かへん?」

きっかけは、クスダの唐突な一言だった。

「そ。海。夏休みの定番やんな、

やっぱし」

海ですか?」

ダの白い歯は、 たしかに海を連想させた。

目をぱちくりさせるヒロキの耳に、本場

の関西弁が飛び込んでくる。きらんと光るクス

七月。 授業もテストもない。 季節は夏休みに入ったばかり。 朝は起きなくてもい 高校生 V

ヒロキとしても、 ヨッピングモール 時間を気にせずにバイ 0) メカニックスタッフ。 トに 打ち込める一ヵ 機械系等全般と清掃と、 月半である。 あとは力仕事

211

もろ

もろをまとめてかたづける部署だが、三ヶ月もすると、その仕事にも少しずつなれてきた。 少し前までは 1 駐車場 Õ 見回 り兼ゴミ拾いがほとんどだったが、 最近は工具もさわらせて

もらえている。 イトが楽しくなってきたところだ。 スパナもラチェットもアレンキも、状況に応じて選べるようになった。 夏休みはみっちりシフトに入って、 ついでにお

そんな中で、 先輩のクスダから飛び出した 海 との 言葉だっ た。 も貯めようと思ってい

、 る。

海はええよ。やっぱ夏は海よ」 クスダはひとりごちて、うんうんとうなずい ている。 もう三十手前という、 メカニック

れるため、 では一番の年かさだ。ヒロキとは十歳以上離れ が、 実際に話してみるとものすごく若々しい。 年齢の壁をまったく感じさせな ている。 ひょうきんもので、

フランクに接してく

かすところも、 せいぜい二つか三つ上の、気のいい先輩という感じ なんだか人間味があって安心する。 だ。 酒飲みで、 ときどきポカをやら

つうわけで行こうや、 海

ただ、

そのノリと勢

い

には、

ときどき気圧されてしまうの

も事

実だ。

いや、急に言われましても」

年生にいきなり旅 しり込みした。 楽しそうだと思う反面、唐突で行き当たりばったりな印象を受けて、 そんなんすぐに決めれるやろ。行くで、行くよな」 後先考えないのはクスダのよさでもあ 行と言われ こても、 少々 11 1 ドル が 高 り、 欠点でもある。 ヒ L \Box か キはち っと

年 -長者 の特性か、 クスダは顔を近づけてせまっ た。 やけ んこだわる。 まだ夏休み は 長

のだし、今すぐではなくても海は逃げない。

と、横で聞いていたカワナが、ズバッと切り込んだ。

「なんスか、クスダさん。ナンパっスか?」

「うわ! しーっ、しーっ!」 飛び上がったクスダが、口元に指を当てた。 カワナは半笑い を浮かべ る。 指摘 のとお

ヒロキは思わず言葉を失った。べつにあきれたわけでない。 むしろ、 クスダの

直球

ぶり

クスダの目的はナンパだったらしい。

が、クスダはそれを好意的には受け取らなかったようだった。

に感心したくらいだ。

「なんやねん。ええやん、彼女ほしいねん!」

「そんないいモンじゃないっスよ、女なんて。うるせーし、 めんどい

開き直ったクスダが大声で言う。対してカワナは肩をすくめた。

「うっわー、むかつくわー。 なにその勝ち組発言。ヒロキ、 腹立つやんな?」

「いや、えーっと」

1 5 正直、 カワナもメカニックの先輩だ。 もすっきりしてい あまり立たない。 てさわや ヒ ロキ かだ。 彼は男の は苦笑い ファ ヒロ ツ でごま ショ キから見てもかっこい か i 誌 に載 た。 っていそうな服 い。 を、 背は 高 さらり

かにももてそうで、 実際、 彼女が いるとかいない とかい う話を、 ほ んの三ヶ 月で十 口

こなすセンスもすごいと思う。

顔

する。

以上 聞 V ている。 そして、 ひがみや 負け惜しみではなく、 本気でさきほどのような発言を

思議と腹 教室で男友達が虚勢を張ってい が立 た な 0) だ。 るのとはまったくちがう。 カワナが言うと、 Ł П 丰 は

とした目。 5 なみにクスダは、 浅黒 無い肌は もてそうだとはちょっと言えない。 いかにも男っぽさを強調している。 少し前 ちぢれ 毛 0) 時 に 代の、 太い眉毛、 だ。 ぎょ ろり

いう女の人もいるのだろうが、 クスダは明るいムードメーカーで、 ヒロキの主観ではどうしても、 話しているととても楽し 女性はカワナを選んでしま い。そういう男が 好きだと

つにヒロキがえらそうなことを言えた立場ではない のだが。 う気がする。

「ほなええやん。行こや」「そりゃ、ほしくないってことはないですけど」「ヒロキは彼女、ほしないん?」

カワナがパチッと指を鳴らした。 スダは持ち前の強引さでぐいぐいと押し込んでくる。 ヒロキがたじたじになっ 7

「じゃあ、こうしましょっか。 一人につき一人ずつ、 女の子を連れてくること。 もしくは

現地調達すること」

ーはい?」

「なにそれ、おもしろそうじゃん。ノった」

き返したところに、 さらに乱入者が加わった。 扉が開いて、 三人の作業服姿の男たち が

入ったのだ。

が入ってくる。

輩たちだ。タイ えたらしい。 イケタニ、ヒトツモリ、ムロフシ。 ムカー ドの打刻のため のに事 ヒロキたちと入れ替わりで、今日はもう上がりの先 務室に行っていたのだが、 戻ってきて話 が 聞

中でもヒトツモリの食いつきがよかった。

海なんて何年も行ってないし、ちょうどいいや。ユキがどっ か連れてけってうるさくて

車出すよ。 カワナさんのと二台でいいんじゃない?」

祭り好きのヒトツモリは、こういうときの行動が早

()

もう行くつもりのようだ。

お

なみにユキとは、ヒトツモリの恋人の名前である。

どうせ車出すんなら、 遠出しますか」

せやせや。

新しい街、

新しい出会い!

N市を飛び出そう!」

「知り合いに会うのも馬鹿らしいし、となり街ぐらいには行くかね

さくさくと話が進んでしまって、 ヒロキは口をはさむタイミングをのが した。

「いつにする?」

も来週、 部長と面談だからパス」

「僕の入ってる日でいいですよ。

僕は連れていくような人、

Į,

ませんから」

ムロフシとイケタニは、早々にメンバーからはずれた。

一人では丸一日担当することはできないので、もう一人、バイトがいる。そこにムロフシ イケタニとヒトツモリは 正 社員だから、どちらかが店に つめていないとまず い

そのとき、 ヒロキの中で、 ふとひらめくことがあった。

女の子を現 地調達ということは、 要するにナンパしろということだ。 ヒロキにそんな度

胸はない。

かといって、 いきなり海にさそってOKしてくれそうな女友達 ŧ いない。 入学して一 学

期を過ごしただけで、そこまで親しくなれる女子はいなかった。

ヒトツモリたちの様子を見る限り、カワナの提案は通りそうだ。そもそもメカニックは

こういう妙なルールによろこんで挑戦する風変わりな集まりで、なんでもノリでやってし

まうきらいがある。

危険信号が灯った。とっさに手を挙げて予防 線 を張 る。

『いらない。いってらっしゃい』

イケタニとムロフシはにこやかに、そして即座にヒ

 \Box

丰

の逃げ場を奪

い去っ

た。

表面上

「あの、オレも、シフトに入って手伝いを」

は、 てくぐり抜けるか、それを楽しみにしている目だ。 だが、目は笑っていた。絶対におもしろがっている。 後輩のせっかくの休みをつぶすのはかわいそうだとい カワ 、う顔 ナのル をし 1 ルをヒロキがどうや ている。

「じゃ、この週末に決まりな。 十時に店の前に集合」

「楽しみやなー」

ヒロキ、 出勤したらクビね

れよあれよという間に、 Y П 丰 は参加、 カワナの ルールにもしたがうことが決まって

しまった。

て降 女 へ の 子 ŋ かかったのだった。 を一人、 連れてくるか、 ナンパする。 ただの小旅 行 が、 Ł \Box 丰 に は 大難 題 に 変 わ

……っていうわけなんですけど」

駐 車場 の一角で、 ヒロキはなんとも頼りない顔で話を終えた。

しなやかな手足がのぞいている。 女が一人、 だまってそれを聞いていた。 首にかけられたスポ スポーティなシャツとショー ーツタオルが、 色白 の肌を流 ンツ

る汗をせき止めていた。

練習を一段落した彼女に、ヒロキは両手を合わせておがむ。

ヤヨイさん。 いっしょに来てもらえませんか? このとおり! お 願 V

目をぎゅっと閉じて、ヒロキはそれこそ祈るように返事を待った。

ヒロキがメカニックのことを相談できる、

ヤヨイは、

スタッフでは ない。が、 同じショッピングモールでバイトをしていて、 メカニックの事 情

唯一の相

手だ。

彼

女は

メカニッ

やメンバーの性格をよく知っている。

で練習 そ に 励 h ・うの でいるからだ。 も、ヤヨイはダンサーをめざしていて、 こ の ショッ ピ ングモ・ 1 ル O駐

車場

待機室 Y 口 駐 丰 車 Ł に 場 そ 顔 0) 0 を出 見 輪 回 に加わ りは して、一声かけていく。そうこうするうちにメカニックとつき合いができ メカニッ っった。 クが 行う。 なので、 ヤヨ 1 は 練 習 前 に わざわざメカニッ クの

ヤヨイと一年のヒ t ヨイとは、 ヒロキが一番親し ロキではちょっと差があるが、それでも同じ高校生なので、なんとなく い 他の先輩はみんな、 すでに高校を出 ている。三年

空気が合うのだ。

見ず知らずの なので、 今回の 誰 海 かをナンパ 行きをどうにか乗り越えるために、 するよりは、 、まだ知っている人に頼むほうがマシだ。そして、 ヒロ キはヤヨイを頼 った。

ヒロキにはヤヨイしかいなかった。

しばらくの間があって、ヤヨイがぽつりとつぶやく。

そんなことを頼める相手は、

「……いいよ」

え、マジですか?」

ヤヨイはおせじにも、人づき合いのいいほうではない。 んでおきながら意外な答えが返ってきて、ヒロキは思わず顔を上げた。 口下手で、 友人も少ない。 正 直

なところ、誰かと旅行に行くような姿は想像できなかった。

まじまじと凝視すると、ヤヨイはついっと視線をはずした。

わたし、会ったことある。しっかりした人だから安心だし、

ひさしぶりに会いたい」

「ユキさんも来るんでしょ?

早口でぼそぼそとヤヨイが言う。が、ヒロキはほとんど聞いていなかった。 かった。肩の荷が一気に下りる。ヤヨイが来てくれれば、 何も言われることはな

「ありがとうございます! 助かります」

ていた。 大声に、 表情がゆるむ。 ヤヨイがびっくりして目を見開 ヤヨイがまた、 いた。 視線をそらした。 Y \Box 丰 · は 知 らないうちに、 大きく息をつ

「そんなによろこんでくれるなら、 よかっ た

「な、なんでもない。 それじゃ、 また 土 曜 日

た。 そそくさと荷物をまとめて、ヤヨイは小走りに去っていく。 ヒロ 丰 はその背中を見送っ

めずらしくほころんだヤヨイの

唇

に、

Ł

 \Box

キが気づくことはなかった。

2 冷ややかな砂浜

週末。天気は快晴。 絶好の海水浴日和に 磯貝由紀です。 なった。

はじめまして。

ユキ

でい

い

わ

ょ

は、はい。よろしくお願いします」

「きみがヒロキくん?

ヒトツモリといっしょに現れた女性に、 ブカットの、はきはきした話し方をする人だ。 ヒロキは自然に手を ヒ 口 1キとは 初対 取 5 れ 面 だが、 た。

関 係

なく声

かけてくれた。一応、先輩の彼女ということで、変に緊張していたヒロキだったが、 一言でそれを吹き飛ばしてくれた。 ユ

ま あ、 ヨイちゃんの友達なんだってね」 そんなとこです」

「そっか。仲良くしてあげてね」

そう笑うと、 ユキはヤヨイのほうに向き直っ

ひさしぶり、ヤヨイちゃん。 どう、 練習?」

「がんばってるんだ。よしよし」 い。なんとかやってます」

ーきゃつ、 ちょ、ちょっと、ユキさん!」

V 片手でヤヨイをかき抱き、 きなり頭をなでられたヤヨイが、身をよじって逃げようとする。 ヤヨイの髪をくしゃくしゃとかき混ぜる。

で楽しんでいた。そこはヒトツモリによく似てい ヒロキがときどき、ヒトツモリにあんな顔をされるのだ。 た。

いのけるわけにも

いかず、

困り顔をするヤヨイ。

それをユキは、

少し

(J

じ

わ

るな

笑顔

が、

ユキ

は

逃

が

さな

「このくそ暑いのによくやるな、ユキ」

「うらやましい?」

「うらやましい。 俺もヤヨイ ちゃ んにべたべたしたい」

「バカ言ってんじゃないの」

5 うらめしそうにユキを見ている。 ヨイを解放したユキが、こつんとヒト - ツモリ 0 胸 をたたい た。 ヤ ・ヨイ は髪をなでなが

な いので、 ヒロキはちょっと新 こうい う子ども 鮮な気分だった。なんだかんだ言っても、 つ ぼ いところは見せな メカニックの先輩にから ヤヨイは ヒロ かわれても 丰

木

りは

しても、

ふくれたりはしないのだ。

ユ キの 影 響だろうか。 彼女が い わ ゆる 姐 御 肌 というの か、 接していてすごく安心感 が あ

る。 そういうところが、 無意識 に 人を甘えさせるの かもしれ な

るような気がする。 一人っ子のヒロキは 姉 0) (J る感覚は わ か らな (V が、 ユキがそれ に近い ŧ 0 を持 つ 7

そんなことを考えていると、小さなクラクションが聞こえた。

一ういーっす」

「おはようさんです」

シャツを着たクスダが顔をのぞかせた。クスダの顔には、ごていねいにサングラスまで乗っ ている。 白 い乗用車が横づけ して、 窓が 開く。 ラフなTシャツを着 た カワナと、 F 派 手 な ア \Box

「なに、クスダくん。やる気満々じゃない」

- 当ったり前でしょ。戦いはもう始まっとるんですから」

した。クスダは一人で悦に入っている。

ビシッと、本人は決めたつもりなのだろう、

サングラスを指で押し上げる。

ユ

キが

笑

「こっちに荷物乗せちゃうから、 ヒロキとヤヨイちゃ んはカワナさん 0) 車 に 乗って」

「わかりました」

ヒトツモリにうながされて、 ヒロ キはカワナの車 の後部 座 席 に入る。 となりにヤヨ 1

座った。

でたちだ。 今日のヤヨイはタンクトップにシ 肌は ほどよく色づいて、 健康的 ヨート パン な印象を受ける。 ツ、 編 2 込み のミュールという夏 しなや かな手 足は、 日頃 らし

0)

練

習のたまものだろう。

「ヤヨイちゃんをつかまえてくるなんてやるな、ヒロキ

「他に誘えそうな人、いなかったんですよ」

ッ 力。 そこは 最初からヤヨイちゃ んを誘い た たかっ たって言えよ」

「わたし、いつもこんな感じです」「せやせや。かわいいカッコしてきとんのに」

「あらー?」

クスダが助手席でわざとらしくずっこける。 車内に笑い が起こった。

ヒトツモリと二、三、言葉を交わし、

ズに動き出し、ステレオからは軽快な洋楽が聞 こえてきた。

カワナは手早くカー

ナビを設定する。

車

は

ス

1

に、

左手が

\$

け

に

いそが

しく動いていた。 カワナは鼻歌を歌いながら、 ヒロキはそこにめずらしい ハンドルを操作する。 ものを見つけた。 信号のたび

カワナさん、オートマじゃないんですね」

「おう。こっちのほうが楽しいからな」

カワナの車は、マニュアル車だったのだ。

「オートマは運転してる気になんねーよ。

楽だけどな」

·そんなもんなんですか」

たことがあるが している ロキは免許を持っていな 車 に は よく乗るが、 見 る のは初めてだった。 全部 () オ あと二年 1 ト -は 待 チ ッツ ク 車 たな だ。 いと法律が許し Ł 口 キもマニュア てくれ ル な ζ) • 車 . 0) 親が 話 は 聞

「なんでそんなに、いっぱいレバー動かさないといけないの?」

じようにカワナの 手元を見たヤヨイが、 首をかしげた。 ヒロ 丰 は説明 に 困 」る。 は

き

り言ってわからない。

ちゃ 「ギヤを入れ替えてんだけ んと走らねーのよ。 昔の車 ڵؚ 説 は ね 明するっ てなるとめんどくせーな。 要は こうし なな

た。 ざっくりしすぎの カワナの言 葉 に、 ヤ Ξ イ は 何 度 ŧ 首をひ ね る。 Ł 口 丰 ŧ 同 じ 気 分 だ

坂道を登れなくて止まってしまったりするのだ。 にギヤを変えて変速する必 車 は エ ンジ ン 0) 口 転 数 に 要 合 がある。 わせ て、 無 そうしない 理 0) な 1) パ . ك ワ 1 いつまでも時速十キロで走ったり、 とスピード が 出 る よう、 V h

れ が当たり前だった。 7 _ _ _ ア ル 車 は そ 0) 変速を手動で行う。 ちょっと 面 倒 で コ vy 0) 1) る作 業 だ が 昔 は

そ ここに 状況 に応じ て自動 でギ ヤを変えるオー 1 \forall チ 'n ク 車 が 登 場 主 流 に な つ た 0)

もうさわ 才 j 1 る \forall 必 車 要 な 5, は な シフ \vdash レ バ 1 をドライブに入れてしまえば、 駐 車 場 に 入ら な い 限

り

止

ま つ てしまうの マニュア ル車 だ か 5 は スピード 操作 ŧ が い 変 そ が わるたびに L い シフトレ バ 、一を操 作 する。 信 号 で は 車 が

ワナ そ れが もその 逆に、 一人という 車を動 b か いけだ。 んてい るとい う感覚を味 わえて好きだという人は、 今も 多い。

力

5 なみにマニュアル車は、一 般に「ミッション」とも呼ばれる。 マニュアル・トランス

ミッション、手動変速の略だ。

ねーけどな、今は。二人とも、 運転するんなら、ミッションのほうがおもしれーぜ。そんかわり、 そのうち免許取るんだろ?」 ほとんど乗るときが

「オレはほしいです」

ヒロキは身を乗り出した。

金がかかるらしいが、それでも車や免許は 男としてはやっぱり、 車の運転というのはあこがれる。 ほ しいと思う。 単 純にかっこいい。 いろいろお

一方のヤヨイは、そこまで心がおどるわけでもないようだ。「わたしは、まだあんまり」

ことを言う。カワナはおかしそうに笑った。

自転車でいい、

と夢のない

免許」

助手席に話が飛んだ。音楽に合わせてリズムを刻んでいたクスダが、

顔だけこっちに向

「つーか、クスダさんも取りましょうよ。

ける。

「やっぱ、あったほうがええかな?」

「女の印象、

サングラスがきらりと光った気がした。

ちがうみたいっスよ。

あるとナシじゃ」

「そっかー、ほなら真剣に考えよかな。ところでどうやろ、

カワナさん?

今日の勝

算

まあ、 話 の流れがつかめない。 ヒロキもいる なんとかなるんじゃないスかね ヒロキは深く考えずに、その中に踏み込んでしまった。

「オレがいると、なんか変わるんですか?」

「ナンパの成功率がちがうんだよ。 十代がいると、 お姉さん方が引っかかってくれるから

な。高校生なんてなおさらだわ」

カワナがあっさり言ってしまう。 瞬 後、 ヒロ 丰 0) 頬 に 亀裂が走った。 まずいと思った

ときには、もう遅い。

ナンパって、どういうこと?」平坦な声が、となりから聞こえた。

ヤヨイが聞いてくる。いつものように無表情だ。いや、

ちがう。

「いや、クスダさんとカワナさんが」いつもにも増して、無表情だった。

まあまあ、ヒロキ。これでも食べえや」

弁解しかけたところに、クスダがポッキーを突っ込んできた。それも五本いっぺんにだ。

のどを突かれ、くぐもった悲鳴がもれる。 カワナはニヤニヤ笑うだけで何も言わない。クスダも当然、 そのままむせて、 声 フォローなどしない。 など出なくなった。

ヒロ

その手はぴしゃりとさえぎられた。

キは苦しみをこらえ、必死にヤヨイのほうに手を伸ばした。

「そう。がんばってね」

冷たい声で引導が渡され る。 ヤ . Э イの 顔 は 窓 0) 外を向 Į) た。 そのままぴくりとも動 か

くなった。

「あ、あの……ヤヨイさん?」

な

キの声

は

座席の

V

Ū

か

け

0

向こうに

は届かなかった。

ける。

ようやく呼 吸が 戻 ったもの の、ヤヨイは戻ってこな い。 見えない 壁 に は ば まれて、 Ł 口

がっくりと、 Ł \Box 丰 は肩を落とし た。 陽気なラテンのメロ デ 1] が、 陰 鬱さに 拍 車 を

か

前の 座 席 でカワナとクスダが笑い をこらえていることに、 Ł \Box 丰 は 気づ つかなか つ た

青 1 空。 白 (\) 砂浜。 打ち寄せる波。

味 0) 濃い焼きそば。 こげるソースのにおい。 缶ビール。

いやし、 なかなかうまくいかんモンやね!」

海 すっかりできあがった顔のクスダが、からからと大きな声で笑った。 の家 の一卓。 ヒトツモリはパラソルを立てて、 むき出しの木のテーブルには、 砂浜に寝転がっている。 カワナとヒロキ が同席してい . る。 女性

ユキとヤヨイもそこ

姿は

な

昼 一食は男三人での、 色気のないものになった。

お前さ、もうちょっと堂々としたら?」

そう言われても……」

苦笑交じりのカワナ の言葉 に、 Ł 口 丰 は しどろもどろ に な つ た。

結果だけ言えば

ヒ ロ

キたちは苦戦してい

クスダ発案のナンパ大会。

226

た

かがナンパ

な

h

だ

か

5

そ

h

な

深

刻

に

考え

h

なよ」

相 丰 1/1 に ろ 返 h 事 な すさえ に させ 声 は ħ か ば け 7 力 1 ワナ る。 が ク Ź お 手 ダ . О は Ł そういう の だ。 軽 ところ 妙 な 語 で は り ま \Box で つ 興 たく 味 を引 物 怖 くところ U L な

素 直 に 感 心 7 しま ょう。

間

題

は

Y

П

丰

だ

5

た。

力 パワナ 8 ク スダがうまく話 L 7 い 7 ŧ ヒ ロ キがそ れ に 乗 って 1 け な い 0)

初 女 面 で、 異 性 で、 さら に ま つ たく 前 情 報 ŧ 何 ŧ な (1 そ h な 相 手 にどう 話 だ せ ば 0)

か、 Ł 口 丰 に は さっぱ りわ か 5 な い。

レ 住 ん ビ番組 高 で 校 で 1) る場 初 8 聴 8 が所だっ 7 1) てい 会っ 7 る た 音 クラ Ν [楽の 市 Ź 0) 見当もつく。 中 X 1 だろう。 ŀ とは 学 わ 校でのできごとは共有しているし、 け が 5 が う。 白 こうは、 少 なくとも 年 見ているテ は 同 じ だ

わ 知 ŋ か ユ っ 合 丰 た。 ŧ 1 でも 初 枚 あ 面 る。 で、 L X 力 か ニッ も年 クのことだっ 上 0) 女性だっ て 知 たが、 つ てく 彼 女 'n は てい Ł 1 るか ツ モ 5 リの なんとなく接し 恋 心人だし、 t \exists 方 イ

そういうも 0 がすべ 7 诵 用 L な い

Ł 口 丰 通 は 0) 高 ~ 校 つ に引っ 生だ。 度 込 込み思案 胸 ŧ 人 では な み。 な それ い が、 でカワナとクスダに交じっ そこまで社交的でも な () 7 行 言 l う な 動 す Ź れ ば 0) は、

が に 荷 が 勝 ち つすぎた。

だっ 結 た 力 ŋ ナ がうまくとり な て、 また 後 で、 とい 、う言葉 でしめくくることが 続 い た

0)

「はあ……」

ロキは あい まいにうなずく。 無意識 に 視線が、 ちらっと動いた。 紅白 のおめでたい ı९

ラソルの下にいる少女と一瞬、目が合う。

からだ。 ヨイとは、 すぐにふいっと顔をそらされた。ヒロキの気分がまた一 ここに来てから言葉を交わしていない。 有無を言わさず、 段階 しずむ。 クスダに連行された む くれ たま ま 0) ヤ

「よっしゃ! 次はあの子らや。ほな、行ってきまっせ!」

ビールの空き缶をテーブルにたたきつけて、クスダが勢いよく立ち上がった。 そのまま

もうカワナやヒロキがいなくても気にしていない。一人で、大学生っぽい集まりに突撃していく。

「そこはすごいよな」

めげないですね、クスダさん」

クスダはあっという間にあしらわれた。が、すぐに砂浜を物色し、 またべつの方向へと

向かっていく。

ているような気がする。 なんだかもう、ナンパ の成功失敗に関係なく、 ああやってはしゃぎ回る のが 7目的 に なっ

(……戻りたい)

本音が脳裏をかすめた。クスダがいなくなれば、 ヒロキはもう、 いてもいなくてもい

のではないだろうか。

ときおり飛んでくるヤヨイの視線が、 何度もヒロキに突き刺さる。 遠くからぐさぐさや が、

られるくらいなら、 まだ近くにい るほうが マシ だった。

あねーな」

ぽつりとカワナがつぶやく。 と、 千円札 をテ 1 ブ ル に 置き、さっさと歩き出

ヒロキはあわてて後を追う。 カワナはまっすぐにパラソルに向か V) Ł 口 丰 を親指 で指

「ヒトツモリさん、 これ置いていきます」

した。

スポーツ新聞を読んでいたヒトツモリが、 むくっと顔を上

なに、 もういいの?」

「こいつ、さっきからガチガチに緊張してて、なんの役にも立たない んスよ。一人で行っ

たほうがよっぽど成功するっスわ。 つうわけで、また後で」

言うだけ言うと、カワナは手をひらひら振って、あさっての方向 歩 てい · つ た。 Ł 口

キは一人、ぽつんと残される。

目の前 に、 ヤヨイが 座ってい た。

・ヨイはスポーティなセパレートタイプの水着

の上に、

Tシャツを羽織

っている。

それ

でも身体のラインは見えるから、どうしても意識してしまう。

じろじろ見たら危険なことぐらい、

ヒロキ

にもわ

かる。

ば

つが悪くなって、

ヒ

丰 は視線をそらした。

れじゃ、 定番でビーチバレーでもやろっ

れ始める。 ユキが明るく言って、ビーチボールを取り出した。 しま模様のスイカが見る見るうちにふくらんでいった。 ヒトツモリが受け取って、 空気を入

か

「ユキさん。わたし」

「ヤヨイちゃん、いいこと教えてあげよっか。 これなら顔面にぶち当てても文句言わ れ な

いわよ」

「やります」

ぶっそうなユキの発言に、ヤヨイの目の色が変わる。 身の危険を感じて、 ヒロキは思わ

ず一歩引いた。

が、そこをヒトツモリにがしっとつかまれる。

「男女のハンデがあるから、こっちはヒロキー人ね。がんばれ」

ー え !? 一人でビーチバレーなど、勝てるわけがない。そう抗議しようにも、 背中を押され、

ユ

キがトスを上げで、なしくずし的にはじまってしまった。 あわててかまえる。そこヘヤヨイが、さっそうと飛び上がった。

ダンサーを目指すだけあって、しなやかで伸び上がるような動きだ。

細身の身体が宙を

舞い、月のような弧を描く。

見とれたヒロキに向かって、打撃音とともに弾丸が発射された。

「ぶっ!」

鼻っ柱にものすごい衝撃をくらって、ヒロキはそのまま後ろ向きにぶっ倒れた。 ビー チ

ボールとは思えない一撃だ。

イが全身のばねを使って、全力を込めたスイカは、 ヒロキの数メー トル後方でぽ

んとはずんだ。

「なに?」 「ユキさん」

「すっきりしますね」

女性陣が謎のわかり合いをしている。

Ł \Box

キの顔が引きつった。

ヒトツモリは律儀

に ス

イカを拾ってきてくれる。

「じゃ、続けよっか。何発もつかな、ヒロキくん。ちなみにうちのは三発でギブアップし いつもはどれだけうまく仕事をサボるか、そればかりを考えているくせに。

「五回は耐えてくれるって、信じてるから」 あやしげな笑みを浮かべるユキとヤヨイに、ヒロキ

たけどね」

権はない。 は条件反射 的 に立ち上 一がっ

た。

拒否

それだけわかればじゅうぶんだった。

結

局、 ヒロキは七発までがんばって、 ヒトツモリとユキにカキ氷をおごってもらっ た。

3 大人の

「うっしゃ! 上がり!」

大人げない声を上げて、クスダがトランプを放り投げる。

「あちゃー。ヤヨイちゃんになっちゃったか」

一人だけ手元にカード が残ってしまったのは、 ヤヨイだった。 窓際でたばこをふか して

いたヒトツモリが苦笑いを浮かべる。

夕食前、 旅館 0) 一室で始まった、 コンビニへの買 (J 出 しをかけたトランプ大富 豪

発

勝

負だったのだ。

「ハや、券争よ券負。」クスダく~ん」

いや、勝負は勝負。 ユキに言わ れ しまったという顔をしたクスダだったが、すぐに開き直る。 しゃあない」

性は連れ ていない。 どうやら、 成果はかんばしくなかったようだ。 机の上のビー ル 0) 空き

ちなみ

に女

缶は、半分はクスダのものだ。

てい たそうだ。たぶん、本当だろう。 カワナのほうは、 たのかもしれない。 、何人か引っかけたらしいが、仲間内の旅行ということで連れてこな 部屋でしばらく携帯をいじっていたのは、メールでも送っ かっ

ヤヨイは淡々と、トランプを箱にしまった。

負けは負けだから、いいです。楽しかったし。行ってきます」

み物やお菓子だが、みんな浮かれていたので、 そう言って、 机の上のメモを取り上げる。 内容は勝負の前に、 けっこうすごい量 だ。 みんなで書い てい

そのぶん、勝負に熱が入ったのだが、ヤヨイが行くとなるとちょっと大変かもしれ ヨイさん、 オレも行きます!」

な

飲

気がつけば、

ヒロキは立ち上がっていた。

歩く。

ヤ · ヨイ が 目をしばたかせる。 カワナやクスダも、 瞬、 動きを止 め る。

んじゃ、 ロキと二人で行っといで、 ヤヨイちゃ ん。 人じゃ あぶない Ų 荷 物 だも重

ヒトツモリの言葉に、ヤヨイは少しとまどいつつも、こくっとうなずく。 よ Ł \Box 丰 は Ł \Box

+で、 勢いで言ってしまったがよかっ たの かと自問 した。

自分から言ったのはえらい。できるだけフォ ユキに耳打ちされた。 口 ししとい たから、 あとはがんばりなさい

た顔で待っていた。 そう言って、ぽんと背中をたたかれる。 入り口ではヤヨ イが、 来るの か 来 な い 0) か と

ね。

きみならだいじょうぶだから」

あ わてて靴をはい て、 ヤヨイ とい つ Ū ょ に 旅 館 を 出 る。

つもしなくて、 空 びっくりするほど真っ赤な夕焼け ŧ 雲も、 Щ ŧ かわりにカラスの 道も、 影すら 鳴き声 だ が、 い だ 視 界 が遠く聞 い を焼 色に染まるような錯 こえた。 た。 覚 に

包

ま

れ

る。

重

0)

音

が

1 遠 Ν 市から車で二時 い場 所に来たか 間 のようだ。 ほど。 昼 に は 着 いてし きまっ た場 %所なの に、 まるで経 験 ĺ たこ 0) な

だ。 t 歩 きや - は先に すくて気 立って歩き始める。 に 入ったら L 足 元は ユキと行った民芸品 0) 店で買 りつ たとい う草 履

ンビニまでは徒歩で二十分ほど。 海と山 にはさまれ た () わ ゆ る 田 舎 道 をゆ つ < ŋ

トボトルやらポテトチップスやらをてきぱきとかごに放り込んでい な んだか、べつの時間の中にいるようだった。コンビニの店内は 見慣 れたもので、 ッソ

ヒロキは不思議 れど、一歩外に出て歩き始めると、また静かでおだやかな空間 が広がって た。

に、

心が落ち着くのを感じた。

荷物

の重

一みも気に

ならな

ナンパ、成功した?」

ヤヨイがぽつりと口を開く。 あまり大きくないヤヨイの 声 も、 今は は つきりと聞 言き取れ

「すいません。なんか、いやな思いさせちゃったみたいで」

たら、なにかあれこれといいわけを探してしまうと思う。 Iから、 素直な謝罪 がこぼ れ出た。 我ながら意外だった。 学校で同じようなことが

「いいよ、もう。こっちこそ、調子に乗ってボールぶつけちゃった。ごめん けれど、 この静けさの中では、なぜかさらりと口にすることができた。 ね

夕日に照らされて、ヒロキの見たことのない表情になっていた。

ヤヨイも、ストレートに謝ってくれた。振り向いた口元が、やわらかくほころんでい

「せっかく遠くに来たんだから、楽しくいたい。家は楽しくないから」

| え |

続く言葉に、ヒ ロキ は声を失った。 ヤヨイは笑っている。 そこにうすい影が見えたのは

夕日のせいだけではないだろう。

気にしなくていいよ。春になったら、 それ をたし かめる前に、 ヤヨイはまた前を向 家を出るから」 (J てしまった。

家を出るって、 どうするんですか?」

東京に行く

突然 の決意表明だった。

「ダンスなんてやろうと思ったら、 やっぱり東京に行くしかない から。 卒業したら、そっ

ちの専門学校に入るつもり」

おどろき、ヒロキは思いついたことを、 ただ聞 N てみ た

親とか、 なんにも言わないんですか?」

言わないよ。

そこだけありがたいか

Ě

答えるヤヨイの顔は、どこかさびしそうだっ た。

ヤヨイの家庭のことを、 ヒロキは知らない。 ヤヨ 1 は話さなかったし、 ヒ П 丰 ŧ

とは思わなかっ た

クラスの友達にも聞 11 たりしないことだ。べつの学校で、学年もちがうヤヨイとの 間

話 題 になることでもな ζ) (

「うちの親は放任主義だから、なんにも言わない。 好きにしなさいって」

ヒロキの親 は、まだそこまで口うるさいほうではないらしい。ヒロキからすれ ば U

ぶん たしかに、 やかま i 勉強 () が、 しろとは 周りの話 を聞 くと恵ま れるが、どこかの大学に入れとか、どん れているほうに入るようだ。

ょ

らく言わ

な

職

業

に

つ け

とか、 そうい う 話 は 出 てこな い。 バ イトも 今回 0) 海 行 きも、 べつに反対さ れ な か つ た。

ン家庭だ。 父親も母 母 . 親 も、 は パ 1 V わ ŧ ゆる一流大学を出ているわけではなく、ごくごく普通 して (J る。 真剣 に 話 L たことはないが、 高校を出て、 のサラリー 大学を出て

就職すれば文句は言わないと思う。

友達は ヒロキ をうらやまし いと言う。 中 に は ŧ つ と何 も言 わ れ ないヤツも そうい

う場合はヒロキもうらやましがるほうに回る。

放任主 け れど、 義 本当にそうだろうか。 0 両 親 に、 好きにしなさいと言 Ł П 丰 0 わ 頭 れ に いるだけ ふと、 0) 疑 ヤヨ 問 が く。 浮 か h よく考えれば、 だ。 彼女は

ろうか。 市ではお 嬢 様 学校とし て知られる優華女学院 に 通 っ 7 (J る。 なの に、

何も

言わ

れ

な

い

のだ

N

それだけ 聞けば、ヤヨイはうらやまし V 部類 に入るだろう。 Ł ロキ とは らちがっ 受

生だ。 なのに、 なおさらそう言 ステップをふむヤヨイは、 わ れても不思議 うれしそうには見えなかった。 は な \ \ \

「あの」

「きゃっ」

けよる。

話しかけたそのとき、 ヤヨイがバランスをくずしてひざをついた。 あ わ ててヒ 口 丰 は か

さいわい、 ケガはないようだ。だが、 足元はそうは 1 かなかった。

「……鼻緒が切れちゃったみたい」

し込んでみても、 持 、ち上げた草履が、ぷらんと力なくゆ 当然、 直るわけが ない。 ħ た。 鼻緒 が はず h て垂 れ下がってい る。 穴

Z れ 旅 はもう、 館 とコンビニの、ちょうど中 誰 かを呼んだほうが早 間くらいだ。 いだろう。 どちらに行っ ヒロ + は 携帯を取 ても、 り出した。 そこそこ時 間 が か か

「げ。圏外だ

アンテナの横に、無情な漢字二文字がならんでいた。

り込んだヤヨイが、 こちらを見上げてい る。 わけもなくヒ 口 丰 はあ せ つ た。

左

右

を見

渡すが、人影一つ見えない。

「あの、お、おぶっていきましょうか?」

困惑の色が浮かぶ。当たり前だ。 混乱した末に飛び出したのは、 そんな的 はず れな提案だっ た。 ヤ 日 1 0) 眉 尻 が 下 が

「あ、そっか……」

ヒロキが考えたのとはちょっとちがう心配だった。

たしかにそうだ。ヤヨイを背負って、 さらに 両手に 荷 物を提げて、 最低でも十分か Ŧi.

となると、ヒロキが誰か呼びに行くしかないが、ヤヨイ分か、歩かなければならない。さすがに無理だろう。

-を 置

()

ていくことに

な

る。

じき

に日も暮れるだろうし、 ヤヨイも心細いだろう。

た。 どうしたもの か。 携带 が使えないというだけで、 Ł \Box 丰 は 八方ふさがりに なっ てし ま

ョンを鳴らす。 運 転 席 からカワナが 顔 を出 した。

てくるエンジン音

があった。

見覚え

0)

あ

る

É

い車

が、

小さくクラ

そのとき、近づい

「よ。遅ぇからどうしたのかと思ってさ。「カワナさん」

お楽し

みなら放っとい

たんだけど」

205

車 から降りたカワナは、 すぐに状況を察してくれた。 後部座席を空けて、 荷物とヤヨイ

を手早く乗せる。

そのまま五分もしないうちに旅館に着い ヒロキを助手席に放り込むと、カワナはせまい道で器用にUターンをして車を出した。 てしまう。 玄関でヒロキとヤヨイを降ろすと

「おー、お帰り」

あっという間に駐車場に入れてしまった。

「あら、ヤヨイちゃん。どうしたの?」

味なところを見て、ユキがかけ寄ってきた。 ロビーでくつろいでいたヒトツモリとユキがむかえてくれる。 ヤヨイが足を引きずり気

「草履、こわれちゃって」

一ん? 見してみ」

ヒトツモリも立ち上がった。 ユキから草履を受け取り、 L げしげとながめる。 ヒロキは

その間に、ユキに言われてスリッパを取ってきた。

あっさり言ってのける。ヒロキは思わず聞き返した。「なんだ。すぐ直るよ」

「たいした構造じゃないよ。 布を通して結べばいいんだから。 ユキ、 なんかきれい目なが

らのハンカチとかない?」

「直るんですか?」

「売店で売ってるんじゃない? ヤヨイちゃん、見に行こ」

イスに戻ったヒトツモリは、 手際よく鼻緒をほどいて取ってしまった。 ほどなく、 ユキ

とヤヨイが桜のプリントされた手ぬぐいを持ってくる。 するすると結びつけて、 本当に草履をもとどおりにしてしまった。 ヒトツモリは それ を手

「はいよ。はいてごらん」

ぐいはびくともしない。 足を入れたヤヨイが、ひねったり、床を軽く蹴ったりして具合をたしかめる。 むしろ、ヤヨイの足をしっかりと支えているように見えた。 が、 手 ぬ

ヨイが目を丸くする。そして、表情をぱっとほころばせた。

「ありがとうございます。これ、気に入ってたから、うれしいです」 お安い御用よ。さ、メシにしよっか。ヒロキ、クスダさん起こしてきて。部屋で寝てるか

あ、はい」

声で、 ヒトツモリに言われ ユキとヒトツ ノモリに て、 ヒロキは お礼を言っ 部 てい 屋 に た。 向かっ た。 度、 振り返る。 ヤヨ イが華

B

いだ

胸の奥が、ちくりとざわめいた。

4 峠の語らい

夏の夜は、独特の空気を持っている。

丰 は女性部屋でガール 夕食を食べて、食休みをして、 ズトーク。 ヒロキたちはそれぞれ ヒトツモリとクスダは男性部 0 部 屋 に引き上げた。 屋 でお笑い番組 ヤ を見 \exists 1 てい とユ

る。

そんな 中、 ヒロ ニキは 人、 外に 出た。

真 つ暗な中に、 T シ ヤ ツ一枚で出られるというのは夏の特権だ。 上を見ると、

星空が広がっている。

落ち着くような、逆に不安が増すような、 変な気分だった。

「どうしたよ、ヒロキ」

る回していた。 背中から声をかけられた。 振り向くと、 カワナが立っている。 指先で車のキーをくるく

「反省、ですかね」 ヒロキは小さく頭

を

か

た。

「反省?」

「なんかオレ、情けないなって。 なんにもできないんだなって、 ちょっと思って」

を抱かずにはいられなかった。 夕方、コンビニから ばつが悪くなって、 ヒロキは小さくうつむいた。 の帰り道。 ヤヨイの草履の鼻緒

が切れ

た

件

から、

Ł \Box 丰

は

無

力 感

カワナがい なければ ヒロキとヤヨイは帰 ってこられ なかった。

気分を盛 ヒトツモリはきれいに草履を直してしまっ り立てていた。 帰ってからのヤヨイは、 たし、 家のことを口 ユキはヤヨイに にしたときのような、 あれこ れと話 L か けて

た 顔 見 せな か っつた。

どれか一つでもヒロキにできていれば、 と思わずにはい られなかった。

聞いていたカワナが、小さく首をかしげた。

「クスダさん、なんもしてねーぞ」

「海に来たのは、クスダさんが誘ってくれたからですよ」

「なるほどね。そういう考え方もあるか」

クスダの明るさは天性のものだ。夕食どきに一 番盛り上が っ たの ŧ ク スダが 昼間 0)

失

敗談を赤裸々に語ってくれたことだった。

B ってのけ ここにいる人だけではない。イケタニも る。 バ イト先で会うだけでも、 ヒロ ムロフシも、 丰 に は それ ヒロ が 丰 わ か にはできな た。 1 ことを簡 単 に

らされる。 周 りはみんな大人だ。 だからこそ、ヒロキは自分がガキで、 何もできない のだと思 知

した。 そう思うと、無性にくやしい。 ヤ カワナは少しの間、 - ヨイが ?春か 75の 進路 考え込んでいた。 の話をしたときだって、 先輩たちがどうこうではなく、できない自分が腹立たし が、 やがてヒロキの肩をたたき、 他の人ならうまく話をできたの 自分の 車を指 だろう。

「乗れよ」

返事も待 たず に 運 転席 に 入ってい Ł П 丰 は 洣 つ たが、 言 ゎ れ たと お り に 助 手 席 に

座った。

「なんつー

か、

お

前

ちょっと俺に似てるわ

の音だけが聞こえ、 車 は 山 道を通って、 静 上へ 寂が訪 と向 れる。 か *?*う。 力 ワ ナ ĺ カーステレ オを切っ た。 車 内 に は 工

ンジン

ぽつりと、カワナがつぶやいた。

俺だって同じだよ。周りの人に比べるとテキトーで、ごまかして生きてるなーって思う

せ。たいしたこともできねーでさ」

「カワナさんが、ですか?」

ヒロキには、にわかには信じられないセリフだった。

カワナを見ていると、いつも自信と余裕が感じられる。

あ

わてたり、

失敗したりしてい

るところは、ヒロキは見たことがない。

カワナが真剣な顔をしているところも、 実は見たことがないことに、 ヒロ 丰 はこ

「イケタニさんとヒトツモリさんは、のとき、初めて気がついた。

度、 主任になる昇進試験を受けるはずだ。 ヒトツモリさんもそのうち受けるだろうな。 ユ

正社員としてまじめに働いてる。イケタニさんは

 \Rightarrow

キさん、養ってくつもりだろうし」

さびしいというか、 前を向いたまま、 カワナは続ける。その横顔 もどかしいというか、 沈み気味 に、 ヒ の浮かな 口 丰 は共感するところが ζ) 顏。 自分がそんな顔 ?あっ た。 をし

ていたのだろうと、根拠もなくわかった。

ちゃ 「ムロさんは小説家をめざしてる。 んと勉強してるぜ。そっちの用事でバイトを休むことも、 クスダさんはカメラマンだ。二人とも、 たまにあるからな。けど、 目標を持って

はそういうの、一つもねーのさ」

俺

力

ワナが笑った。

力

0

ない笑みだった。

つものカワナは、 こんな顔は決して見せない。 ひとに、 ましてや年下のヒロキに . 弱 み

を見せるようなことは 絶対 に な

П キはカワナから目を離 せなかった。

「今は準社員で、 ちょっとはな」 いつまでメカにいるかもわかんねー。 そのうち正社員に な るかもな。 俺はそんなんだ。 ならね 1か だからわかるぜ。 ŧ どっちも理 お前 由 0) が 気持ち、 ね し

ヒロキはただ呆然と、 運転するカワナを見てい た

知らなかった。 カワナでも、そんなことを考えるのだ。 周りと自分を比べて、不安になっ

たり、 自己嫌悪したりするようなことがあるのだ。

ヒロキにとっては、

なのに、 ヒロキと同じような感情を抱いている。

カワナも他の先輩たちと同じく、

尊敬して、すごいと思う相

手だ。

あ

る意味では、

ヒロキより根深

()

ヒロキは今日、

ヤヨ

1

の 一

件

:があっ

たから実感

た

のだが、 カワナはもっと前から、イケタニたちと仕事をしている。

その間 、ずっと感じてきたのだろうか。

ヒロキは思い切って聞いてみた。

「だって、気にしてもしゃあねーもん」 カワナさん、どうやって納得できたんですか?」

カワナの口調が、いつものものに戻った。

俺には他の人たちみたいなことはできね 1 h だから。 無理 に まね したっ て、 どつ

メになる。だからやらねーことにした」

あっさりと、 カワナは言ってのけた。 それ は女性がめ んどくさいとか、 そういう話 をし

か

でダ

ているときと同じ調子だ。

投げやりなわけではなくて、カワナなりの考え方がのぞく言葉だった。

見つからねーかもな。 「少なくとも今は、メカにいようと思ってるし。そのうち、なんか見つかるかもしれ けど、なんだかんだで生きてく。そういうヤツも世の中にいる。

そこでふと、 カワナはヒロキのほうに目を向けた。 人がどう言おうと知らねー。今はな」

「時間が経てば、意外に考えるもんだぜ」

ロキと同じ時間を、ヒロキより先に過ごしてきた男の人の、実感のこもった一言だっ

た。

はいうものの、今は街灯もほとんどなく、真っ暗だ。 ヘッドライトが異様に明るくあたりを照らす。その光の輪の中に、 車 ·が山頂に着く。少し広くなっているのは、展望台がわりになっているからだろう。 景色など到底楽しめない。 いくつもの車と人影

が見えた。

カワナが不思議そうな顔をする。向こうも眉をひそめてこちらを見た。と、 何人かが 近

づいてくる。

「どこの人? ここ、 俺らの道なんだけど」

「今から使うから、帰ってくんない?」

よくわかる。 元の青年 ヒロキは緊張に肩をすくめた。 の集まりだろうか。 険悪とまでは言 1 わ な いが、 部外者を歓迎し てい な のは 緷

席

からは、

カワ

ナ

0

軽

1/1

調

子

 \mathcal{O}

声

がした。

П

力 ワ Ť 0) ほうは、 軽く受け 流 7 い る ように 見 える。 そ 0) \Box 元 に に 8 りと大きな笑

み が 浮 んだ。

いぜ。 俺をちぎれ たらな」

青年たちの 顔色が変わった。 明ら か に、 好 意 的 では な い 感 情 が 表 れ る。

カワナはすました顔 で車を進め た。 と 青 年 ŧ 重 に 乗 ŋ 込 む。 低 くうなるような、

荒

Þ

エンジン音が Ł 口 丰 0) 耳をつら ぬ い た。

どう聞いても、 普 通 0) エンジンだとは思えな

力、 カワナさん?」

「心配すんな。ただの走り屋だよ。 なぐられたりしねーって」

カワナは気負った様子もなく、 山道を下っていく。 その後ろから、

ッツ

K"

ラ

イ

1

0)

灯 n

が見

る見

るうちにせまってきた。

さく

7

に 小 黒 い 車 なっ · 体が、 い ものすごい勢いで横をすり抜けていく。 っ た。 赤 い テー ルラ ンプ が 輝 1

て、 あ まりのスピード 危ないことぐらい に、 わ か ヒロ る。 + それ は 言 をあ 葉を失う。 んなスピー

夜

 \mathcal{O} F. Ш

> 運 転

0)

できな

口

だっ

で走っ 道だ。

ていくなど、

考 V

えら Ł

n 丰

な に

わし、 なまってるわ。 ちょっとマジメにやるか」

言うな 丰 。 中 り、 に、 力 ワ 小さな恐怖が芽生え ´ナがア. クセル を踏 7 る。 込む。 スピード が が り、

力

ブ

で

0)

荷

重

が

増

L

先 行 L た 黒 い 車 は 見 え な V あ 0 スピー F, 0) ま ま 走っ 7 V つ たらし

V くつかカーブを曲がったところで、 カワナが を 開 い た。

Ł ロキ。 ベルトしてるな?」

「じゃあ、 背もたれに 身体押しつけて、 窓の上の ハンドルに 両手でつか ま れ。 足 は 思 V 切

り踏 ん張 る。 〇 K ?

をうかがう。

言われたとおりに、 ヒ ロ 丰 は身体を固定した。 何 が 始まるのだろうか。 ちらりとカワナ

んじゃ、行くぜ」

カワナはヒロキの体勢を確認して、一つ、舌なめずりをした。

その言葉と同時に、カワナがアクセルを限界まで踏 み込んだ。

エンジンがものすごいうなりを上げる。 急加速に 身 体 が押さえつけられ、 暗 闇 が 気に

せまった。

今までとは恐怖感がまったくちがう。 Ł 口 丰 は思わず悲鳴を上げた。

カワナさん!」

あー、しゃべんな。舌かむから」

変わった。 いきなり身体が前に吹き飛びそうになる。 カワナの手 の中でハンドルが信じられな と思ったら、 い勢い その力 . で 回 転 の方向が シフ トレ 瞬で横 バ Ī が 向 ゴリ きに

ゴリと異音を立てる。

ロキの 悲鳴より、 タ 1 ヤ 0) スリ ッツ ŕ 音 0) ほ うが は るかに 大きい。

「グリップ悪いな。 まあ、街乗りの タイヤじゃこんなもんか。 コーナーはたいしたことね

ま 早 U に カ ワ い シ ノナは 速さで フ \vdash 額 動 色 バ い] つ変 7 を い 入 くえな た。 れ 替 え る。 右 手 Ł で \Box 丰 11 に ンド は ル 見 を振 え な り回 か つ た すように が 左 ダ 右させ、 ル を操 作 左手 す á は 足 矢 す

トコ 右 方の 1 に 引 ス つ タ Ł ぱ 1 口 5 でも 丰 れ は 経 た 験 かと思えば 気を失わな L たこ と 0) V だけ 次 な は い 左。 よう でせ その な V 勢 V たび つ い で ぱ 身 に 1 悲鳴 だ。 体 が 振 力 0) ようなタイヤ 1 り ブ 口 さ を <u>i</u> ħ そう がる のきし たび に な に、 4 が ジ V 工 ツ

何 最 初 に 吹き 抜 飛 1 7 ば いっ されそうに た黒 1) 車 なっただろう だ、 カワナ は か。 追 前 1 0 方 V に た 赤 0 V だ。 光が 見 えた。 車 0) テー ル ラ

夜

0)

Ш

道

で、

前

が

ま

るで

見

え

な

い

0)

ŧ

恐怖

を倍

増

させ

る。

去った。 なってい さらなる 加 4 谏 がて黒 が Ł \Box V 丰 車 をお 0) こそっ 横 にならび、 た。 Щ 0) 中 カワナは を蛇 行 ŧ す る 0) も言 赤 V lわずに、 光 が、 あ そ つ 0) と ま W ま う 相 間 手 に を 大 きく 抜

うこうするうち ヒ 後ろから照ら を渡されたときだ 口 丰 が 我 に すっ 返 に、 つ ッド 荒 た 々 O- ライ は、 しい 夕 エンジン音も聞こえなくなる。 \vdash 方、 が 買い 瞬 のうち 出 しに来たコンビニの駐車 に小さくなって、 やがて、 すぐに見 場 で、 道 は 力 えなくな ワナ 亚. 坦 に か 5 な つ た。 つ 缶 コ た。 そ

お つか れ

っ

た。

たことに 頬 に 押しつけられた 気がつ い た。 缶 0) 冷たさに 飛び上がる。そこでようやく、自分が 硬 直 た ま ま だ

ない。 おそるおそる、 冷たいコーヒーを口にふくんで、ヒ 缶コーヒーを受け取る。 プル 口 キは生きていることを実感した。 トップが指 に何 度も 何度もすべっ て 開 か

「気絶しなかっただけ、たいしたもんよ」

「自慢していいですか……」

「いいよ、しろしろ」

カワナが笑う。つられて笑おうとしたヒロキだったが、 顔が引きつって無理だった。

臓は 走り屋という言葉は いまだに、全力疾 聞いたことがある。 走の後よりもはげしく脈打ってい マンガや雑誌でたまに目にする る。 į

友達

が

話

だが、見ると聞くでは大ちがているのも聞く。

だが、見ると聞くでは大ちがいだ。 ただ助手席に座 っていただけで、 頭が車 0) 天井 に

れたことなど初めてだった。

「カワナさんも、走り屋とかやってたんですか?」

口キは首をぶんぶん振った。 ちょっとな。知ってる道ならもうちっと飛ばせるぜ。今度行く?」 もちろん横にだ。 あんな体験、一 度でもじゅうぶ

る。

Y \Box あ キには 0 黒 1 車 知る由もな は追ってこない。 いが、 カワナが相当の カワナが振 り切ってしまったのだろう。 腕 前 の持ち主だとは想像がつく。 走り屋 0) 技 術 など

ったい メカニックとは、どんな人間の集まりなのだろうか。

ちっとは わかった? こんなんでも、なんとか社会に出て生きてて、いろいろ考えてるっ

てこと

248

ふと、 カワナがそんなことを言った。 車 はゆ つくりと、 旅 館 に 向 か つ 7 V る。 カワ Ť

は

前を向いたままだ。

「なんとなく生きてるのも、 ながら考えてもいいんじゃね 「 つ ? 目標を決めてるの 高一があせんなって」 も、 お 前 のそばに () る h だ か 50 そ れ を 見

それはカワナなりの、 はげましだと思った。

ヒロキ . の 周りには、 , V) ろいろな人がい る。 学校の・ 友達もそうだし、 先生もそうだ。 親 戚

ŧ れば、 ちがう学校に 先輩 通っ ヤヨイもいれば、 ている友達も いる。 V

X

カニックの

が

()

る。

ユキ

ŧ

る。

て の

先は

もっと、

~"

つの

人と

出会うかもしれない。 もしかしたらそのうちに、 もと走り屋で、 お L B れでナンパ が 得 意な先輩 に あ こが れて

めざす日が来るかもしれない。 オレもカワナさんみたいになれますか?」

免許取ったらな」

い かわらずの軽 1 \Box 調で、 カワナは秘訣を教えてくれた。

+ 八を過ぎたら、 免許を取ろう。

П キはその夜 とり あえず一つ、 目標を立ててみることに した。

NONSTOP

マとしていただい

た。

ここでは 本 誌 掲 載 Ł 作の Ź れ ぞ ħ に つい て 解 説する。 第三 号 であ る今 □ は 「夏 休 み を

クローバー』入江棗

人間関

係

がを描い

ていくシリ

ĺ

ズ。

中 - 学三年生の千伽、 「気難 しい 地主の息子」 塚本楓、 千 伽 0) 幼 馴 染 の孝士の三人が育 む

出 と友情 公たちが話 涼 てきた三人組。 東京 しさ、 に į, 進路問題といった要素が見え隠れしているのがポ くぞ 0) そこに象徴 メインだが、その一方でひそかに ŧ そんな楓 0) され B ずら る葛藤と成長を感じたような気がする。 ī の唐突で強引な い 風景や地 元との 一言 青 1をきっ 違 春 小 い に 説 か 的 力 いけに、 ル イント。 なテー チ ヤ 1 N 7 夏の シ 市 ——男女 か Э 5 楽 ッ クを受 大 ï さの 0) 都 違 奥 け に や恋愛 る 東 主 京 人 秋 に

『Dear My Life』貴水玲

ズ。 た出生の秘密、 の母校に進学した花を三つの そして素敵な男子との出会い 衝撃が襲う。 「お嬢 実に「ザ・少女小説」 様学校」という世界、 な展 開 自分に 0) 0 隠され リー

スト ことから新 今回も少女小説 リリー ,い年した大人であるところの私は見ているだけで恥ずかしくなるような(ほめ言葉; になっている。そうしたお約束的 たな男子と知 ノリは全開で、アルバイトをすれば校則絡みでピンチに り合ってトラブ ルに巻き込まれ、 展開を踏まえつつ、 しかし満を持して本 一方でさりげなく主人公 なり、 命 V が ょ 登 h 場 な

に

にニヤ

ij

の成長を描いているのが嬉しい。

。やろうぜ!』土本強

は空中 うに 5 は 高 再 ゲ 校 1 分 び ゲー 解 年 \mathcal{L} が 0 生 ム作りに 売 危 0) れ 機 中 を乗 な 村 い لح 突っ走ることにな のは、 り越えて、 田 尻 ビジュ 副 担 新 任 た アル 0) な 棤 る。 が不 課 井。 題 に 足 「やろうぜ!」 して 挑むことに いるのでは になる。 精 神 で ゲ 新 度] た 目 な O \mathcal{L} 作 挑 仲 間 り 戦 に を で ŧ 加 励 え 思うよ む 三 彼

ラな か IJ 'n バ \Rightarrow お気 1) 0) 口 な だ 0) に ポ 0) ろうが、そうし で、 入りのキャラになってしまった。 イントはその新キャラ、 そちらがお気 た画 に 的な言葉では表現できな 入り 0 真島だろう。 方の 期 もちろん、 待もはずさな 表現するなら「クール」 い心情や熱意が 今回も横井先生は隠れオタク臭バ 1 伝 わっ か 電電 てきて、 波 丰 す ヤ

From·N』番棚葵

騒

動

に

巻

き込

まれる。

物 を 田 舎 .. つ に てやろうと考え うんざ りし 7 V る 0 幼 か 馴染 出 て行 σ 来夢。 ってや ろうと考え 彼女に引きずられ、 る隆 也と、 隆 Z 也 h は な 今日 田 舎 Ł だ 町 からこそ名 おこし」

開 5 あ に \Rightarrow 警 げ 口 き 作 0) 戦 7 町 で おこしテー 話 最 題 後 づくりをしようとする二人だが、 に 7 L っ は夏 か 休 り シリー 4 らし ر ا ا ズ全体のテー 怪談」 あ る どうも マと主人公の成長 いは 「オ 様子が変で…… 力 ル <u>١</u> - ° に 口 前 収 ? 口 す と á 予 同 想 構 U 成 外 < 0) な で 妙 つ

『響け、私たちの歌声』広野未沙

部 なる試 に入ること まずし 練 に遭遇することに……というお 7 お 嬢 前 様学校に入ってし 回 ひかりとの まっ 友情 話。 を確 た 有 認 香 した は、 クラスメ 有 香は 1 ほか 1 0) 0 学校と V か り に 0) 合同 誘 わ 合 れ 宿 7 で 合 更 唱

を繰 のだな、 り返しながら、 口 0) 話 ということ。 ではっきりしたい 周 りが見えるようにな 思春期、 のは、 青春 時代は て の シリー いってい 視 野 ・ズは が狭くて当たり前。 < その過程 主人公の がし 視野 み 成 が じみ 功し 広が と伝わってくる。 つ たり失 7 い 敗し く 話 た

平行線シンドローム』水島朱音

ر ر د 葉月 彼女 メインに \Rightarrow への思い は マとシチュエーシ 回 年 彼はどこにいってしまったの · 以 内 さっそく彼を探 なっ 日向探し」という物語のテーマからはちょ 人である塚 に僕を見つ てい る。 本日向 す ョンの重 け けることが Ú れど、 れど、 が返したのは、 彼女の ね か? なぜか大きくもな あわせがうま できたら、 中 そして、葉月は では今 そんな謎 返事 . 0) 状 を V す 況に対する複雑な思いがあって……。 っと外 N めい る 本当に彼を探すべきなの 市 で日 た言葉だった。 れて、 卒 向 業 を 式 葉月 見 0) つけ \exists のアル 0) ること 高校生 葉 月 バ 0 イト か? に は 告 なった で きな 話 が

ターニング・ポイント』諸星崇

平. 凡な少年ヒロキとダンサ ーを Ī [指す 少 女ヤ \exists イ の微 妙 で Ħ 酸 つ ぱ い 関 係 7 それ を

りと (面白半分で)暖かく見守るバイト仲 間 の面々を描く、ささやかでにぎやかな物 語。

現実離れというほどに私たちの日常から離れてはいない。そんな物語の中で、ささやかに 個性が立ちすぎとか、ヤヨイはやることなすこと可愛いとか、そういうところはあっても、 ノリで始まる今回も、 海に行こう、ただし女を連れてくるか、 特別なことは基本的に起きない。まあメカニックの連中はそれぞれ 現地で調達すること――そんないかにも若者的

描

かれる葛藤と成長が楽しい。

2011年02月21日 発行

著 者 入江棗/貴水玲/土本強/番棚葵/広野美沙/水島朱音/水面浮月/ 諸星崇

企画・監修 榎本秋

発 行 所 株式会社榎本事務所

〒 179-0076

東京都練馬区土支田 1-29-12 ファミール光が丘 102

電話 03-6750-6341

表 紙 伊藤由希 (AMG 出版工房)

イ ラ ス ト ヒトエ、仔樺、伊藤由希、U35、うらら、正午あきら、新月竜、橘ぽん (すべて AMG 出版工房)

協 力 脇功一、三浦奈緒 (アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科)

本マガジンの配布、複製は不許可とする。